
闇と光

桜咲 雫紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇と光

【Nコード】

N9942S

【作者名】

桜咲 雫紅

【あらすじ】

平和で豊かな光。

争いが絶えず、殺人、窃盗が日常茶飯事な貧しい闇。

この二つの世界を巻き込む大きな戦いが始まる。光に生まれた少女と、闇に生まれた少女が出会ったことから。

幼き頃心友と呼び合った。ずっと一緒にいると思っていた。この幸せな時間が永遠に続くと、無邪気に信じていた。己の背負ってきた宿命を気にせず生きられると。なのに・・・

「光を潰す！」

「どうして・・・どうしてこうなる。私はっ・・・あいつと戦いたくないのにッ」

運命の齒車はもう止まらない。

動き出したこの定めを止める事は出来ない

第一話 後継者（前書き）

プロローグ

「ったく、無駄な時間くつちまった」

一人の女の子がそう呟き小路を歩いてく。その女の子の後ろには無数の屍（見える部分はほぼ赤黒い痣に覆われてる男五人）が倒れている。男の中の比較的軽傷の奴が「なん・・・で・・・こんな子供に・俺らが・・・」とか言ってるのをきれいに無視し、大通りに出る。

「おや。もう終わったのかい？いつもすまないねえ」

そう言ってこちらに歩み寄ってくる男。この大通りでお店をひらいてる人だ。名は桐樹^{とくき}。みんなには桐じいさんとか桐じいとか呼ばれ方は様々だ。

「いいんだよ、桐じいには世話になってるから。こんくらいしなきゃ」

少し嬉しそうに微笑む女の子。桐じいは女の子の頭を撫でて、

「でもいいのかい？今日は大事な用事があるんじゃないの？また怒られるよちゃうよ？」

手で口元を隠し含み笑いをしつつ腕時計を見せる桐じい。女の子は腕時計を見て、

「・・・ヤバッ・・・。殺される〜！！またね桐じい〜」

そっぴいながらもものすごいスピードで走っていく女の子。それを見送りながら桐じいは、

「転ばなきゃいいけど・・・。」

第一話 後継者

「ヤバイヤバイヤバイ。ぜつつつつつつたい怒られる〜てか最悪殺される〜」

叫びながら全力疾走している女の子。名は優香。十四歳。肩まである黒髪に好奇心に満ちた黒目。いつけんどこにでもいる普通の女の子。だが、似合わない刀を腰に一振り、左肩にもう一振り斜め掛けしている。

「このままじゃ間に合わない……。どうしよう……。どうしよう……。そうだ！」

大声を出し何事かと振り返る人々をしりめに人気のない小道に入り、「ここなら誰も巻き添えにしないで済む」

目を閉じ集中する。全然みえないが、彼女は魔導師なのだ。不可視の力で上着がはためく、優香は叫んだ。

「風よ！」

瞬間すさまじい風が巻き起こり優香の体は宙に浮かんだ。

「定例会の会場、光城（ひつじょう）に行け！」

優香は鋭く命じ、風は命令通り目的地へ。

定例会会場 光城

火・風・雷・水・この四ヶ国の中心、光城。周囲を湖に囲まれた光り輝く美しい城。

この光城は、主に国同士の会議や月に一度の定例会の会場として使われる。

今日はその四月分の定例会がある。のだが……………

「あいつはまだ来ないのか。もうすぐ定例会が始まるというのに……。まったく……」

時計を見ながら呟いている男、名は緋寒（ひがん）。火の国の現当主である。

「まあまあ・・・落ち着いてください。まだ十時にはなつてませんから」

そう言いつつ緋寒をなだめる黒髪くろかみの青年、名は零れい、十七歳。優香の兄である。道行く女性が必ず振り返りそうなほどカッコイイ。妹の優香にはとても甘い。第一部隊隊長。

「相変わらずだねえ。火の後継者は・・・」

呆れ混じりに呟く男、名は聖藍せいらん。水の国の現当主である。

「あいつらしい。そう思うでしょ？美麗ちゃん、竜也」

笑いながら隣の男女に話しかける女の子。名は凧なぎ、十四歳。水の国の後継者である。冷静冷静かつ無愛想だが“親友限定”で優しい。

工作人員の隊長。

「そうだね」

苦笑しつつ応じる眉目秀麗な男の子。名は竜也じゅうや、十四歳。水の国後継者の守護者である。髪は漆黒で、その笑みはそこの女性なら五秒でオトセそうなほど・・・まあ本人はやったことないけど。真面目で几帳面。第二部隊隊長。

「やっぱこうじゃなきゃね」

穏やか＋平和そうな声で断言した女の子。名は美麗みれい、十四歳。雷の国の後継者である。マイペースでおとなしいがときどき怖い言動をとることが・・・治療部隊隊長。

「美麗・・・それはあまりにも無責任すぎるよ」

うるたえながら美麗の言葉に小声で反論した男の子。名は優也ゆうや、十四歳。雷の国の後継者の守護者。竜也と同じくらいの容姿ルックスの持ち主。性格が控え目なため他人に強く言えないのが玉に瑕。だが友のためなら普段見せない強さを発揮。第三部隊隊長。

「確かに優也の言うとおりだ。美麗・・・お前少しはあの火の後継者を止める。友達なんだろうが・・・」

そう言つてため息をつく男。名は翡翠ひよく。雷の国現当主である。

「いいじゃないですか、元気があって」

薄く笑って翡翠をいさめる男。名は風華ふうか。風の国現当主である。

「風華！お前までそんなこと言って……」

「二人とも、魅希のために争わないで」

そう言いながら二人の間に立った女の子。名は魅希^{みき}、十四歳。光の国現当主である。（優香を除いた）自他共に認める美少女だが、ナルシストで自称“世界一の美少女”らしい……。第四部隊隊長。翡翠が何か言おうと口をあけた

ガッシャーーーーーン

ドサッ！

突然窓ガラスが割れ、黒い塊がふってきた。そしてその塊は起き上がって

「痛つ……たく……怪我したらどうすんだか、まあいいや。なんとか間に合った」

そう言って立ち上がった塊は、周りを見回して

「どしたの皆？私間に合ったでしょ？」

ほとんどの人は（そういう問題じゃないから）と心の中で言うだけにしているが、

「そういう問題じゃない！お前は毎回毎回なんで遅刻ギリギリに来るんだ！！時間に余裕を持てと何千回言わすんだ！」

「そんなに怒らなくてもいいじゃんか」間に合ったんだし、緋寒に文句言われる覚えはないね」

「緋寒と呼ぶな！ここ（光城）では当主と呼べ！これも何千回言わせる気だ！」

「火の当主と優香ちゃん、そこまでしなよ。定例会始まるよ」

そう言って二人の間にわって入った女の子。名は燈架^{とうか}、十四歳。風の国の後継者である。芯が強く、心優しく、とても友達思い。弓兵隊と魔法使い部隊の隊長。

壁に掛けてある時計を見ると、もうすぐ定例会が始まる時刻になる。緋寒は仕方なく説教を中断して、自分の席に座る。そして厳かに「各国の後継者は別室で待ってなさい。では、今から定例会を始める」

後継者控え室

ここは、光城の七階にある後継者達の控え室。中は質素で装飾品は一切ない。壁の大半を使ってる本棚には、優香と竜也と優也が家から暇つぶしに持ってきた本がたくさん置いてあり、床には魔法書や刀、剣、弓矢などが散乱している。

「はあ。どうせこうなるのわかってたんだから、来なきゃよかった。失敗した」

優香はため息混じりにそう呟いた。ちなみに優香は全部隊の最高指揮官だ。見えないけど

「優香っていつもそう言ってるじゃない？」

呆れ混じりにそう言った風。

「確かに」

笑いながら同意した竜也。何も言わないが、竜也の隣に座っている優也も同意見らしく風の言葉に頷いている。

「まあそう言いながら来るのは優香ちゃんらしいよねえ」

美麗ちゃんはお茶を飲みつつのんびりした口調で言って、燈架も

「そうだね。優香ちゃんは定例会サボったことないしね。私は一回サボったけど」

「魅希は定例会なんかよりメイクしてたいのに、優香が邪魔するんだよ」

「お前はメイクより剣技を磨け」

若干怒り気味な優香。

「メイクのが大事だし」

そう言って早速メイク道具を取り出す魅希。ついに優香がキレて、

「魅希もう一度今の言葉言ってみな。ほら、早く」

「ちよつと待ってて、このメイクが終わったら・・・」

『ブチッ!』

「おや?なんの音かな」

竜也が若干引き攣った笑みを浮かべつつ後退する。みんなも同様にゆっくりではあるが後ずさる。彼らは経験上知っているのだ。この

後なにが起こるか、この自称美少女にどんな不幸がふりかかるか。案の定優香が魅希に掴みかかり、魅希はメイク道具をしまいつつ優香の攻撃をあしらってる。

「おい！逃げんな。この自称世界一の美少女とか言ってる馬鹿魅希が！」

「違うよ！自他共に認める世界一の美少女女神の魅希だよ！」

「ふざけんな。その自慢の顔を変形させてやる！」

「えっ？魅希は整形しなくても可愛い？やっぱりね」

会話がかみ合ってるようでかみ合っていない。笑いそうになるのを必死に堪える凧と竜也。今笑ったら確実に火の粉が降りかかってくる。こんなくだらない事で寿命を縮めるなんて馬鹿げてる。

「やめなつて。優香ちゃんに魅希も」

「二人とも、喧嘩はよくないよ。お茶でも飲んで落ち着きなさい」

二人の穏やかな声が止めに入るが、時すでに遅し。もう誰にも止められない、と覚悟したそのとき、城内に警報が鳴り響く。それに覆い被さるように

『敵襲！敵襲！各隊の指揮官および最高指揮官は至急会議室へ。繰り返す』

優香と魅希は喧嘩を止め、全員は緊張した面持ちで会議室へ。

《その十分前》

各国の当主は自国の一ヶ月間の出来事を報告し合っていた。報告と言っても、一ヶ月でたいした事が起こるわけもなくもっぱら大人達の雑談タイムになっている。例えば自分の後継者を自慢したり、新しく開発した武器の性能を話したり、今度の最高指揮官は戦士をまとめられるかなど。そのとき

『敵襲！敵襲！各隊の指揮官および最高指揮官は至急会議室へ。繰り返す』

敵襲を告げる緊急放送が流れ、緋寒が

「後継者達を呼べ」

と言ったのと同時に、ドアが開いて

「敵襲だ！会議はいったん中止にしろた方がいいぞ」

という優香の声がほぼ同時に放たれた。

「わかってる。最高指揮官優香！これより一万の兵を伴い、闇を追い出してこい！」

「了解。行くぞみんな」

優香がそう言うのと各々から力強い声がかえってきた。

「優香。深追いはするな。光から追い出したら、そのまま待機だ」

「わかってるよ。口うるさいな」

にっと不敵な笑みを浮かべながら走っていく。

第二話 再会（前書き）

光城の七階（最上階） 定例会会場

「あいつは今頃出撃準備している頃か」

窓から外を眺める男、緋寒^{ひがん}は少し悲しそうに呟く。足元にいる普通のより大柄な紅い瞳の狼が、主人を気遣うように足にすり寄る。

「でしょうね。今隊列を整えてるらしいですよ」

緋寒の言葉に頷いた男、風華^{ふうか}は銀色の瞳の白虎^{びゃっこ}の頭を撫で、そう言い「ああ。俺のもそう言ってるぞ」

蒼い瞳の川獺^{カワウソ}を肩に乗せながら歩み寄ってくる男、聖藍^{せいらん}もそう言った。

「ところで、緋寒。なんで悲しそうな顔してんだ？」

深緑の瞳の猫を抱き上げながらそう言った男、翡翠^{ひよく}翼。

「なんでかな、俺にもわからない・・・」

外は見とれるほど綺麗な青空。だが反対に緋寒の心は曇りのまま、晴れることはなかった。

第二話 再会

《その頃の闇の軍勢 黒軍》

優香達が出撃準備を始めているとき、闇の軍勢は光の国土に侵攻しようとしていた。闇と光の国境線にある通称『紅の森^{くれない}』に闇の軍勢は集結していた。

その軍から少し離れた所にある木の根元で、一人の男の子が懐かしそうに森を眺めていた。昔よくこの森に息抜きに来ていたことを思い返していたのだ。それと、その頃知り合った女の子のこともだ。無鉄砲で無茶苦茶な女の子。名前は忘れてしまったが、その女の子がいなければ今の自分は多分いなかっただろう。今でも鮮やかに思い出せる。

七年前のことだ。その日は珍しく一日中暇になったから、朝から『紅の森』に行くことにした。着いたら早速いつも座ってる木の根元に、いつものように座ってのんびりするはずだった。だが突然足音が聞こえた。（こんな森に来る物好きが他にもいたのか。）そう思いつつ足音のする方向を見る。そこにいたのは自分と同じぐらいの女の子が一人。女の子もこっちに気づき近寄ってきた。そして「竜也？なんでこんな所に……」

（いきなり話しかけてきて人違いかよ。てか竜也って誰だよ）そう言いたいのを堪えて

「人違いだ」

少し冷たくそう言ってそっぽ向いた。こう言えば、たいていの奴は怖がってどっか行く。こいつもどっか行くだろうと思っていた。だが女の子は平然と俺の横に座り

「竜也じゃないの？じゃあ誰？なんで竜也と同じ顔なの？」

（俺が知るか！というかなんで俺の隣に座る?!）と思いながら、無愛想に

「俺は克弥だ」^{かつや}

「克弥ね……。私は　　って言うの、よろしくね。克弥君」

「よろしくね。じゃねえ！お前人違いしたこと忘れてんのか？」

「そうだったわけ？ごめんね、克弥君」

そう言っただけで笑った女の子。初めてだった。今まで俺に近づいてきた奴らは、外見だけで寄ってくるバカ女共が、媚を売りに来るアホな男共しかいなかった。そいつらも、俺が少し冷たくするとすぐ離れてく。なのにこの女の子は、冷たくしても、怒ってもどこにも行かず笑ってた。それから一ヶ月間、時間があいたら女の子と一緒にすごした。あの女の子のおかげで、俺は笑顔を取り戻せたんだ。

昔の思い出に浸っていたとき突然

「兄さん。こんなとこにいたんですか？」

「克弥様。そろそろ進軍の準備をいたしませんと」

「ああ。そうだったな」

やる気なさげに呟く克弥。年は十四歳。闇の火の国後継者である。

神弥の兄で、竜也に瓜二つ。だが髪は明るい茶髪。いつも軽い口調で本心が読めない。闇の国では彼氏にしたい人四年連続No.1。

闇の最高指揮官。

「すぐに準備しましょう」

克弥にそういった男の子。名は守弥^{かみや}、十四歳。克弥の弟で、髪は黒。紳士的な好青年である。口調はいつも敬語。兄に負けまいぐらい力ツコいい。最高指揮官補佐。

「ほら兄さん。早く指示を出してください」

「わかってる」

気だるそうにそう言い、よく通る声で

「全軍突撃。狙いは各国の当主および後継者だ！他の奴はあまり傷つけるな。わかったな」

「おお！！」

遠くからは別の指示が聞こえる。

「奴らに我らの力を思い知らせてやれ」

そして次々と光に侵攻していった。

《その頃の優香達》

優香は隊列を整える味方を見ながら

「はあ。戦いか・・・」

と呟き重いため息をついていた。全員の命を預かるにはまだ幼すぎたし、経験も足りていないのだ

「誰も死なないでほしい」

叶わないとしりながらもそう呟いた。

「優香。そろそろ出陣だ。命令を」

竜也が優香の頭を優しく撫でながらも指示を仰ぐ。優香は頷いて大声で

「・・・先陣、突撃準備」

優香の後ろで味方が武器を構える。そして前方に敵が見えた瞬間

「先陣突撃。私に続け！」

そう言い真つ先に飛び出していく優香。後ろから

「火の後継者優香に続け！」「みんな遅れないようにね」「みんな

魅希のために頑張つて」^{みき}「火の後継者の周りを固める」

そう言いながら優香に続く竜也、優也^{ゆつや}、魅希^{れい}、零。その後を味方の兵士たちが追いかけてゆく。優香が敵の先陣に斬りかかり、その後を追う、竜也達が敵の先陣を斬り崩していく。斬ると言っても、殺さない程度に打ちのめすだけだ。敵兵の何十人かが一気に叩きのめされた。それを見た敵兵達が

「つ・・・強い・・・おい！大人数で囲め」

周りにいる闇兵に呼びかけ、十数人で優香達を囲んだ。優香達の近くにいた光兵も負けじと

「後継者様方をお守りしろ」

と怒鳴りながら優香の近くににいる敵兵をなぎ倒していく。すると、敵の指揮官らしき人物が

「お前らは他の兵を足止めしておけ！その中にいる後継者は俺がや

る」「皆さんは巻き添えにならないよう下がっててください」

そう言い放ち優香達の前に現れた二人。

「お前らが最高指揮官と副官か」

「ご名答。御初にお目にかかります、光の最高指揮官様とその副官様方。僕の名前は守弥と申します。以後お見知りおきを。そしてこちらが「俺が神弥の兄で闇の最高指揮官の克弥だ。よろしくな」

丁寧に自己紹介する弟の守弥を遮って、友達に名前を教えるように、じつに気安く名乗ってくれた兄の克弥。正直兄弟とは思えない。

「・・・で、最高指揮官さんと副官さんが何の用？」

睨みつつ優香が兄弟に聞くと

「俺らの狙いは後継者と当主。ここまで言えばわかるよな？」

「なるほど・・・やってみな」

瞳が徐々に紅く色変わりはじめる。不敵に笑って桜色の魔剣を構える優香。克弥が

「お前が後継者か？」

と言うと優香は、上に羽織ってた服を脱ぎ、服をまくり左肩を見せる。そこには紅い色で『火』という字の刻印が・・・それは、生まれたときから体のどこかにある後継者の証

「これでも信じられない？」

「なるほど。本物みたいだな。お手並み拝見」

そう言つて緋色の魔剣で斬りかかってきた。受け流しながら蹴りを放つ。が、克弥はこれをあつさりかわし、横殴りの斬撃ざんげきを叩き込む。受け止めて、そのまま突きに転じる。それを避け双方再び斬りあう。そこに零が来て、克弥の刀を夕焼け色の魔剣で造作もなく受け止める。だが克弥は零を見ていない。目を見開いて優香を凝視している。

「余所見なんて余裕だね」

そう言い袈裟斬り（けさぎり）の一撃を送り込んでくる。

「くっ・・・」

慌てて防ぎ、零に意識を集中させる。考え込むのは後回しだ。

「優香！」

という声とともに、優也と竜也が優香の元に駆け寄ってきた。少し離れたところでは、魅希が敵をオトすのにいそしんでいる。いや・・・案外楽しんでるかも。

「竜也！優也！どうして・・・」

「そんなの決まってるんだろ」

「大切な仲間・・・いや、親友だからだよ」

竜也と優也が交互にそう言って神弥に斬りかかっていく。優香は、戦場であるにもかかわらず俯いて嬉しそうに笑いながら

「カッコつけすぎなんだよ・・・二人そろって」

そう呟き零の手助けをしようと顔を上げたとき、目の前で敵兵に攻撃をはじめ、体勢を崩した味方の兵士が斬られそうになっているのを見た。刹那、迷わず敵兵と味方の兵の間に入り、味方の兵を横に押して剣撃から逃れようとした。が、一瞬遅かった。優香は背中に鈍い衝撃を感じ、次の瞬間激痛が背中にはしった。地面に倒れこみ、顔を歪ませながらも味方の兵士が無事なのを見て

「無事・・・つよかった・・・」

少し動いただけでも激痛がはしる。零達がこっちを見て息をのみ、魅希が優香を斬った敵兵を容赦なく打ちのめした

「優香！」

「おい！誰か優香を後陣の治癒部隊のところに・・・」

「急いで！」

誰かがそう叫んだのを最後に優香の意識は闇に飲まれた

克弥は倒れた優香を見て頭を押さえた。今すべて思い出した。昔、優香と会ったことがある。一ヶ月ただけで共にすごしたあの女の子だ

「兄さん。いったん撤退しましょう」

守弥がそう耳打ちしてきた。運ばれていく優香を見ながら克弥は頷いて

「いったん退け！」

そう命じ撤退した

《三時間後 三階 光城の病室》

優香はゆっくり目を開けた。夢を見ていた、懐かしい昔の夢。竜也とそっくりの顔だけど無愛想な男の子の夢だ。傷をおして起き上がろうとするが、血が足りず上半身を起こすのもままならない。病室には誰もいない。優香は首にかけてある笛を取り出し吹いた。十秒後、一匹の狼が音もなく病室に入ってきた。そして

『俺を呼んだか？優香』

「うん。今すぐ私を『紅の森』へ」

『その怪我でか？傷が開くぞ』

「いいから・・・お願い、紅蓮」

少し考え込む紅蓮。そして

『わかった。仕方ないな』

そう言い、紅蓮は優香を背中に乗せて走り出した。

第三話 優香の守護者？（前書き）

ここは六階の工作員部隊隊長室

「はあ。」

机には資料が山積みになっていた。しかし、その資料を片付けるはずの人、^{なま}風は何回目かのため息をつき、ボーツとしていた。なぜボーツとしているかと言うと……。

《二時間前》

^{みれい}美麗がのんびりした声で

「出血の割には傷が浅い、上手く避けたねえ、^{ゆか}優香ちゃん。」傷口の上に手をかざし、治療を開始した。

風は、泣きそうになりながら優香に近寄ろうとして、^{りゅうや}竜也に止められてる。優^ゆ也は、こうなつた経緯を話しつつ、右往左往している。

魅希は、優香を斬つた奴を追いかけたまま戻ってない。

そして治療が終わり美麗は

「絶対安静……だけど優香ちゃんは脱走の名人だから無理だね。」

その言葉通り優香は三時間後いなくなっていたのだ。

「はあ。」

優香は昔からそういう奴だった。怪我をしたり怒られた後は、何も言わず必ずいなくなるのだ。

「どこ行っちゃったんだよ……。」

第三話 優香の守護者？

優香は、紅蓮の背中に乗り『紅の森』に向かっていた。走りながら紅蓮が

『優香。もうじき着くぞ』

「・・・ありがとう・・・紅蓮」

優香は労うように紅蓮の頭を撫でる。気持ちよさそうに目を細める紅蓮。

そうこうしているうちに『紅の森』に着き、中に入っていく。優香は記憶を頼りに紅蓮に指示する。そして、昔あの無愛想な男の子が座っていた木の根元にたどり着いた。するとそこには先客がいた。竜也とそっくりな顔だが、髪の色が違う男の子。

「竜也？」

少し掠れた声で声をかける優香。

「俺は竜也じゃない。何度も間違えるな」

呆れ混じりに立ち上がる男の子。

「ごめん。えっと・・・神弥だっけ？」

「それは弟の名前だ！俺の名は克弥」

「そうだったっけ？久しぶり・・・克弥君」

薄く笑って紅蓮から降りる。

「お前・・・えっと・・・優香だっけ？背中傷大丈夫なのか？」

優香を木に寄りかかせながら心配そうに顔を覗き込み、血の気の失せた顔を見て

「おい！こんな状態でこんなとこに来るバカがどこにいる」

「ここにいるじゃん」

傷を治療しながら笑う優香。さすがに二の句が継げない克弥。金魚みたく口をパクパクさせてる。（ちょっと面白いかも）克弥には悪いけどそう思ってる優香に

『優香、こいつは闇の最高指揮官だぞ。何故敵の大將と親しげに話

してるんだ』

全身の毛を逆立てて唸り声をあげる紅蓮。克弥は気まずそうに目をそらした。

「だって克弥君は私の友達だもん。闇だろうが指揮官だろうが関係ない。克弥君は克弥君だ」

はつきりそう言い切った。その顔にも瞳にも迷いはまったくない。

『そいつは、優香を殺すためにここに来たかもしれないんだぞ』

「ないない」

即答で紅蓮の言葉を否定した。だって

「私は昔の克弥君を信じてるから」

克弥の目を真っ直ぐ見て微笑む。すると恥ずかしそうにそっぽ向く克弥。首をかしげて克弥の顔を覗きこみ

「どうしたの？顔赤いよ？」

そう問うと克弥は不自然なほど早口に

「もう帰らないと。それから俺、光に行くから・・・受け入れてもらえないかもだけど・・・さ。優香が見てる世界が見てみたくなかったし。じゃあね」

最後まで言ったらものすごい速さで走っていった。

「光に来るって簡単に言ってたけど・・・確か試験受けなきゃダメなんじゃ・・・。試験内容は何だったっけ？うーん・・・思い出せない・・・」

『光から闇に行くものは光の自分を、闇から光に行くものは闇の自分を倒さなくてはならない。だろ？お前まだ覚えてなかったのか？しっかりしろ、見えないけど一応最高指揮官なんだから』

「その物言いはなんだ！私は剣技と攻撃魔法と体術なら光の中で上位に入るぞ」

『知力？』

「・・・ないです」

悔しそうに紅蓮を睨む。紅蓮はというと勝ち誇ったように優香を見下している。怒るかと思ったが優香はため息をついて

「やっぱり紅蓮には勝てないよ」

すると紅蓮は得意げに笑って

『当たり前だ。俺に勝つには百年早いよ』

《それから三日後》

「はあゝ。やってらんねえ」

つまらなそうにベッドに寝転がってる優香。せっかく傷も塞がったのに、自室待機を命じられているので外にも行けない。なぜかって？理由は簡単、みんなに説教を食らったからだ……。話は昨日に遡る。

昨日、克弥と別れて光城に帰ると魅希以外の全員が正門に立っていた。なぜかみんな険悪な雰囲気だ。なんでだと思いつつ

「みんななんでここにいるの？」

すると間髪入れず

「お前（優香・優香ちゃん）が勝手に病室抜け出すから（だ・だよ・だよ・ですよ）」

その後はもう説教の嵐。もう思い出しただけで頭が痛くなる……。・・・

「暇だなあ」

これ以上思い出さないように頭を左右に振る。そろそろ我慢の限界だ。

ドアと窓を開け、周囲を確認。幸い誰もいないようだ。・・・

「よし。逃げますか」

悪戯好きの子供みたいに笑って、窓から近くの木へ飛び移る。そのまま枝を伝って地面に着地。

「よし。余裕余裕」

得意げに笑って走り出そうとしたとき後ろから

「何が余裕なの？」

慌てて振り返って

「れ・・・零兄！」

「優香の行動ぐらい読めないと思った？」

意地悪げにクスクス笑う零。そして優香の頭を撫で

「どこ行く気？自室待機じゃなかったけ？」

「えっと・・・それは・・・その」

「どうせ逃げようとしてたんでしょ」

「そ・・・そうですよ。悪い？」

「まあ見逃してあげるよ。行きたいところに行つてきな」

手を振りながらどこかに歩いてく。

「ありがとう。零兄」

そして正門に向かって走つてく。そして正門から出た瞬間、誰かとぶつかり優香はしりもちをついた。

「つてえ・・・誰だよ」

ぶつかった相手を睨みつけようと、その相手を見上げた。そしてそのまま固まった。相手は

「ああ。ごめんごめん・・・大丈夫かい？優香ちゃん」

「・・・優香ちゃんって言な！バク弥！てかなんでここに
お前がいるんだよ！？」

「ん？俺試験に合格したんだ。」

「へ？もう？マジで？大人でも最低十日はかかるのに・・・」

「うん。マジで」

「凄い。でも、なんでここに？なんか用？」

そう言つと困つたように笑つて

「俺、光に來たの初めてなんだ。だから光のこと優香に聞こうかと思つて」

頭をかいて目をそらしつつ言う克弥。優香は突然

「住む所あんの？」

「ないに決まつてんだろ。喧嘩売つてんのか？」

「克弥はなんの後継者だったの？」

「火だよ。ほら」

服の袖をめくつて刻印のついた右肩を見せる。優香は

「じゃあ私の守護者にならない？」

「へっ？」

彼に似合わず素っ頓狂の声をあげる。優香は爆笑しながら

「嫌ならいいけどさ」

「嫌じゃな「優香！お前そいつを守護者にするつもりか！？」」

克弥の言葉を遮って駆け寄ってきた竜也。

「そうだけど？何か問題が？」

「あのなあ・・・」

頭を抱える竜也。彼としては、突然やってきた元闇の最高指揮官が優香の守護者になるのは危険だと思っっているのだが、今の優香はまったく気にしてない。そもそも

「そいつが本当に強いかわかってないんだから」

「おっと。そいつは聞き捨てならねえな。俺をそこらの雑魚と一緒にすんな。」

「ふーん。じゃあ試してみようかな」

「試させてやるよ。優香下がってろ」

「ハイハイ。二人とも怪我しないでね」

内心ワクワクしながら素直に下がる。優香が下がった瞬間、二人は抜剣ばうけんして交差した。

「ちっ」

「くそっ」

赤と蒼の魔剣が交差する。同時に声をあげ、めまぐるしく体勢を入れ替え互いの急所を狙う。動きに一瞬の遅滞もない。克弥は体を捻り横殴りの斬撃を。竜也は下からすくいあげるようにその斬撃をはじく。

克弥は肩を、そして竜也は二の腕に浅い傷を負い血が滲む。

「二人とも凄い・・・。顔も似てるけど剣技も互角だなんて・・・。いいなあ・・・私も混ざりた「きゃー」。魅希の王子様が一人増えた♪しかも魅希を取り合ってる」

優香は頭を抱えたい気分になったが、それを重いため息に代え

「魅希・・・あの二人はお前を取り合ってるんじゃない」「まあ、優香ったら誤魔化さなくていいんだよ、いくら魅希が可愛いからって」

「・・・自分で言うな！このナルシストが」

自分の言葉を二度も遮られ（もともと短い）堪忍袋の尾が切れ魅希に詰め寄る。当の魅希は

「なんで突然怒るの？魅希マジわかんない、わかんなくて結構！それとその喋り方やめろ！」

「えゝ。いいじゃんか、魅希超可愛いから」

「関係ないし、私はお前を可愛いと思ったことはない」

「照れなくてもいいんだよ」

「お前はっ」

果てがなさそうな二人の隣で、竜也と克弥は相変わらず斬りあっていた。騒ぎを聞きつけて来た美麗達は

「青春だねえ」

「魅希と優香の口喧嘩って見てるとかなり面白いんだよね」

「二人とも。そんなこと言ってないで止めてよ」

お茶を飲み、お茶菓子を食べてる美麗と、この状況をあきらかに面白がってる凧を尻目に、優也は右往左往してる。

「ああ、お茶とお茶菓子が美味しい」

「ほっとけばそのうち収まるよ」

もはや喧嘩など眼中になくお茶菓子をほおばる美麗と、喧嘩を見ながら素っ気無く言う凧。優也は

「どうしよう・・・よし。優香！美麗と一緒にお茶菓子食べようだって！」

呆れるほどすばやく喧嘩を終わらせ美麗の隣に座り、お茶菓子を食べる優香。凧が

「優香たちの喧嘩終わっちゃたよ。で、竜也と戦ってるのはどなた？」

「克弥って言う元閻の最高指揮官さんだよ」

美麗は変わらずお茶菓子をほおばり、凧は普通に

「ふーん。そうなんだ」

優也は斬りあいをみながら感心したように

「凄いなあ。克弥君って、あの竜也君と互角に戦えるなんて」

「でもそろそろ止めなきゃね。優香止めてきなよ」

凧は冷静に呟く。美麗も

「私も久しぶりに優香ちゃんのあれ見たい」

「仕方ないな。んじゃ、いつちょやるか」

「気をつけてね」

優也が不安げに優香に話しかける。優香は

「余裕」

腰にある魔剣と左肩にある魔剣の柄に手をかける。そして一気に克弥と竜也の間に入り、左手に持った魔剣で克弥の魔剣を止め、右手に持った魔剣で竜也の魔剣を止める。二人は啞然としつつ

「危ないぞ！優香、早く退け」

「何してんだ、優香。死にたいのか」

「うるさいよ。竜也、もういいでしょ？克弥を認めてあげてよ」

「ちっ、わかったよ。優香のことちゃんと守れよ」

「わかってるよ」

まだ啞然としながら答える克弥。

「そうだ。ちよつと質問していい？克弥」

「なんだ？」

「克弥のパートナーは？ほら、龍とか国の動物とか・・・」

「ああ。それなら」

口笛を吹き待つことしばし、火龍と狼が一頭ずつやってきた。火龍と狼が

『呼んだか？克弥』

『お久しぶりです。克弥さん』

「こいつらが俺のパートナーだよ。名前は龍の方が烈火で狼が紅葉だ。」

二頭の頭を撫でながら嬉しそうに言った。

余談だが、パートナーとは人が生まれたときから各光の属性の龍の卵を一個（闇の場合は闇の属性の龍の卵）と、各国の動物達を与えられる。

龍の卵は、持ち主をパートナーと認めない限り孵化しない。

各国の動物達は、生まれてから一ヶ月以内の動物が認めた人がパートナーになれる。

しかし、必ずしも龍の卵が孵るとも動物達に認められるとも限らない。その場合は、成人（十八歳）になったらどんなときでも孵化するし、パートナーも決められる。

それから、各光属性の龍というのは火が火龍、水是水龍、雷は雷龍、風は風龍だ。闇属性の龍は属性の前に闇をつければいい。

もうひとつ余談だが、各国にいる動物たちは、火の国は狼、風の国は白虎、雷の国は猫、水の国は川獺だ。

以上余談終了

主な登場人物

光側

暁 ゆか 優香

火の後継者 光の最高指揮官でもある

刀は桜色の魔剣と真紅の魔剣

後継者の刻印は左肩にある 文字は紅で『火』

相棒は火龍の紅輝 こうき 狼の紅蓮

無鉄砲で無茶苦茶な一応主人公的人物。優しいが親しくない人にはわかりづらい

暁 れんや 連夜

火の守護者 最高指揮官補佐官

刀は紅色の魔剣

守護者の刻印は左腕 文字は赤で『焰』

相棒は火龍の朱音 あかね 狼の夕軌 ゆうき

優香の悪友で、大人びた少年。死んでいたが……

曙 あけぼの 克弥 かつや

火の後継者の守護者 第五部隊隊長

刀は緋色の魔剣

守護者の刻印は右肩 文字は緋で『炎』

相棒は火龍の烈火 狼の紅葉

俺様でいつも軽い口調な一見軽薄男。意外と優しい一面も……

暁 れい 零

優香の兄 第一部隊隊長

刀は夕焼け色の魔剣

刻印はない

相棒は火龍の蓮 狼の芯

みんなの頼れるお兄さん。だが優香には過保護すぎる一面も……

東雲 しのめ 燈架 とつか

風の後継者 弓矢と魔法使い部隊隊長

刀は純白の魔剣

後継者の刻印は左の手の甲 文字は白で『風』

相棒は風龍の琥珀 白虎の雪

一緒にいると自然と心安らぐ 芯が強い

碧空 へきくう 凧 なぎ

水の後継者 工作員部隊隊長

刀は蒼い魔剣

後継者の刻印は左胸 文字は蒼で『水』

相棒是水龍の満潤 みづ 川獺 いしかの氷華

常に冷静で親友以外には冷たい

蒼天 そつてん 竜也 りゅうや

水の守護者 第二部隊隊長

刀は紺の魔剣

守護者の刻印は右胸 文字は紺で『氷』

相棒是水龍の水蓮 すいれん 川獺 いしかの氷華

真面目で優香の抑え役兼任？いつもとばっちりを食う

浅緑 せんりょく 美麗 みれい

雷の後継者 治癒部隊隊長

刀は黄緑の魔剣

後継者の刻印は右腕 文字は黄緑で『雷』

相棒は雷龍の翡翠 猫 ねこが緑 りょく

マイペースで穏やか。時々怖い言動をすることも・・・？

蒼翠そうすい 優也ゆうや

雷の守護者 第三部隊隊長

刀は深緑の魔剣

守護者の刻印は左胸 深緑で文字は『雷』

相棒は雷龍の緑夏 猫は堇青きんせい

性格が控えめであまり強く言えない

藤花魅希ふじか みき

光の後継者 第四部隊隊長

刀はピンクの魔剣

後継者の刻印は背中 文字はピンクで『光』

相棒は銀龍の愛美

自称『世界一の美少女』らしい

闇側こんくく

昏黒こんくく 彩夜さいや

闇の後継者 現最高指揮官

刀は漆黒の魔剣

後継者の刻印は全員脇腹 文字は黒で『闇』

相棒は黒龍の黒牙こくが

自己中で欲しいものはどんなことをしても手に入れる。自称克弥の
元婚約者フィアンセ

曙あけぼの 守弥かみや

闇の火の後継者 第一兵隊隊長

刀は赤と黒が混ざった魔剣

文字は赤黒い色で『火』

相棒は黒龍の蓮火 狼は憂輝ゆうき

常に敬語で本意が読めない

晦冥 かいめい ひょう 氷

闇の水の後継者 第二兵隊隊長

刀は青と黒が混ざった魔剣

文字は青黒い色で『水』

相棒は黒竜の空 くう 川獺は空 そら

神弥と同じく常に敬語

その日の気分に応じて戦うらしい不思議な奴。その名の通り氷のよ
うに冷たく、何を考えてるのかまったくわからない

宵闇 よいやみ 雷音 らいおん

闇の雷の後継者 第二兵隊隊長

刀は緑と黒が混ざった魔剣

文字は緑と黒の混ざった色で『雷』

相棒はなぜかないない

彩夜にベツタリ

月影 げつが 風牙 ふうが

闇の風後継者 第三兵隊隊長

刀は黒と白が混ざった色

文字は灰色で『風』

相棒は「いらん」と断ったらしい

やや好戦的で闇の中では孤立

第四話 城内案内

克弥が光に入ってから一カ月後、正式に軍の隊長を務めることが決まった。

七階 会議室

「てな訳で、克弥。お前に第五軍隊隊長を任命する」

緊張感の欠片もない声で任命書の内容を読んだ優香。克弥は苦笑いしつつ任命書を受け取る。

「じゃあちゃんと自己紹介しましょうか。私は優香。火の後継者で光の最高指揮官。相棒の火龍は紅輝狼（こうきろう）のほうは紅蓮。よろしく」

「俺は零。優香の兄で第一部隊隊長だ。パートナーの火龍は蓮狼（れんろう）は芯（しん）。よろしくね、克弥君」

克弥に手を差し出し握手しながら名乗る零。

「私は凧。工作員の隊長で水の後継者です。パートナーの水龍が満潤（みづみ）、川獺（かわぬ）が一架（いちか）。どうぞよろしく」

竜也の後ろに隠れ無愛想に名乗る凧。

「私は美麗といいます。治療部隊隊長で雷の後継者です。そしてこちら（雷龍）が翡翠こつちが（猫）緑（きょく）っています。どうぞよしなに」

例のごとお茶を飲みつつ名乗る美麗。

「俺は竜也。第二部隊隊長で水の後継者護衛役。パートナーの水龍が水蓮（すいれん）と川獺の氷華（ひょうか）。よろしく」

凧の頭をポンポン叩きつつそば向き嫌々名乗る竜也。

「私は燈架（とうか）。弓兵隊と魔法使い部隊の隊長をやってます。パートナーは風龍と白虎、名は琥珀と雪（せつ）。以後よろしく」

丁寧にお辞儀して名乗る燈架。

「俺は優也。第三部隊隊長で雷の後継者護衛役です。．．．パートナーの雷龍が緑夏（りょくか）、猫が董青（きんせい）っています。よろしく」

「で私は魅希っていうの♪第四部隊隊長で光の後継者です。パー

トナーの銀龍は愛美^{あいみ}っていうんだくよろしくね。魅希の王子様♪」

克弥の腕に抱きついて自己紹介する魅希。

「魅希・・・男と見ればすぐに抱きつくのやめなよ」

睨みながら冷たく言い放つ優香。だが魅希は優香を完璧に無視して
「克弥く魅希とデートしない？城内案内してあげるよ♪」

「えつと・・・俺魅希サンみたいな人苦手なんで」

さりげなく魅希から離れる。そして優香の腕を掴み

「俺こいつを借りてきます。昔の話とかしたいし」

そのまま強引に廊下に引っぱり出す。

「ちよつ・・・なに勝手に決めて」

「いいから付き合えよ。」

なにが楽しいのかニコニコしながら歩いてる。ため息ついて
「わかったよ。ったく」

昔は無愛想だったあの男の子がこんなに明るく・・・いやチャラク
なるなんて、人間変わるもんだなあ。そんなことを考えてたら

「・・・・・・・・・・っておい。聞いてんのか？優香？優香！」

「・・・・・・・・え？ああごめんなんか言った？」

呼ばれてようやく思考を打ち切り、顔をあげた。

「なんか言った・じゃねえ！最初どこを案内してくれるんだ？」

「じゃあまずは光城の中を案内するよ」

そして今いる最上階の端の部屋から紹介していく。

「まずここは後継者控え室。入ってみる？」

「そうだな。一通り見たいし」

扉を開けるといゝんなモノが散乱している。一応竜也と優也が片付けてるが、散らかす人（主に魅希）が片付けないのでどうしようもないのだ。

「次いこっか」

「ああ」

後継者控え室の隣は第一部隊隊長室。零の仕事室だ。

「失礼します」

一声掛けてから扉を開け中に入る。中はきちんと片付いていて書類も残り数枚だった。最初は五十枚以上あったのにだ。ちなみに今は午前二時。

「お前の兄さんすげえな」

「でしょ」

零の仕事室の隣は第二部隊隊長室。竜也の仕事室だ。

「失礼します」

中に入ると書類はすでになく、今日は緊急招集でもない限り、竜也はここに帰ってこなくてよさそうだ。

「お前の周りって真面目なのばっか？」

「いや・・・そうでもないけど・・・」

竜也の隣は第三部隊隊長室。優也の仕事部屋だ。

「次はここか、失礼するよ」

中は片付いているが、書類は半分くらいしか終わってない。しかも当の本人は不在だった。まだ会議室にいるのだろうか。すると誰かが走ってくる音と共に

「マズい・・・まだ仕事終わってないのに・・・あつ。優香と克弥君。何してんの？」

「勝手に入ってごめんね、優也。克弥に城内案内しようと思って」

「まっそういうこと。こいつ怒らないでやってね」

「そうだったんだ。俺は全然気にしてないから」

優香の頭を撫で微笑む優也。

「ありがとう優也。お邪魔しました」

次の部屋は第四部隊隊長室。魅希の仕事部屋だ。

「ホントに入るの？」

めちゃくちゃ嫌そうな優香。一回入ったことがあるのだ・・・この部屋に。いやこのある意味とてもおそろしい部屋に。

「全部見たいんだよ。それにそんなにヤバイの？この部屋」

「入ってみなよ・・・私は絶対ヤダ」

言われるがまま入ってみると・・・絶句。そこは、仕事部屋というより魅希の私室と化していた。派手なレモンイエローのカーテンに赤いクッションが置いてある薄いピンクのソファ、同じくピンクの仕事机には崩れそうなほどの書類の山。床には置ききれなかった分が置いてある。多分一週間分ぐらいは溜まつてるだろう。そしてドピンクの等身大の鏡。その鏡の前にある大きな箱。おかた化粧品類が入っているのだろう。いったい何種類入れば、あんなに大きい箱に入れるはめになるのか、謎だ。当の魅希はいない。魅希の事だから町で男共と遊んでいるのだろう。

「ここって本当に仕事部屋か？嘘だろ・・・」

「次行こうよ・・・頭が痛い」

「それが賢明みたいだね」

魅希の隣は資料室。まあ図書室みたいなものだ。中に入ると天井（一階半ぐらいの高さ）に届きそうぐらいの本棚と、隙間なく置かれている本。

「すげえ・・・これって今までの戦いとかも全部記録されてんのか？」

「そうだよ。その戦いの指揮官とか相手の指揮官とか人数、その他もすべて記録されてるよ」

戦が記録されてる資料を見ながら問ってくる克弥に頷く。

「俺の名前載ってんじゃん。・・・てか優香の名前多いな〜しかもお前がでる戦いは負けなし。優香って凄いんだ」

「私が凄いんじゃないよ。みんなが凄いんだよ」

「ふーん」

次は会議室だが、さっき入ったのでスルー。

さて、いま紹介した各部屋の真ん中にある部屋が最高指揮官室。す

なわち優香の仕事部屋だ。

「じゃあ中入るか。しつれ「だめ！」

克弥が扉を開けようとしたのを阻止して、扉の前に立ち塞がる。

「なんでだよ。いいじゃんか」

「だめ。ものすごく汚いし仕事終わってないし」

だが男の筋力に勝てるわけもなく扉が開けられた。中は剣の本や魔法書、体術の本が散らかっていた。他の人より枚数が多い書類は山積みになっている。明らかに手をつけた様子はない。

「うわぁ・・・」

さすがに言葉をなくす克弥に

「だからだめって言ったのに・・・」

そうボヤク。

「次は六階ね」

階段をおりてすぐ隣の部屋は工作員隊長室。風の仕事部屋だ。

「お邪魔」

中は余計なものが一切ない殺風景な部屋だった。書類はあと数十分で終わりそう。だが報告書は山積み状態。本人は不在だった。どうせ竜也と散歩してるのだろう。

「この部屋殺風景だねえ」

「まあ風だからね、次いこっか」

風の隣の部屋は弓兵隊兼魔法使い部隊隊長室。燈架の仕事部屋だ。

「失礼します」

「優香ちゃんと・・・克弥君。どうしたの？」

「ちよつと城内案内中なんだ」

「そっか。散らかってるけど気にしないでね」

中は武具が散乱していて足の踏み場もないくらいだ。だが書類は風の魔法を使って片付けている。魔法をそんなことに使っているのか・

「へえ、風の魔法をこんな風に使ってるんだ。すごい」

「真似しないほうがいいよ」

「なんでだよ。ものすごく便利そうじゃんか」

「慣れてないと書類がズタズタになるよ」

実践したときのことを思い出し顔をしかめる。あのあと緋寒に一時間ほど説教を食らったのだ。

「マジで……？」

燈架の隣は治療部隊隊長室。美麗の仕事部屋だ。

「こんにちわ」

「優香ちゃんとチャラ男君か。何か用かい？」

「ちよつとお邪魔するよ」

「いいよ」

中は畳張りになっていて美麗は座布団の上でお茶を飲んでいた。書類は山になっている。手をつけた様子はまったくない。ために

「美麗ちゃん。仕事はしないの？」

「シゴト？なにそれ美味しいのかい」

「いえ………なんでもないです」

隣は仮眠室。泊りがけで仕事をするときや昼寝などに使ってる。普段は休憩場所。

その隣は当主控え室。勝手に入ったら殺されかねないので入れません。ご了承下さい。

「次は五階ね」

五階は主にいろいろな武器を売ってる。あと壊れた武具も直してくれるのだ。ここは一般人（みんな魔法は使える）も入れる。

「結構品揃えいいじゃん」

「当たり前じゃん。ここが光一武具が集まってる所なんだから」

「じゃあ今度なんか買おうかな」

「そうしな。ここの武具は扱いやすいからお勧めだよ」

「次は四階いこっか」

四階は主に魔法書売っている。高度な魔法から誰でも使える簡単な魔法書まで何でも売っていて、毎日にぎわってる。魔法には三種類あり、攻撃魔法と防御魔法、最後に治癒魔法がある。

一番難しいのが治癒魔法。これは魔力をかなり使っし、魔法行使者の技術も必要になる。

攻撃魔法、これはある程度練習すれば高度な魔法じゃない限り誰でも使える。

防御魔法は、集中力と魔力があればある程度の攻撃魔法を防げる。

しかし、自分より魔力の容量が大きい人の攻撃魔法は防げない。

それから魔法は呪文^{リッ}の詠唱が必要では、とお思いでしょう？実は呪文^ルは必要ないんです。最初は必要ですけど慣れてくれば呪文^{リッ}なしで魔法行使できます。まあ呪文唱えたほうが強力ですけど。

後は精神力と魔力の容量しだい。精神力と魔力の容量が大きければより強力な魔法が使えるということです。

「へえーこんな高度な魔法書とかあるんだ。あつ！これ欲しかったやつだ」

子供のように大はしゃぎする克弥。優香は呆れた様に

「そんなにはしゃがなくても」

克弥は聞いてなくて魔法書をめくって最初の呪文を省略して

「えっと。炎よ我が元に。すべてを消し去る業火をここへ」

「ちよつと待て！」

克弥が唱えてる呪文の正体が即座にわかった。慌てて止めようとする。が、もう呪文は完成しかけてる

「つくそ。間にあえ」

急いで結界を張る。それでも一通りの魔法は叩き込まれているのだ。止められる……はずだ

「劫火灰塵^{じゅうかかいじん}」

瞬間炎が部屋中に降り注いだ。この上位魔法は触れば最後死ぬほかない地獄の業火。だがすぐに優香が張った結界にぶつかり消えていく

「あつぶね。ギリギリだったな」

「悪い悪い。あはは」

「あははじゃないよ。ったく」

「三階は食堂。兵士はここでご飯を食べる。二階は病室。一般人も入院可。当然だけど・一階は治療室。さて、これで城内案内終了だね」

「ありがとな。次は俺が住むところを案内してくれよ」

「わかったわかった。どうせ近くにあるし」

「そうなのか？」

優香はあくびをして頷く

「んじゃあ行くか」

第五話 寮内案内そして襲撃（前書き）

ここは闇の主城 通称暗黒城

その最上階

「準備は出来た？」

そう言ったのは魅希に負けないくらい可愛い女の子。

「ええ。万全です。彩夜様」

彩夜と呼ばれた女の子は薄く笑う。その笑みは暖かさは程遠い冷たい笑み。

「そう。じゃあそろそろ迎えに行きましょうか。守弥」

守弥と呼ばれた男の子は一礼して

「そうですね。参りましょう。彩夜様」

第五話 寮内案内そして襲撃

光城の周りの湖に架かつてる八つの橋を、火の国方面に渡ってすぐの所に三階建ての建物がある。そこが優香達の住んでる場所だ。寮みたいなものだ。

「結構大きいんだね。すごい」

寮を眺めて感心する克弥。優香は生まれた頃から見慣れてるのでそんなに感心するか？と思ってる。

中に入ると竜也がいて

「お帰り優香。それから・・・ようこそチャラ男君」

「俺チャラ男って名前じゃないんすけど・・・」

「そうだっけ？まあなんでもいいじゃんか。チャラ男君」

ブチッ 何かが切れる音。次の瞬間

「だからチャラ男って名前じゃねえつつてんだろっが！お前には耳がないのか！この耳無しが」

「誰が耳無しだ！耳ならちゃんとある」

そういつて両耳を指差す竜也。

「聞こえてんじゃねえか。無視すんなよ」

「聞こえない聞こえない」

「この野郎。一発ぶん殴ってやるよ」

「やれるもんならやってみな」

果てがなさそうな二人の喧嘩を眺めてる優香は、頭を押さえながら「誰かこいつら止めて」

数十分後。ようやく喧嘩は終わり寮内案内再開。

「玄関からすぐのこの部屋が修練場だよ。よくみんなで修練するんだ」

「大きいな。ここなら多少暴れても大丈夫そうだ」

修練場の大きさは体育館と同じくらい。魔法を使っても大丈夫なよ

うに結界で覆われている。

「次の部屋が食堂だよ」

食堂は人数分の椅子と大きなテーブルだけのシンプルなことだ。

「次は浴場。ちゃんと男女別だから」

「へえ。すげえじゃん」

「次は和室」

「なぜ？なぜに和室？」

「美麗ちゃんが和室好きだからだよ」

中は当然畳張りで、見てるだけで穏やかな気持ちになれる緑一色。庭には桜の木が植えてある。

「次は弓道場。まあ弓道というよりは普通に弓を射る場所なんだけどね」

「設備しつかりしてんだ。闇とは大違いだ」

「闇がどんなのか知りたくなつてたよ。次は二階にあがろう」

階段をあがるとそれぞれの部屋がある

「階段をあがってすぐの部屋は空き部屋で、空き部屋の隣が竜也の部屋、竜也の隣が凧の部屋だよ」

「ふーん。あんな奴の部屋なんかどうでもいい」

「ハイハイ。竜也達の部屋の隣が燈架の部屋で、竜也達の部屋の隣は美麗ちゃんと優也の部屋」

「その美麗とかいう奴の隣とその隣のピンクの部屋は？」

「ご想像にお任せします」

「ああ、あいつの部屋か。聞いた俺がバカだった。てか二部屋も持つてんのかよ」

「そうだよ。二部屋ないとヤダとか竜也に抱きついて」

克弥は想像してしまったのか頭を押さえてる。優香も思い出してしまったのか頭を叩いてる。

「俺の部屋は？」

「凧の隣が零兄の部屋で、その隣が私。克弥は私の隣だよ。その隣

は空き部屋」

「ここか、じゃあ入ってみつか」

中は必要最低限の家具のみの部屋。しかも

「俺の部屋の半分誰か使ってんのか？半分だけ使われてる気が」

「それ私だよ。後継者とその守護者は一緒の部屋なんだよ」

「はあ！マジで」

「うん。マジだよ。美麗ちゃんと優也も同じ部屋だし、竜也と凧も同じ部屋だよ」

「燈架とかいう奴は？」

「燈架は守護者いないから一人だよ。それから三階は当主達が住んでる」

あまりのことに絶句中の克弥。そのとき外から悲鳴が聞こえてきた。
「なんだ？」

絶句中の克弥を捨て置き、部屋の窓から外を見る。外には自分と同じぐらいの年の女の子がいた。腰には黒い刀を差している。その女の子が魔法をつかって一般人を攻撃してた。しかもこの黒い魔力
「闇の奴か」

即座に正体がわかった。そして躊躇なく窓から飛び降りる。地面に着地したら魔剣の柄に手をかけつつ

「やめろ！」

するとその女の子は、こっちを見てぞっとするぐらい冷たい笑みを浮かべた。そして優香を指差し

「風よ。かの者を切り裂け」

いままで一般人を襲った風が優香に殺到する。優香は魔剣を抜き裂帛の気合で風をすべて叩き落とす。浅い切り傷が頬に一箇所出来たが、怪我といえはそれくらいだ。優香はそのまま女の子に斬りかかった。

そのとき、何かが優香と女の子の間に滑り込み、赤と黒が混ざった魔剣で優香の魔剣を受け止めはじき返す。克弥と同じ顔の

「お前は・・・守弥」

「お久しぶりです、火の後継者さま。裏切り者の我が兄はどこにいますか？」

「兄？・・・克弥のことか」

「そうです。いますぐ渡してもらいましょうか」

「却下。克弥が自分でこっちに来るって決めたんだ。お前らなんかに渡すか」

するといままで黙っていた女の子が動いた。腰にある魔剣を抜き、優香の無防備なわき腹に向かって横殴りの斬撃を放つ。真つ黒な魔剣が避けきれない速さで優香に襲い掛かる。

避けきれない それなら

そう覚悟をきめ、体を襲うだろう痛みと悲鳴を上げないよう歯を食い縛り左腕で受ける。派手な血飛沫があがった。女の子の斬撃を左腕で受けた優香は苦痛に顔を歪ませながら間合いをあげる。地面に片膝をつき刀を地面に落とし、左腕を押さえる。よほど出血が酷いのか大地が赤く染まってく。

「結構深いな・・・ヤバイかも」

他人事のように傷口を観察する。肘から手の甲まで斜めに斬り裂かれている。

「その場しのぎだけどやらないよりかはいいかな」

服を千切り、傷口にきつく巻きつける。激痛に一瞬意識が遠のいたが、唇をかみ締めその痛みで無理矢理ひき止める。

守弥が女の子に一礼して

「さすがです。彩夜様」

優香は弾かれたように顔を上げる。彩夜と呼ばれた女の子は

「当然でしょ。あんなに無防備だったんだから」

「ですけど、左腕を犠牲にして防ぐなんて予想外ですね」

驚きより呆れが混じった声音の守弥。彩夜は

「でもあの出血量じゃろくに戦えないね。さてじゃあもう一度聞こうか。克弥はどこにいる」

優香はよろめきつつ立ち上がり

「誰が教えるか。仲間を売るくらいなら死んだほうがマシだつての」
そう言い放つて、左腕に斬りかかろうとした優香の後ろから

「よく言つた。偉いよ優香」

後ろを見ると零、竜也、優也、凧、美麗、燈架そして十数人の男を引き連れた魅希。零が優香を支えて

「大丈夫かい？」

「ヨコ」

優香の傷を見て竜也と優也が彩夜と守弥を睨んで

「これやつたの誰だ？」

彩夜は人の神経を逆なでする笑みを浮かべ

「さあ？」

竜也と優也は同時に彩夜に向かって斬りかかる。そして彩夜に魔剣を振り下ろした。が、彩夜と二人の間に立ち塞がった“何か”によつて魔剣を受け止められた。昼間にかかわらず盛大に火花が散る

「なに！」

「なっ」

二人は同時に声をあげた。二人の魔剣を止めた“何か”が二人に一礼して竜也の魔剣を受け止めた方が

「御初にお目にかかります。俺は闇の水の国後継者。名は氷^{ユキ}。以後覚えとけ」

次に優也の魔剣を受け止めた方が

「俺は闇の雷の国後継者。名は雷音^{らいおん}」

そして四人同時に間合いを開け、四人同時に斬りかかる。明るい紺と深緑の魔剣と黒が混ざった蒼と緑の魔剣が交差する。地面が赤い斑に染まる。

残った零は彩夜に切りかかろうと走り出す。だが零の前にも“何か”が飛び出して来る。

「新手か」

「その通り。我が名は風牙^{ふうか}。闇の風の国後継者だ」

「ふうん。俺は零。火の国の後継者の兄だ」

そして双方一步もひかず斬りあう。魔剣がぶつかるたびに火花が散り、スパーク音が辺りに響く。

彩夜は魅希とどっちが美少女か周りの男達を巻き込んで競い合っている。燈架はみんなの後方援護をしている

その時、いままで傍観してた守弥が動いた。凄い速さで優香を治療している美麗と凧に向かって斬りかかる。凧と美麗は優香の治療に集中していて気づいてない。優香は血を流しすぎて意識が朦朧としている。あの様子だと当分動けないだろう。

守弥が魔剣を振り下ろす

「凧!」「美麗!」「優香!」

竜也、優也、零がそれぞれの敵を振り切り走り出す。だが間に合わない。

バチバチバチバチ

魔剣同士がぶつかりやかましいスパーク音。その音に負けないよう

守弥は声を大きくし

「ようやく来ましたか。兄さ「お前達なにしたんだよ」

守弥の言葉を遮り詰問する

「なにとは?」

「とぼけんな!優香の左腕は誰がやったんだて聞いてんだよ!」

守弥は動じる事無く

「ああ。そのことですか・・・あれは彩夜様がやったんですよ」

克弥は軽く目を見開き一瞬彩夜をみた。つまり隙が生まれた。その一瞬を逃す守弥ではない。即座に間合いをつめ、斜め下から斬りあげる。克弥は反射的に下がったが避けきれない。腹から左胸にかけて浅く斬られる。半瞬後血飛沫があがった。

「ちっ」

「余所見なんかしてるからですよ」

傷口を押さえて間合いをあける克弥。見てみると幸い動けないほどではない。安堵のため息をついて顔をあげると

「克弥♪探したんだよ」

そのセリフを聞き終わる前に抱きつかれた。驚きより痛みがまさってしりもちをつく

「彩夜・・・離れる。ベタベタすんな。ウザい」

「克弥ったら照れちゃって」

「照れてない。さっさと離れる!・・・っ」

怒鳴って傷口に響いたのか微かに顔を歪めるが、痛みを無視して彩夜を退かす。

「傷口開くよ?」

「知るか」

自分のことなのに淡々と言い捨てて、彩夜を睨み

「何しにきた」

「決まってんじゃん。克弥を連れ戻しに来たんだよ」

世界の常識を語るがごとくさりと言っ彩夜。

「俺は闇には戻らない。光でやりたいことが出来たんだ」

強い決意を秘めた口調で言い切る。その瞳に迷いは一切ない。

「やりたいこと?もしかして」

そう言って血塗れで倒れてる優香を一瞥し

「あの後継者に関係するの?」

「そうだけど? 正確にはこいつ（ゆか）がくれた世界を守りたい。それだけだ」

言っってから恥ずかしくなったのか俯く。その背を竜也、零、最後に遠慮がちに優也が叩き

「カツコ良いこと言うじゃんか」

「竜也君に同意。そのセリフもらった」

「克弥君・・・あとで優香にも言ってあげなよ・・・きっと喜ぶよ」
三人とも満面の笑みだ。克弥はまだ恥ずかしそうにしながら

「三人とも、ありがとう」

竜也は驚いた顔をして

「お前お礼言えたのか・・・心底驚いたぞ」

克弥は一瞬で不機嫌になり

「なんだと……どういう意味だ」

「俺は何も言っていないぞ」

わざとらしくそっぽ向き口笛を吹く竜也。克弥は自分が傷を負っているのを忘れて今にも殴りかかりそうだ。

「まさか忘れたわけじゃないよね」

彩夜は克弥たちを睨みながらそう吐き捨てる。次のセリフは克弥以外の全員が驚愕した

「私と克弥は婚約者なんだから」

『ええー！！！！』

凧、優也、竜也、零、燈架は叫んだ。特に凧が叫んだのは見ものだ。滅多に動揺しない人だからものすごく珍しい。反応がなかったのは美麗ぐらいか。顔色ひとつ変えず優香の傷を治療している。克弥は冷静に

「その話は断ったはずだ。俺は九年前からずっと想い続けてる子がいるんだ」

彩夜は克弥に詰め寄って

「それって誰？」

「教えるか」

彩夜は優香達を睨みつけて

「こいつらが……こいつらさえいなければ」

そう言って一番近くにいた優香達に斬りかかる。するとどこからともなく魅希が来て

「彩夜怖い！確かに魅希は彩夜より可愛いけど嫉妬しないでよ」

彩夜は射殺できそうな視線で魅希を睨む。守弥が

「今日は退きましよう。彩夜様」

「そうする」

そう言って魔法で転移した。信じられないがホントに退いたらしい。美麗はのんびり

「怪我人は治療室に。急いで」

第六話 腕試しPart1 燈架VS優香弓矢勝負

「……………う……………」

優香は小さく呻いて薄く目を開ける。窓から差し込んでる日差しが眩しい。

「……………朝か」

少し掠れた声で呟く。体を起こそうとするが起き上がれない。多分血が足りないのだろう。周りを見回すと白一色、てことは

「病室か」

「その通り。ようやく起きたか」

隣のベットから声が聞こえた。横をみると克弥が手をあげて

「よっ。おはよう」

「相変わらず能天気な顔だね」

「なんだと」

ムツとしたのか優香を軽く睨む。優香は気にせず

「気にするな。他意はない」

「そういう問題じゃない」

「ハイハイ。悪かったよ」

心のこもってない謝罪をしてから不思議そうに

「克弥はなんでここにいろの？怪我したの？」

すると一気に不機嫌になった克弥。優香は首を傾げて

「どうしたの？」

「胸から腹にかけて浅い怪我した……………」

顔をしかめてものすごく嫌そうな声で

「この傷は……………守弥にやられたんだ」

「守弥に？」

目を見開いて克弥を見る

「一瞬でも隙をみせた俺が悪かった……………」

その声音には悔しさが混ざっていた。それと同時に敵に隙をみせた

自分に対する怒り

「なら次はいっし報いれば？」

克弥が驚いたように優香をみる。優香は不敵に笑って

「私ならそうする」

あくまでも自分だったらだ。克弥に強制する気は毛頭ない。克弥はしばらく考え

「いいかもな」

小さく呟く。優香には聞こえなかったのか取り繕うように

「別に克弥にやれて言ってるんじゃないからね」

口調が面白いぐらい必死だ。なのに、顔は無理して普通にしようと努力してるので余計笑いを誘う。おまけに本人は無自覚ときた。

「なに慌ててるんだ」

口元を手で隠しつつ訊ねる。

「なっ」

面白いように顔色が変わる。

「慌ててないよ！」

思わず大声を出す。克弥は意地悪げに笑んで

「病室ではお静かに」

わざとらしく人差し指を口に当て、注意する。多分・・・いや、絶対面白がってる。

黙ってそっぽ向く。こういうときは何も言わないほうが身のためだ

「悪い悪い。拗ねんなよ」

笑いながら謝る

「それで謝ってるつもり？」

胡乱げに聞くと真面目な顔で

「もちろん」

声には笑みが含まれている。すなわちからかっているのだ

「・・・・・・・・」

あえて沈黙する。ここで何を言っても無駄だという事をわかりすぎるほどわかっているからだ。それこそ時間の無駄だ。話題を変えるよ

うに

「怪我も（一応）治ったし、久しぶりにみんなと腕試ししようかな」
口に出すとしてもたつてもいられなくなって、首にかけてある笛を
吹いて紅蓮を呼ぶ。数秒後

『呼んだか？優香』

「紅蓮に頼みたいことがあって・・・」

『頼み事？』

紅蓮の目を見つめながら頷いて

「美麗ちゃん達に伝えて、久しぶりにみんなで腕試ししないって・・・
あと竜也には」

そう言ってからニヤツと笑い

「私に負けるのが怖いんなら来なくていいよって伝えといて」

『承知。時に優香、最後の言葉は挑発か？』

「そうだよ。いまんとこ剣術は互角だから今日こそ決着つけてやる」
さつきまでは血が足りず起き上がれなかったのに、気分が高揚して
いるのか上半身を起こしてる。元々血の気は多いのだ。

『相変わらず負けず嫌いだな・・・まあそのほうが優香らしい』

呆れたようにそう呟き音もなく出て行く

「余計なお世話だ」

子供みたいに頬を膨らませる。

そしてベットの近くに立てかけられてる二振りの刀を、いつも通り
左肩と腰にさげる。

「お前って二刀流なのか？」

克弥は疑問に思っていたんだろう。刀を二振り持っていれば誰でも
疑問をもつことだろう。

「二刀流じゃないよ」

優香の答えに克弥は驚いたように

「じゃあなぜ・・・」

「うん・・・何故って言われても・・・生まれながら刀を二
振りもつてたからとしか・・・いいようがないんだけど・・・」

困ったように頭をかく。

光も闇も変わらず生まれたときに自分の魔力が武器の形に具現化し、自分だけの武器を創るのだ。自分にもっとも適した武器を。そして、魔剣の色はその人の魔力の色。

優香は真紅と桜色の魔剣と鞘と帯、真紅と桜色の短刀

克弥は緋色の魔剣と鞘と帯、同色の短刀

零は夕焼け色の魔剣と鞘と帯、同色の短刀

凧は蒼い魔剣と鞘と帯、同色の短刀

竜也は紺の魔剣と鞘と帯、同色の短刀

美零は黄緑の魔剣と鞘と帯、同色の短剣

優也は深緑の魔剣と鞘と帯、同色の短剣

燈架は純白の魔剣と鞘と帯、同じく純白の弓矢

魅希はピンクの魔剣と鞘と帯、同色の短剣

それからこれも光と闇関係なく、戦意を高めると魔力と同じ色に瞳が変わるのだ。

光はそのままのいるだが、闇の者は魔力も黒が混じった色になるから瞳も黒が混じった色になる。

「ふーん・・・珍しい奴もいるもんだ」

そんな会話をしているうちに、紅蓮から優香の伝言を聞いた竜也達が病室に入ってきた。

「竜也、来たのか。今日こそ決着つけるぞ」

「望むとこだ」

お互いに笑い合う。風は少し心配そうに

「無理しないようにね」

「大丈夫だよ風さん。優香ちゃんは殺しても死なないくらい強運なお方だから」

そういつて拝む仕草をする。優香は美麗の頭を軽く叩き

「拝んでもいいことないぞ」

優也も少しおどおどしながら

「美麗・・・やめなよ・・・」

「おどおどしながら言っても説得力ないぞ」

竜也が薄く笑いながら優也の背中を叩く

「確かに」

口元を隠して笑う燈架。優也は竜也と燈架をみて

「そう言われても・・・」

零が優也の肩を叩き

「気にすんな。こいつらはお前をからかって楽しんでるんだから」

「失敬な。楽しんでなどいないぞ・・・これは弄つてると言っんだ」

竜也は人の悪い笑みを浮かべながらそんなことを言う。

「余計悪いじゃん」

風が呆れ混じりに笑う。今度は優香が優也の肩を叩く。克弥はそんな七人を眺めて

「あの魅希とかいう奴は？」

黙り込む優香に諦めのため息をつく竜也、明後日の方向を向く燈架、お茶を飲む美麗、意味もなく右往左往する優也、苦笑いを浮かべる風、その反応を面白そうに眺める零。

「なんで誰も答えないんだよ」

誰も答えないのを疑問に思ったのだろう。優香は黙ったまま外を指

差す。

そこには数十名の男を連れた魅希の姿が・・・

「・・・・・・・・・・さて腕試しするんだろ・・・俺も一緒にやりたい」
今見た光景にはいつさい触れない克弥。

「そうだな」

竜也が頷き、みんなは光城の中心にある中庭に向かう。

「よし。まずは燈架、勝負だ」

「望むとこだ。今日こそ優香に負けを認めてもらわないと」

「なんだと」

「あんまり騒ぐと勝負しないよ」

食って掛かる優香を軽くいなす燈架。零は優香の頭を撫でて

「落ち着け優香。なんの勝負をするんだ？」

「決まってるじゃん。弓だよ」

凧がはつきり

「勝ち目無いよ」

美麗もお茶菓子を食べて

「私もそう思うな」いくら剣術では無敵の優香ちゃんでも、弓で燈架ちゃんに勝とうとするのは」

「おい、美麗。それは聞き捨てならないぞ。優香は無敵じゃない。

俺のが強い」

竜也が美麗に言うが、美麗は見事にスルーしてお茶を飲む。

「とにかく弓で勝負だ」

「ハイハイ。わかりました」

そして二人は的から100メートル離れた。まずは燈架が矢を放つ。
見事的のど真ん中に命中。

負けじと優香も矢を放つ。これも真ん中に命中。

「まずは同点だね」

「そうみたいだ」

そして二回、三回と矢を放っていく優香と燈架。外野は近くの観客

席で見物しながら

「竜君は混ざんないの？」

暇そうにしながら問いかける美麗。竜也は苦虫を嚙んだような顔を
して

「弓矢は苦手だ。なぜかに当たらない」

「それはただ単にノーコン」「うるさいぞ風」

風には珍しく悪戯っぽい笑みを浮かべている。竜也は不機嫌丸出し
の顔で風を小突く。

優也もこれまた珍しく意地悪げに

「俺と弓で競わない？竜也君」

「お前キヤラ変わってるぞ」

心底から嫌そうにしながら優也を見下ろす

「そんなことないよ」

克弥はそのやりとりを眺めて

「お前ら仲良いな」

「当たり前じゃん。幼馴染だし」

当然のことのように言う風

「へえ、何年の付き合い？」

「かれこれ十四年ぐらいじゃん？」

「そのくらいかねえ・・・もうそんなに経つのか」

腕組みして記憶を辿る竜也に年寄りみたいなことを言う美麗。

「・・・まるでお年寄りみたいないい方だうお」

失礼なことを言った克弥の首ギリギリを何かか飛んでいく。語尾が
変になったのはこの何かのせいだ。冷や汗をかきつつ後ろを見てみ
ると矢が刺さってる。

ゆっくり前方を見てみると、瞳の色が変わりかけてる優香の姿が・
・。

「あゝあ。優香が怒っちゃった」

他人事のようにそんなことをいう竜也。零は腹を押さえて爆笑中。
風は安全圏に避難してワクワクした表情で成り行きを見守ってる。

「優香……燈架さんの勝負は？」

明らかに怯えつつ掠れた声で聞く優也。

「いま二十二回終わった」

克弥を睨みながらも低い声で答える。

「えっと……俺なんか言った？」

何が優香の逆鱗に触れたかまったくわかってない克弥。必死に考えてるが思い至らないのか、微苦笑を浮かべてる。

「美麗ちゃんに失礼なこと言っな」

「それ？」

克弥はまじまじと優香を見つめる。

まあ優香が美麗をどれだけ大切に思ってるか知らないものにとつては理解できないだろう。少しだけ克弥が気の毒……。

とか思ってる風は相変わらず安全圏から見てるだけで、助け舟を出す気は毛頭ない。とぼつちりを食うのはごめんだ。

「それ？じゃない！それ以外になにかあるって言うんだ」

がおうとほえる優香。言っちゃ悪いがしつけのなっていない犬みたいだ。

「すんません」

口元に笑みを浮かべて謝る克弥。いささか真剣さが伝わらないのは私だけだろうか。

「笑いながら言うな！」

「そんなに怒んなくてもいいじゃん。もつと仲良くしようよ」

怒る優香をなだめる克弥。どうやらこの状況を楽しみはじめてるらしい。

「お前みたいなのやつと仲良くするか」

そう言い捨てて燈架との勝負再開。克弥は小さく

「相変わらず弄りがいのある奴」

そう呟いた瞬間、快晴の空なのにどこからともなく稲妻が落ちてきた。有り得ないくらい正確に克弥の方へ。

そして……直撃。

『うわぁ・・・悲惨』

美麗を除いた全員から一糸乱れず声が漏れる。克弥は真つ黒焦げになつて弱々しく痙攣してる。

「死んだかな・・・？」

「いや・・・生きてるよ・・・多分・・・きっと」

「大丈夫・・・かな・・・？」

「明らか・・・大丈夫じゃなさそうだね」

無責任な言葉が飛び交う。そして美麗をみる。当人は気にせず和紙を取り出し流れるような字で

「チャラ男死亡、享年十四歳。失言により天罰が下った」

とか書いている。美麗を除く全員は思った。

（やっぱ美麗は時々コエえ）

「俺・・・っ・・・まだ・・・死んでね・・・ぞ」

小さく掠れた声で抗議する克弥。もちろん誰も聞いてない

「燈架。再開しようか」

「う・・・ん」

若干引き攣つた笑みを浮かべた優香と燈架は、勝負を続行した

第七話 腕試しPart2 竜也VS優香剣技対決

「克弥大丈夫？」

包帯を巻いてあげながら克弥の顔を覗き込む優香。

「大丈夫だ」

さっきまで着ていた自分の服を見てため息をつき

「服以外はな」

克弥の服は所々焼け焦げていて元の色は判別できない。雑巾としてなら使えそうだが、洋服としてはおそらく使い物にはならないだろう。

「そんなぐらいですんでよかったですじゃん」

慰めるように克弥の肩を叩く零。

「よかねーよ」

渋面を作り、そっぽ向く克弥

「美麗ちゃんに失礼なこと言ったんだから当然の報いだけどね」

包帯を巻き終わり、最後にそこを軽く叩く。

いてっ、なにすんだよという抗議の声を軽く聞き流す優香。

「よし。優香俺と勝負だ」

待ってましたといわんばかりの表情で近づいてくる竜也。優香も魔剣の柄に手を置いて

「いいよ。手加減無用本気で来いよ」

「当たり前」

二人は同時に抜剣して斬りかかる。夕空に火花が散る。

優香は身をさばき斜め下から魔剣を振り上げる。竜也は斬撃を難なく防ぎ、その勢いのまま踏み込んで横殴りの一撃。魔剣を立ててその一撃を防ぐ。

バチバチバチ

ものすごいスパーク音と共に火花が散る。桜色と紺の斬撃の跡が走り、幾度も衝突する。

優香は攻撃中心の剣技だが、竜也は無駄のない攻守両立されてる剣技だ。

「優香、腕上げたんじゃない？」

観戦しながら感心したように呟く風。優也も頷いて

「そうだね。前より攻撃のキレが上がってる・・・いつの間にこんな」

「優香は負けず嫌いだからね」

微苦笑を浮かべて腕を組んでる零。

「まあ前の腕試しのとき竜也に負けてたもんね」

あの時は大変だったとボヤく風。

「優香ちゃんは元気だねえ」

「美麗・・・それはちよつと違う気が・・・」

優也が遠慮がちにつっこむが美麗はスルーしてお菓子をほおばる。

「優也、落ち込むな」

美麗にスルーされ俯いてる優也の頭を慰めるように撫でる零。小さい子供をなだめてるお父さんみたいだ。

「零さん、優也も一応男なんだから子ども扱いはやめてあげなよ」

風がなぜか俯いて小さく肩を震わせながらそう言うが、説得力がない。なぜかという

「笑いながら言われても」

そう風は笑っていたのだ。これじゃあ説得力の欠片もない。優也は風を軽く睨む。

「ゴ・・・ゴメツ・・・ちよつ・・・まって」

何度か深呼吸して笑いをかみ殺す。

そんなやり取りを横目で眺め

「前もこんなことしてたんだ」

「そうだよ。まああんまりいい思い出じゃないけどね」

声音には若干疲れが滲んでいる。その時の事を思い出しているのだろう。声のした方を見て

「お前は・・・燈架だっけ？」

「正解。よく出来ました」

にこやかに答える燈架。

お前は先生か何かかと嫌そうに言いながら

「前の腕だめしでなんかあったのか？」

燈架は赤く染まっていく空を見ながら

「半月前の話だけだね。その頃は二人とも勝ったり負けたりを繰り返してて、その日竜が二勝してね。悔しかったんだろうし、なににより許せなかったんだろうね。竜に二回も連続で負けた自分自身が・・・その日の夜から一ヶ月前までずっと修行してたよ。美麗ちゃんと零さんが止めなきやいまも続けてたかもね。負けず嫌いでもあそこまでするかって私も思ったよ」

克弥は驚いて竜也と戦ってる優香を見つめる。負けず嫌いなのは知ってたがさすがにここまでとは思わなかったのだ。燈架の話は続く
「二人に連れられて帰ってきたときの優香ちゃんは、全身血だらけで火傷もあった。多分剣技と魔法の修行してたんじゃないかな。それにあの傷は複合魔法の「ちよつと待った」

燈架の話を遮り、ありえない事を聞いたような表情をした克弥は
「複合魔法だと？・・・あの年で？ありえねえよ・・・あれは、大人でも出来る奴は二、三人だぞ」

複合魔法とは

二種類の魔法をあわせる魔法。もちろん威力も普通の攻撃魔法や防御魔法より断然強い。しかし、この魔法は相当な魔力と体力を消費する。それに加え扱いも難しく、悪くすれば自らに襲い掛かってくる諸刃の剣。

そのため、この魔法を使える人は光と闇をあわせても五人にも満たない数しかない。まして成人にもなっていない子供がこの魔法を使うなど自殺行為だ。

「それに複合魔法を使うには少なくとも二つの属性をもっていないと、

・・」

そう。複合魔法を使うには、生まれながら二つの属性をもってる者か、修行してもうひとつの属性を身につけるかしないといけないのだ。属性は、火・風・水・雷の他に氷・土・木などがある。

「優香ちゃんは生まれながら火と風の属性をもってるんだよ。竜も生まれながら水と氷の属性をもってる。でも竜は氷の魔力の容量が小さいみたい。あとは・・っ・・なんでもない」

語尾を濁した燈架。克弥はそれに気づいた様子もなく大声で「火と風!？」

複合魔法の中で一番危険な組み合わせが火と風なのだ。なぜかという、二つとも攻撃魔法専用だから。しかもお互いの魔法を強めあう魔法だからだ。この組み合わせの複合魔法を使い、暴走し、自滅した魔導師は何人もいる。逆に一番よい組み合わせは氷と水。

「克弥君うるさいよ」

燈架は耳を塞ぎそういうが克弥は聞いていない。

「あいつ大丈夫なのか？」

「優香ちゃんなら大丈夫だよ。それに・・っとなんでもない」

言いかけた言葉を飲み込む燈架。克弥は不思議そうに燈架を見るが燈架は答えず

「優香ちゃんが血だらけで帰ってきた話に戻すけど、あれは多分複合魔法の修行で失敗したときに出来た傷。全身血だら・いや傷だらけだったのは風の魔法、火傷は火の魔法特有の傷だからね」

そう言っただけで自分が傷を負ったような表情をする燈架。

「失敗・・」

「一回で成功したら誰も苦労しないでしょ。何回か失敗するに決まってる」

「何でそこまで」

克弥は半ば啞然としながら声を搾り出す。燈架は困ったような笑みを浮かべ

「優香ちゃんは・・・・大切な人を守りたいって言ってた。も

う誰も・・・いなくなつて欲しくないって。もう誰にも悲しんで欲しくないからって」

「もう誰も？」

克弥が聞き返すと、燈架はしまったといわんばかりの表情になって口を覆う。いつもの柔らかい雰囲気が消え、触れれば切れそうなほど鋭い空気をまとっている。

「もう誰もってどういう意味だ？」

「聞かなかったことにして！」

悲鳴に近い声で言い捨てる。燈架は走り去っていった。追いかけて問いただしたかったが、あの燈架の変わりようが克弥の足を大地に縫いとめた。

「腕上げたな。優香」

嬉しそうに笑う竜也。優香も笑みを向け

「竜也は腕がおちたんじゃん」

「言ってる」

肩で息をしながらいったん間合いをあける竜也。優香も肩で息をしている。だが両者とも瞳は戦意を失っていない。

優香は竜也の脇腹目掛けて蹴りを放つ。それを腕で防ごうとすると驚くほどの速さで膝蹴りに変化。お腹に直撃して痛そうに顔をしかめ地面に倒れこむ、と見せかけて優香の足を払う。

「ヤバッ」

思わぬ反撃に体勢を崩す優香の無防備な腹にお返しとばかりに拳を叩き込む。

「・・・っ・・・」

そのまま地面に倒れこむ優香。受け身をとったが立ち上がれない。

「降参かい？」

余裕そうな笑みを浮かべている竜也。痛みを堪えて起き上がりざまに刀を逆手にもち斜め下から斬りあげる。目を見開いて上体を反らすが避けきれず服が浅く裂かれる。

「あぶね〜」

「浅かったか」

構え直す優香に斬りかかる竜也。竜也は優香の胴を真つ二つにしそうな勢いで刀を振り下ろす。何とか防いだが一瞬腕に痺れがはشتた。それほど重い斬撃だったのだらう。竜也の攻撃はそれで終わらず、そのまま踏み込み再び腹へ拳を叩き込もうとする。竜也の刀を押し返し飛びのく。間一髪、一秒前まで優香がいた所に拳が空をきる。

「ギリギリセーフ」

ニヤツと笑って汗を拭う。

「よく避けたな。当たると思ったのに」

笑みを浮かべ手を左右に軽く振る。優香は答えず斬りかかる。竜也は避けてがら空きな左腕に斬り付ける。優香の左手が動き、左肩にある柄に手をかけ抜く。鮮やかな紅い魔剣が現れる。血のような赤ではなく、燃え上がる炎をそのまま閉じ込めたような真紅。

「久しぶりに見たなあ。その魔剣」

相変わらず綺麗だと魔剣を眺める竜也。

「褒めたって何も出ないよ」

そう言つて竜也の魔剣を弾き、真紅の魔剣で突きを繰り出す。竜也は下から魔剣を振り上げ、軌道を変える。読んでいたのか間合いを詰め胸に魔剣を突きつける。

「勝負ありだね」

零が近寄ってきた。凧と優也、克弥も近寄ってくる。

「そうみたいだね」

悔しさが混ざった声でそういう竜也。優香は得意げに刀を納めて鞘で肩を叩く。心なしか嬉しそうだ。

「疲れた。でも勝ててよかった」

そして凧に向かって

「なあお前って防御の魔法得意だったよな？」

「そうだけど」

嫌な予感がしたのか、凧は一步後ずさる。予感は的中した。

「今から防御の魔法を使つて」

「はい？」

驚きを隠さず声をあげる凧。珍しい事もあるもんだ。

「いいから。ちよつと試したい事があるんだけど」

「わかつたよ」

ため息をついて了承する。

「竜也も手伝つてあげて」

優香がそういうと凧が不機嫌そうに

「私だけじゃダメって事かな」

「えつと・・・そうじゃなくて」

助けを求めて竜也を見る。竜也は頭をかいて

「優香は凧に怪我してほしくないんじゃない？」

優香はそっぽ向く。頬が赤い。凶星だったようだ。

竜也め、余計なことをと呟く。凧は喜色満面で抱きついてくる。

「うお、離れる」

バタバタ暴れるが凧は離れない。克弥が

「こいつってこんなキヤラだっけ？」

「気にしないほうが良いよ」

零が腕を組んでいつものことだしねと付け加える。優也も零の横で
頷き

「俺も最初は驚いたけど、もう慣れたよ」

「凧さん可愛らしいねえ」

「美麗、それはちよつと違うよ」

零がそういうと美麗は

「私以外のすべての人は可愛いよ」

「美麗も可愛いよ」

優也が小声でそういうが聞こえなかったらしくお茶を飲んでる。

そうこうしているうちに凧と竜也がシールドを張り、その他の人は
安全圏に避難。優香は周りを見てから

「炎よ」

声に反応したように燃え盛る炎が出現し、優香の周囲を回る。

「風よ」

炎と同じように風が出現した。準備は整った。目を閉じて集中する。ここからが本番だ。

「共に混ざり合い」

言下に炎と風が混ざり合っていく。一番体力と魔力を奪われるのがここだ。

ものすごい脱力感と共に意識が遠のきかけたが、手のひらに爪を立て、痛みで意識を引き戻す。

私はこんなところで倒れるわけにはいかないんだ。懐かしい面影が脳裏をよぎる。いつも無茶をする私を気遣ってくれてた瞳を。優香は真紅に染まった目を開き

「我が刃となれ！」

炎と風が完璧に融合し、風と竜也の張ったシールドに殺到。複合魔法の直撃を受けた数秒持ちこたえたが虹色に変色し、亀裂が入る。

「くっ」

風の瞳の色が変わり、無意識に魔力を全開にする。そうしないとシールドがもたない。竜也も瞳の色が変わっていく。予想以上に強力な複合魔法に二人の魔導師がおされている。

「零さん、手伝って」

いつもの冷静さをどこかに吹き飛ばした風が零を呼ぶ。零が二人の後ろに行き、背に手を当てて魔力を流し込む。なんとか複合魔法を防ぎきり

「危なかった」

安堵のため息を漏らす風と竜也。零は地面に座り込み

「もう二度とやりたくない」

そんな三人を尻目に優香は美麗と優也に駆け寄り

「どうだった？これなら実践でも使えるかな？」

「充分使えると思うよ。威力もあるし」

美麗も頷く。そして疑問に思ったのか優也は

「これ身につけるためには結構修行しなきゃいけないんじゃない？」

「まあね」

気まづげに視線をそらす。修行方法を聞いたらみんな怒るだろうか
ら。

「そろそろ帰ろうよ」

その一言ですっかり暗くなった空を見て慌てて寮へ帰った。

第八話 説教のち喧嘩？

「こんな時間まで何をしてたんだ！」

後継者と守護者と当主が住んでいる寮の食堂から、怒鳴り声が聞こえる。

「だいたい、零！お前がいなが「うるさいよ緋寒。近所迷惑」

緋寒の説教を堂々と遮り、続けざまに腹へっっているんだからさっさと終わらせろよ、と言おうとしたら横から手が伸びたきて口を塞ぐ。

「すみません、火の当主。こいつの事は無視して続きをどうぞ」

竜也がそういうと緋寒は、優香を一度睨んでから説教を続行。隅で聞いていた翡翠は小さい声で

「こりゃ説教長引くな」

聖藍に囁く。聖藍は口元を隠して

「火の後継者は緋寒だけには反抗するからな。風達が夕飯を食べる時間は遅れそうだな」

「そうだな。前から気になってたんだけど、火の後継者はなんで緋寒にだけ反抗するんだ？」

相棒の猫を撫で回しながら言う

「反抗期なんじゃないですか？」

「風華。お前居たんなら声くらいかけるよ」

白虎を引き連れ歩み寄ってきた風華に笑みを向ける聖藍。

「声かけてもよかつたんですけどね」

おどかしてみたくてと悪びれず言う。相棒の白虎は

『俺は声をかけようって言ったんだけどな』

「お前は・・・」

呆れ混じりにそれだけ言う翡翠。聖藍は翡翠と風華の頭をぐしゃぐしゃ撫で回し

「先に俺らだけで夕飯食わない？」

「そうですね。いつ終わるかわからないですし」

後継者と守護者達が解放されたのは、それから一時間後の八時のことだった。

「家に着くなり説教って案外きつかったね。緋寒ももう少し配慮してくれてもよかったのに」

零が夕飯を食べながらそう言う。優香は退屈そうに欠伸して

「私は暇で暇で死ぬかと思ったよ。説教ほど嫌いなものはないからね」

他のみんなは魂が抜けたかのようにボーンとしてるのに、この二人はのんきに夕飯を食べている。緋寒の説教には慣れているのだ。

「零さんと優香って緋寒さんの説教堪えなかったの？」

平然としてるのが不思議だったのか、克弥が尋ねてきた。

『だって緋寒は俺（私）のお父さんだもん』

零と優香が同時に答える。克弥は口をパカッと開け

「ナンダッテ？」

感情の抜け落ちた声で問い返してきた。

「だ・か・ら・緋寒は私と零兄のお父さんなの」

説教のショックから戻ってきた竜也が克弥の肩を叩き

「驚くのも無理ない。俺も驚いた。いや信じられなかった」

優也と美麗と頷いている。

「まあ顔とかあんまり似てなかったからね。私も最初は嘘かと思ったよ」

「風も人のこと言えないだろ」

「私のお父さんは聖藍じゃないし」

しれっと言う風

「お前のお父さんだろうが。聖藍は」

風は優香の言葉を完璧に無視し、夕飯を食べている。無言で拳を振りかぶり

ゴンッ

「いたっ」

「痛くしてるんだから当たり前」

「暴力はダメだよ」

「優香落ち着け」

零と竜也が止めに入るが

「あんたらから先に片付けようか」

物騒な言葉と共に問答無用で殴りかかる。

「うわぁ、優香静まれごちそうさま」

「俺もかよ」

竜也は立ち上がり食堂から逃げる間際に挨拶して行く。零も急いで逃げてく。そのあとを優香が追っていく。

「騒がしい。いつもこんななのか？」

黙々と夕飯を食べる凧に問いかける克弥。

「そうだよ。ホント飽きずに毎日よくやるよ」

「凧だっけ？お前は混ざんないのか？」

「見てるほうが楽しい」

「なるほど」

克弥の口に笑みが浮かぶ。数多あまたの女性が虜になりそうな笑みだ。

「やっぱり苦手」

優也は声の主を見てみると美麗は若干引き攣った笑みを浮かべている。

「美麗ちゃんは克弥君嫌いだもんね」

「美麗、深呼吸」

燈架が苦笑して、優也が美麗の背をさすりながらそう言う。

「うん。ありがとう優也」

美麗が礼をいうと、優也は無自覚だろうけど幼馴染にしか向けない優しい笑みを浮かべる。

燈架は優也もいつもこんなだったら女子が集ってただろうな、とのんきに呟いている。美麗は燈架の語に頷いて

「優君、無自覚だろうけどその笑顔は外ではダメだよ」

「？なんで」

「女子が集まってきたて邪魔だから」

会話を聞いてたのか凧が優也の笑みを見て

「確かに。この笑顔なら女子が腐るほどわいてくるね」

克弥も優也の笑みを見て

「へえー結構カッコいいじゃん」

感心したように呟く。優也は俯いて

「そんなにジロジロ見られても」

言いながら恥ずかしそうに更に深く俯く。色素の薄い茶色の髪で表情が隠れてしまう。美麗が何か言おうと口を開いた瞬間

《ガッシャー————》

「優香！」

零と竜也の色を失った叫びと

「お前はっ！」

と言つ優香の驚きの声が重なった。

「優香！竜君、零さん」

優也が腰にある刀に手をかけながら優香達の方へ。克弥は

「お前らはここにいろよ。いいな、燈架はこいつら頼む」

「了解」

「わかつてる」

燈架と凧の答えを聞き終わる前に食堂から飛び出す。

優香は窓ガラスを破って飛び込んできた“何か”を見て

「お前はっ……確か桐じいの」

飛び込んできたのは桐樹の相棒の狼だ。竜也と零も来て急いで駆け寄る。窓ガラスで浅い切り傷は負っているが、動くのには支障なさそうだ。

「桐じいになにかあったの？」

『……奴らがまた来た』

呆れ混じりの口調で

「また？学習能力のない連中だね。完膚なきまでに潰してくる」

物騒な台詞とともに笛を吹く。刹那、割れた窓の外に赤い龍が現れた。窓枠に片足をかけて

「紅輝。私を桐じいのとこへ運んで」

『承知した』

返事を聞くと同時に紅輝の背に飛び乗る。すぐさま漆黒の夜空に飛び立つ。

「おい、優香！勝手に事を進めるな」

竜也が窓の外に向かって怒鳴るが返事はない。

「もう聞こえないよ。それより俺らも早く追おう」

零が竜也にそう言ってやってきた優也と克弥に

「二人とも龍を呼んで。急いで」

状況がうまく飲み込めてない二人は困惑した表情を見せながらも龍を呼ぶ。

数秒後、四頭の龍が夜空へ飛び立った。

「紅輝まだ？」

逸る気持ちを抑えながら訊ねる。紅輝は申し訳程度に灯ってる街頭を頼りに周りを見回して

『自信はないが多分この辺だ』

「そっか、ありがとう紅輝」

感謝を込めて背を撫でる。昔からの癖なのだ。紅輝は気持ちよさそうに小さく唸る。

そして急降下し、桐樹の店の近くに着地。急いで紅輝から降り、桐樹の店へ。

店の前には見覚えのある男が四人と、その仲間と思しに男が数十名いる。

「そこで何してんだ？」

見覚えのある男その1がこっちを見て

「お・・・お前は・・・この前の」

顔からみるみる血の気が引いていく。ついでに口元に張り付いてい

た余裕が拭ったように消え、取って代わって怯えが浮かぶ。

「このガキか？お前らがやられえたっていう奴は」

「そうです。こいつ子供の、しかも女の癖にめちゃくちゃ強いんですよ」

「俺ら手も足も出なくて・・・」

「全治一ヶ月になってる奴もいるんですよ」

見覚えのあるその他の男共が口々にさわぐ。

「あんたら病院送りじゃ満足できないみたいだから冥界送りにしてあげるよ」

優香にしては珍しく、その口元には酷薄な笑みが浮かんでいる。

「言っじゃねえか、クソガキが。おい、そのじじいはほっとけ。この生意気なガキを潰せ」

リーダーらしき人の命令を受けいつせいに優香に向かってくる。優香自身も黙って待つてゐるわけがなく駆け出す。

そして男共の中心に躍り込み、一人を手刀で喉元を、続けて後ろに回って刀を振り上げた奴の懐に入り込み鳩尾に膝蹴りを叩き込む。

そのまま流れるように見覚えのある男その1の脇腹に回し蹴り。

すべては十秒足らずで行われた。男共は呆気にとられ茫然としている。まさかここまでとは思わなかったらしい。リーダーらしき人も冷や汗をかいている。それでも口は元気で

「怯むな。大勢で囲め」

リーダーらしき人の号令を受け優香を囲む。だが囲まれた優香はつまらなそうに

「もうちよつと骨のある奴はいないの？こんなんじゃ暇つぶしにもならないよ」

「なんだと！」

見覚えのない奴が優香に向かってくる。間合いに入った瞬間を逃さず刀を振り下ろす。周りからは歓声があがる。優香はまったく慌てず「腕はまあまあだね。でも」

優香まであと一センチのところで刀が止まった。まるで不可視の壁が

あるみたいになぁぁぁ

「遅い！」

叱声とともに男は吹っ飛んだ。

「なっ……なんだ？」

周りの男共が優香を見る。全員今いたい何が起きたんだという顔を
して。

「来ないの？ならこっちから行くよ」

手を高々とあげ

「風よ」

すさまじい暴風が優香をとりまく。

「嘘だろ……こんなガキが呪文放棄して魔法を行使するなんて」

「さっきの風が刀を止めたのか」

「おい、全員防御魔法を張れ！」

その声を合図に呪文を唱え防御魔法を張る。しかし

「遅いつて言つてんだろ！」

呆れを通り過ぎ失望に染まった声音で言い捨てる。暴風が男共を巻
き込み暴れまわる。

一分後、男共は全員伸びていた。

「いつも悪いね。優香」

「桐じいのためなら地球の反対側からでも助けにいくよ」

再度お礼を言う桐樹に手を振って歩き出しながら

「それにしてもあいつら弱すぎ。無駄な体力使った」

自分の肩を叩くと足元から

『まあそういうな。それより最後何で手加減したんだ？冥界送りに
するんじゃないかったのか？』

下を見ると紅輝が楽しそうに真紅の瞳を輝かせている。なぜか黜いたちの
ような姿をしている。

説明しよう。龍は成長していくにつれ体が大きくなり人の家に入れ
なくなってしまう。そこで魔力を使って動きやすい小型の動物の姿

をとることにしたのだ。見た目は本物と瓜二つ。違うのは瞳の色と飯の姿のときにだけ出てくる契約の証だけ。後ほど他の龍たちの飯の姿がわかるかも……。

「聞いてたのか」

嫌そうに顔をしかめる。

『聞いていたんじゃない。優香の声が勝手に耳に入ってきたんだ』

「屁理屈言うな」

不貞腐れてそっぽ向く。紅輝はなだめる様に優香の肩に飛び乗り体をすり寄せる。

「どんな酷いことした人でも……殺したくないんだ。もう誰も殺したくないんだ」

『そうか。あの日からの誓いだもんな』

優香の瞳が激情をはらんで揺れる。

「……か……優香……優香！」

頭上から自分を呼ぶ声がして見上げる。そこには竜也と零、優也と克弥もいた。

「なにしてんの？こんなところで」

「お前が勝手に先走るから慌てて追ってきたんだよ」

「優香はほっとくと無茶するから」

竜也と零がそう言いダメ押しのように

「優香が一人でどこかに行くとは必ず面倒事に巻き込まれる、もしくは面倒事を起こすからね」

遠慮がちにそう言った優也。

「優香ってそんなに無鉄砲なんだ」

克弥が妙なところで感心している。

「sonであそこで伸びてる男共はなに？」

竜也が伸びてる一人を蹴っ飛ばしながら問う。

『優香が学習能力のないバカ共に制裁をね』

「ああ。あいつらが桐樹さんの店を……気の毒に」

零の最後の一言は風にとけて誰の耳にも届かなかった。

「とにかく帰らない？ 美麗と凧が心配してるだろうし」

「そうだね。 紅輝」

優香の意を読み取って紅輝は目を閉じ、一瞬で龍に変わった。そして、五頭の龍は寮へ。

五月の夜空には何億という星が煌いている。

第九話 次世代の気持ち

「お前はなんで説教されてすぐまた怒られるようなことをするんだ。後継者としての自覚を持て」

これで四人目だろうか。今説教してる聖藍を疲れた面持ちで見つめる。なぜ疲れてるかというと、帰った途端緋寒、翡翠、風華、の順番に説教を食らったからだ。まあ風華は説教というより話だったが、説教されている張本人、優香は膝に乗せた紅輝を撫でながらそんなことを考えている。足元には紅蓮が寝そべっている。

なぜそんなことを考えてたかと言うと、風華を除く全員がほぼ同じ事を言うのでいい加減飽きてきたのだ。

「聞いているのか優香」

「ハイハイ、聞いてます聞いてます」

半分以上投げやりに返す。あと何分説教する気なんだ、と言いたかったが説教が長引く可能性があるので心に止めておく。だが……「だいたいお前は……」

こっちの気持ちなんかお構いなしに説教を続行する聖藍。もう我慢の限界だ。もともと気は長いほうではない。むしろ他の人より短すぎるだろう。席を立ち息を吸い込み

「しつこい！帰ったと同時に説教ばっかして」

言い出したら止まらなくなった。胸に抱いていた思いを吐き出すように

「みんなあの日から過保護すぎるんだよ。私は……私は、自分のやりたいことが出来ない後継者なんかになりたくなかった。特別な人になりたくなかった。みんなの命を預かる最高指揮官にもなりたくなかった。

私は自由に生きたかったんだよ。誰にも束縛されないっ……自由な生き方をしたいんだよ。

この気持ちができる？普通の生き方を望んでも許されない、言いた

いことも言えない、やりたいことも出来ないこの辛さが・・・っ・・・。
生まれながら運命さだめが決まっていたのを知ったときの私の気持ち

悲鳴のような声で叫ぶ。初めて聞く優香の本音に美零と零を除く全員が目を見開く。美麗と零は聞いていたのдарう。ふたりとも俯いていて表情が見えない。紅輝と紅蓮が優香をなだめるように

『落ち着け優香、座れ。紅蓮お茶を』

『わかった。ほらお茶でも飲んで』

力なく椅子に座った優香にお茶を渡す紅輝。お茶を受け取り一気に飲み干す。

重い沈黙が部屋を支配する。数秒後、

「優香に同意。あなた方の価値観とやらを押し付けられても迷惑です。後継者という、特別視で見ないでもらいたい。私達だって自由が欲しい」

『風にしては珍しい』

『風は特別扱いが大っ嫌いだからな』

風の肩に乗っている一架と、頭に乗ってるテンの姿をしている満潤が交互にそう言う。風が感情の読めない声でそう言ったのをきっかけに

「俺も優香と風に同意見。後継者とか守護者とか区別しないで欲しい」

いつもは気弱な優也がきっぱりそう言った。すると竜也が優也の背中をバシバシ叩き

「よく言った。俺も同意見だ。好きなこととして好きなように生きたい」

「当主には悪いけど俺も」

「私も」

「私も優香ちゃんの意見に同意」

「俺も特別扱いは嫌だな」

今まで黙っていた優香が

「今さら嫌だとか言わないし、投げ出したりはしない。後継者に選ばれたからには最後までやり通す。あの日から逃げるのはやめたんだ。これは、火の後継者として生まれた私がやらなきゃいけないことだから。覚悟は決めてる。でも、後継者だからとか守護者だからとかはなしにして欲しい。私の気持ちはわかって欲しかった」

そう言ったあと、小さな声で

「それから……後継者になったこと後悔したことないよ。後継者だったから……誰かを守れるようになったのは事実だしね。でも逆に後継者だからあの時……」

そう言っただけを負ったような顔をして黙り込む。

零が優香の隣に行き

「今日はもう遅い。部屋に行こう。克弥君手伝って」

「わかった」

零が軽々と優香を抱き上げる。優香にしては珍しくされるがまだまだこれはこれで不気味だ。

「私もお風呂入ったら寝よつと。一架、満潤、美麗ちゃん、燈架ちゃん一緒に入ろう」

「ああ」

「じゃあ早速行こうか」

「いいよ、翡翠、緑行くよ」

「行く行く。翡翠も行くだろ？」

「わかったよ。行くよ」

緑に引つ張られ渋々といった感じで立ち上がる翡翠。ちなみに翡翠は柴犬だ。

「うん、行く。琥珀、雪も行こうよ」

「ハイハイ」

「もちろん行くよ。お風呂大好き」

ウサギの姿をしてる琥珀は投げやりに、雪は行く気満々で答える。

「俺も風呂に入って寝よつと」

「それが賢明だな」

優也の肩に後ろ足を頭に前足をかけた格好で頷く董青。黙っているが、床でお座りしてる黒い柴犬、緑夏も同意見らしい。

「俺もそうしょっと。おい水蓮、出て来い」

すると開いている窓の外から眠そうな声で

『なに？ 私は眠いの。用もないのに呼ばないで』

『水蓮・・・またそんなところで寝てたのか』

竜也に抱かれてる氷華は、枯れ草だらけの水蓮を見て呆れたようにため息をつく。水蓮はシベリアン・ハスキーの姿だ。

『今日はお開きだな』

『当主も少しはこっちの気持ちを知れて、勉強になっただろうさ』

どこにいたのか突然零の足元から声が聞こえた。秋田犬の姿をしている火龍の蓮。狼の芯だ。最初に言葉を察したのは芯の方だ。

「相変わらず蓮は手厳しい」

零が苦笑すると蓮は容赦なく

『後継者と守護者の思いに気づけなかった馬鹿共には、これくらい言わないとな』

『蓮さんカッコいい』

仮の姿がキツネ（アカギツネ）の烈火が憧れの先輩をみるような眼差しで烈火を見つめる。

「俺とどっちのがカッコいい？」

『克弥に決まってる』

「勝った」

どうだ、といわんばかりの表情で蓮を見下す。なんていうか龍に対して大人気ない気が・・・紅葉もそう思ったのか

『蓮に勝っても意味ない気が』

「確かに」

掠れた声で紅葉に同意する優香。そんな会話をしながら食堂から出て行く。

残された当主達は

「あんな風に考えていたとは・・・」

緋寒がそう呟き頭を押さえる。聖藍も驚きを隠さない表情で

「俺も気づかなかった。自由か・・・そんなの考えたこともなかった」

「火の後継者はあの日から変わったな。あいつが死んでから、今までずっと我慢してたんだろうな」

俺は何をみていたんだ、と自嘲気味に吐き捨てる翡翠。

「もう少し見方を変えるべきでしょう。いずれ光を継ぐ後継者達を・・・」

雨が降っている。すべてを洗い流す清めの雨が。その雨の中に赤いモノが混ざっている。

「・・・や・・・んや・・・っ連夜・・・連夜・・・連夜！」

泣きながら自分の腕の中にいる男の子に向かって呼びかける女の子。年は二人とも九〜十歳だろう。

「連夜・・・返事っ・・・して・・・答えてよ。連夜・・・逝かないで・・・」

嗚咽混じりに男の子、連夜を抱きしめる。氷のように冷たい身体。いつもなら優しく髪を撫でってくれる手は、ピクリとも動かない。胸からは血が流れ続けている。

「連夜！・・・蓮・・・や・・・願っ・・・一人に・・・一人にしないで」

魔力を全開にして治癒の魔法を使い、傷口を塞ごうとしている女の子。だが、連夜の出血は止まらない。

この出血量ではもう、助からないだろう。女の子は顔を歪ませ「私のせいだ・・・私の・・・」

「・・・それ・・・は・・・違っ」

喘ぎながら消え入りそうな声を絞り出す。

「れ・・・ん・・・っ・・・や」

連夜は苦痛を感じさせないいつもの笑みを浮かべて

「俺は・・・お前を守りたかつ・・・た。だから・・・自分を責めるな」

鉛のように重い腕を上げ、女の子の髪を撫でる。それだけなのに無性に涙が溢れ出す。

「・・・お前は、覚えてっ・・・てくれよ。そしたら・・・俺はお前・・・の思い出の中で・・・生きられっ」

連夜が低く呻き齒を食いしばる。

「連夜！」

「俺はもう、長くない。・・・頼む・・・俺を・・・」

手の平に爪を立てる。そうでもしないと叫びだしそうだからだ。その先は言わなくてもわかった。親友であり、悪友であり、守護者であり、初めて好きになった男の事だ。わからないはずがない。

目を閉じて涙を強引に拭う。手の平に爪が食い込みそこから血が流れる。だが痛みは感じない。心の傷より痛む傷などないのだと今さらながら思い知った。

「最後の願いだ」

連夜の言葉を聞き、何か言おうと口を開くが声にならず消えていく。身を屈め連夜の唇に自分の唇を重ねる。そして、刀を鞘から引き抜き連夜の心臓に突き刺し、苦痛を与えないようすぐに引き抜く。

雨音にかき消されそうなほど小さい声で

「なにが後継者だ。なにが守護者だ。・・・っそんなの何の意味もない。守りたい人一人守れない、大切な人が傷ついてるのに何も出来ず、この現世から消えていく瞬間を黙ってみてるしか出来ない無力な人間に過ぎないんだよ」

最後は悲痛な声で叫ぶ。何も出来なかった自分に対する憤りと自責の念のこもった声だ。

体の内で慟哭が響く。

もっと自分にチカラがあれば、その思いが彼女の心を責める。いつも守りたいモノだけ手のひらををすり抜けて逝く。

それと同時に初めて人を殺した。そう自覚した瞬間、連夜の心臓を

刺した感触を思い出してしまい口を押さえる。我慢していたが、堪えきれず地に手をつき吐いた。猛烈な不快感に襲われ、膝立ちしてゐるのもかなわず、大地に倒れこむ。

連夜の氷のような手を握る。いつも握り返してくれたその手に暖かさを感じることは二度とない。自分と呼ぶ声も、楽しそうに笑う表情も、心配そうに見つめる瞳ももうない。

恐る恐る連夜の顔を見る。声にならない叫びが雨音に消される。連夜は笑っていたのだ。まるで彼女に送られることを望んでいたかのように。

雨が降っている。まるでレクイエム（鎮魂歌）のように……

優香は泣きながら目覚めた。周りを見回すと自分の部屋のベッドだった。手の甲を額の上に乗せる。

「夢か……」

掠れた声で安堵のため息をつく。いつの間に降り始めたのか、外から雨音が聞こえる。そのせいかわからないが久々に見たあの日の夢。自分の無力さを心底から呪った日だ。

「連夜っ」

懐かしい名前を呼ぶ。胸の中がズキンと痛んだ。涙が溢れそうになり唇をかみ締める。

「もう自分の無力を嘆くのははやめたよ」

誰にともなく呟く。おそらく自分自身に向かつてだろう。

「あの日から誓ったんだ。どんなことをしても大切な人を守るって。もう誰も失いたくないんだ」

手の平を天井に向け、一言一言自分に言い聞かせるように。

「それと同時に決めたんだ。もう逃げないって。自分の運命から」

言い終わってから髪をぐしゃぐしゃにして吐き捨てるように

「なに言ってたんだ。私は」

『優香。大丈夫か？』

横から気遣うように顔を覗き込んでくる紅蓮。

「うん。大丈夫・・・大丈夫だよ」

『あの日の夢か』

問うというよりは確認という感じで訊ねてくる紅輝。

「出来れば見たくなかった」

優香には似つかわしくない重い声だ。

『もう少し寝てろ。まだ起きる時間ではない』

紅蓮が優香の隣に寝転がる。紅輝も再びベッドで丸くなり

『俺達がいるから』

「ありがとう」

儚い笑みを浮かべる。そして深呼吸して目を閉じる。胸に痛みが奔る。過去の光景が深い傷になっているのだ。

この傷が優香の闇。光の者はみな心に闇を持っている。大きさは様々だが闇が深いほど光は強くなる。

雨が降っている。この雨が止む頃には心の傷はなくなるだろうか。

「レンヤ・・・そいつとなにがあったんだ・・・」

優香と同じ部屋の克弥の口から言葉がこぼれる。寝室は離れているが同じ部屋なので聞こえたのだろう。

起き上がり向かうのは竜也達の部屋。

あの日になにがあったのか聞くために

第十話 優香の過去1

最初は静かに歩いていたが、部屋を出た途端走り出した。なぜか気が急くのだ。

「確か・・・この部屋だ」

階段のすぐ隣が空き部屋になっているので、その隣が竜也と凧の部屋だ。

ドンドンドン

ノックするが反応なし。克弥はおもむろに一步下がり回し蹴りを扉に決める。扉はあっけなく壊れ、部屋の中に倒れこむ。

「うゝん。何の音？」

凧が眠そつに立ち上がる。同じく竜也も起き上がり無残に壊れた扉をみて

「こんな朝っぱらから誰だよ。もっとマシな開け方はねえのか」

壊れた扉を跨いでくる克弥に文句を言う。

「・・・・・・・・しろ」

「はっ？聞こえない。もっと大きなこゝ教えるよ！あの日ってなんだよ。レンヤって誰だよ」

凧と竜也は目を見開き視線を交わす。

「どこで知った」

心なしか声が硬くなっている。

「優香が呟いてるのを聞いた」

そうか、と言い黙り込む。凧が考えるように腕を組み

「優香なんて言ってた？」

「よく聞こえなかったけど、自分の無力がどうか誓いとか言ってた」

二人そろって黙り込む。克弥は二人を交互に見て答えを待つ。

数分後、竜也が鋭い眼差しを克弥にあて

「ここで話すことは他言しないと誓えるか？」

「誓う」

即答で答える。凧は驚いたように竜也を見上げる。その視線に気づいた竜也が凧に視線を移す。

竜也が伝えたかったことを正確に読み取り

「私は寝直すね」

そう言つて寢室に戻る。竜也は近くのソファ―に座り、克弥もその向かいに座る。

どこか懐かしむような顔をして話し出す。

「どこから話せばいいかわかんないけど．．．．．」

五年前

雪が降っている。触れると消えてしまいそうな儂い雪が。

「優香。準備はいいか？」

端正な顔に悪戯っぽい笑みを浮かべた男の子は隣の女の子、優香に問いかける。

「うん、大丈夫。連夜は？」

「俺も準備万端だよ」

互いに笑いあい、窓から飛び出す。そして、木の枝に着地して滑り落ちないように木につかまる。

「成功」

二人してニヤ、と笑い拳をぶつけ合う。

「今日はどこに行こうか。昨日は『紅の森』で剣技対決したし」

「海に行こうよ」

瞳をキラキラ輝かせながら連夜を見上げる。

「海？今一月だよ？」

「行こうよ。紅輝達に雪の舞う海を見せてあげたいの」

ため息をついて仕方ないといった表情で

「風邪引かないように厚着してかないとな」

途端に嬉しそうに連夜に抱きつく優香。そして龍笛を吹き紅輝を呼ぶ。数秒後羽ばたきとともに

『今日も勉強サボって抜け出したのか』

優香の肩に乗り、呆れ混じりにそう言う紅輝。

「だってつまないんだもん」

腕を組みそっぽ向く優香。連夜も笛を吹いて「そうそう。戦法とか教わっても覚えきれねえよ。竜達は真面目すぎる」

『連夜と優香が不真面目すぎるんだろっ』

声の主は連夜の相棒、朱音だ。あかね

「私達（俺達）は不真面目じゃない」

そう食ってかかるが

『じゃあ勉強してきな』

「ヤダ」

即答する優香と連夜に朱音はビシッと

『じゃあ不真面目じゃん』

反論できず黙り込む。紅輝はなだめるように二人の頬に体をすり寄せ『で、俺らに何の用だ？』

「マフラーと厚手の上着もってきてくんね？」

「私達が戻ると捕まっちゃうから」

『そんなことだろうと思ったよ』

紅輝はブツブツ言いながらも寮の優香の部屋へ飛んでいく。朱音も黙って連夜の部屋へ。

待つこと二分。蛇行しつつ上着とマフラーを持って飛んでくる紅輝と朱音。

「ありがとう紅輝（朱音）」

紅輝に手を差し伸べつつお礼を言う優香。連夜もお礼を言い、優香の隣から朱音に手を伸ばす

『疲れた。結構重かったよ』

紅輝は上着とマフラーを優香に渡し文句を言う。朱音も連夜に向かつて

『もう少しで緋寒に見つかりそうだったよ。心臓が止まるかと思っ

た」

私も緋寒の説教は苦手だし、とこぼす朱音。

「よし。紅蓮と夕軌を呼ぼう」

「そうだな」

今度は狼にしか聞こえない音を出す笛を吹く。待つこと一分、木の根元からまだ幼さの残った声で

『優香、上に居るの?』

『連、寒いよ』

優香は立っていた木の枝から飛び降り、転びそうになるのを前についた手で防いで着地。連夜も同様に着地。

そして優香は紅蓮を、連夜は夕軌を抱き上げた。

「それじゃ行くか」

「うん。紅輝おいで」

紅輝が自分の肩にとまったのを確認して、連夜に視線を送る。連夜は腕の中の夕軌を見て、頭に乗ってる朱音を見て頷く。そして連夜は優香の手を握る。なぜかはこの後の行為でわかる。

「風よ」

短い一言で周囲の雪を巻き込みつつ疾風が起こる。

刹那、二人の姿は消えた。

「また優香と連夜が寮から居なくなっただ」と

驚愕のふちから立ち直った緋寒が開口一番に言った言葉だ。

「相変わらず元気ですね。あのお二人方は」

風華は特に驚いた様子もなく口元に微笑を浮かべている。他の二名はまだ沈没している。

「優香と連は寮から抜け出すの得意だもんね」

零が場違いなところで感心している。零の横の風が

「今日で通算何回目だっけ?」

「数百回以上じゃん?もう数えるのはやめたよ」

優也は頭を押さえて言う。美麗が

「優香ちゃんと連夜君が一緒にいると必ず問題が起こるよね」

「そうだね。当主達が頭を悩ませるわけだ。で、今日はどこから逃げ出したんですか？あの二人は」

竜也が少し楽しげに当主達に問いかける。ようやく立ち直った翡翠が苦々しげに

「浴場の窓からださ」

零と竜也が感心したように口笛を吹く。凧は苦笑して美零はのんびりした口調で

「二人ともよく思いついたね。そんな脱出路」

「優香ちゃんと連夜君が組めば無敵だからね」

特に優香ちゃんはいろんな悪巧みを考え付く悪がきだからね、とどこか楽しそうに目を細める燈架。

「俺も一緒に脱走すればよかった」

竜也が誰にも聞こえないよう呟く。

正直言うと、毎日毎日朝から晩まで勉強勉強言われて辟易していたのだ。

「美麗、燈架なに無責任な事言ってるんだ。搜して連れ戻さない」と聖藍が苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「ほつといてあげて下さい」

いつもは当主に反抗しない優也がきっぱり言い切った。聖藍は眉をあげて優也に詰め寄り

「なんだと」

優也は一瞬足を退き掛けたが必死に思い止まり、相手の目を真正面から睨みつけ

「今日くらいはあの二人はほつといてあげて下さい。」

「貴様、それが当主に対する言葉遣いか」

翡翠が聖藍の横から優也を怒鳴りつける。

「うっさいよ翡翠」

孤軍奮闘してる優也に助け舟を出した竜也。

「今日は連夜の誕生日なんだからこんくらい許してやれよ」

「そうだね。いつもいつも閉じ込めとくのよくないよ」

「だが「ごちゃごちゃうるさい。いいからほっときなよ」

風が冷たく言い放つ。翡翠が顔を真っ赤にし何か言おうと口を開いた瞬間。

「ウザッ」

という一言と共に雷が翡翠に直撃。哀れな。

「あゝあ。美零ちゃんの雷が落ちちゃった」

「痛そうだね」

「大丈夫かな・・・美麗も手加減しようよ」

「こんなんでも一応当主なんだから問題ないよ」

無責任な言葉が飛び交う中聖藍は小さな声で

「こいつらホントに九歳の子供か・・・?」

ここは火の国『暁の山』のふもと付近の上空。

「優香。大丈夫?」

「大っ・・・大丈夫だよ」

胸元を押さえつつ笑みを浮かべる優香。大丈夫という割には顔色がよくない。それに加えて呼吸が不自然なほど速い。これは

『魔力が尽きかけているね』

朱音が言い、紅輝も

『この症状は魔力が足りないからに他ならないな』

『優香大丈夫?』

紅蓮が心配そうに優香の顔を覗き込む。優香は紅蓮の頭を撫で

「大丈夫だ。心配すんな」

「いったん休もう」

「大丈夫だつて」

問答をしているうちに山頂にさしかかった。優香の体力はなくなる寸前といったところか。

「・・・・ゴメンツ・・・限界」

いい終わる前に風の膜が消え、二人と二匹と二頭は空中に投げ出さ

れる形になった。

二頭は翼を広げ体勢を立て直したが、二人と二匹はそのまま落下。

「優香の馬鹿」

という声がエコーしていた。

バキバキ ドサツ

「いつ……助かった」

安堵のため息を漏らした連夜。腕の中には夕軌が咳き込んでいる。すると、頭上から

『おい。無事か?』

『ずいぶん派手に落ちたね。怪我の一つや二つぐらいはしてそう』

「朱音、もうちょっと心配してくれてもいいんじゃないかな」

連夜が身体中についた木の枝や雪を払いながら洪面を作る。

『優香……足痛い?』

紅蓮の声に反応した連夜が、紅蓮を抱きかかえたまま起き上がらない優香を見て顔色を変える。

「優香、足見せてみる」

余程痛むのか、苦痛に顔を歪ませている優香は足を押さえていた手を離す。ズボンの裾を捲ると、そこには落ちたときにどこかに打ち付けたのか骨折していた。

「これは酷いな……ここで治療する」

『連、治療出来るの?』

夕軌が首を傾げて問いかける。連夜は優しく笑い

「美麗ほどじゃないけど。そこいらの奴よりかは出来るよ」

言ってるそばから優香の足に手をかざす。紅輝は優香の頬に身体を摺り寄せる。紅蓮も優香の頬を舐めながら何回も声をかける。

『連夜、人間が近づいてくる』

「偵察に行ってくれないかな?」

『言うと思った』

朱音は連夜の肩から飛び去り偵察に向かう。

『確かここら辺から』

木の枝に止まり、周りを見回すと男が十人ゆつくりとだが確実に連夜達の方に向かっていているのが見えた。

全員武装していて、血の臭いがした。（こいつら・・・山賊の類か）おそらく、木の枝が折れる音を聞きつけて様子を見に来たのだろう。急いで連夜に伝えなければ。

『連夜！連夜！！』

「どうした？」

治癒に集中しながら血相を変えて戻ってきた朱音に問う。

『山賊がこっちに向かってる』

『山賊だと』

紅輝は驚きを込めて朱音を見つめる。この山にはそういうものはいないと教わったのだが

『やっぱり実際に目で見ないとダメだな』

「だからあんな授業やるだけ無駄だって言っただろ」

『話をずらすな』

「スンマセン」

まったく悪びれず謝る連夜。

『こっちは怪我人背負ってるんだから圧倒的に不利なんだよ。この重大さわかってる？！』

「安心しな。あと十分もあれば完治する」

『ホントに』

泣きそうな顔で連夜を見上げる紅蓮。安心させるような笑みを浮かべ「ああ、嘘はつかない」

『十分って、山賊共はあと五分ちよつとでこっちに来ちまうんだぞ』
紅輝が焦った様に連夜の周りを旋回する。朱音も同意見らしく

『とにかくひとまずどこかに隠れないと』

だが生憎、周りは木が生えてるだけで隠れられそうなどこはない。

「その山賊って武器持ってたの？」

『うん、もってた。それに血の臭いもした』

「タイミング悪すぎだな」

舌打ちをして優香を見据える。きつく目を閉じて痛みに耐えてる優香の顔色は相変わらずよくないが、魔力はおおかた回復したようだ。しかし

「まだ動ける状態じゃないし・・・どうしようか」

治癒をしつつ考え込む。だがいい策は浮かばない。イライラして舌打ちをする。こういうときに限って何も浮かばないのが腹立たしい。雪に覆われた地面に拳を打ち付ける。

「連夜・・・」

囁くような声で地面に八つ当たりしてる連夜に呼びかける。連夜の意識がこちらに向いたのを確認してから

「名案が・・・ある」

「音が聞こえたのはこの辺りか？」

リーダーらしき男が仲間に確認する。

「ええ、この辺りに間違いはないでしょう」

仲間その一が答える。仲間その二が

「この辺りを探らせましょうか？」

「そうだな。二人一組になって周囲を確認してこい」

「了解」

すばやく二人一組になり四方八方に散っていく。

数十分後、二組戻ってきて

「こつちには何もありませんでした」

「こちらにも何もありません」

「そうか・・・あと三組が戻ってくるまで待機」

「はい」

更に数分後一組が戻ってきて

「何もありませんでした」

反対側からも一組戻ってきて

「こちらにもなに「リーダー！」」

報告を遮ってリーダーにむかって走ってきた仲間その三。

「もう一人はどうした」

「場所がわからなくなると困るので置いて来ました」

「何を見つけた？」

「それが・・・」

言いよんどんでから、リーダーを見上げ

「子供が一人」

「子供？」

リーダーを含む仲間達があきれを含んだ声音で言う。そのとき残りの一組が戻ってきた。

「とにかく来てください」

「見るだけ見てみるか。行くぞ」

第十一話 優香の過去2

「こいつか」

リーダーが確認するように仲間その三に問う。問われた仲間その三は首が取れそうなほど上下に振り

「間違いありません」

なっ、と自分と一緒にこの子供を見つけた仲間その二に言う。仲間その二は黙って頷く。

「ただのガキじゃねえか」

リーダーがいまいましげに唾を吐く。目の前にいるのは、木の根元にもたれかかって力なく目を閉じている女の子だ。顔色は悪く、意識も無い。おまけに金目のものは何も持ってなさそうだ。

「無駄骨でしたね」

仲間その一が自分の肩を揺すりながらリーダーに囁く。

「そのようだ。一応このガキの周り探ってみろ」

「了解しました」

若干めんどくさそうに答える仲間達。みんな本音はこんなガキが金目のもの持つてゐるわけない、と思っているのだが、そんなこと言った瞬間リーダーの雷が落ちることは目に見えているので何も言わない。突然

「リーダー、これ見てください」

「なんだ」

リーダーを呼んだ仲間その四は興奮した顔つきで

「これって紅玉ルビーのネックレスじゃないですか？」

仲間その四が持っていたのは、炎の形をした赤い石がはめ込まれている一見シンプルなネックレスだ。リーダーは恐る恐るネックレスを受け取りジーっと見つめ、次に驚嘆の眼差しで女の子を見て「本物を見られる日が来るとは……だがなぜこんなガキがもつてるんだ」

何故ここまで驚くかというと、この世界で宝石が取れることは滅多にない。仮に取れたとしても、大きい物でせいぜい親指くらいの大さきさのものだ。小さい物だと、米粒の半分くらいの大さきさになってしまふ。この小さいのでも数十年に十個採れるかどうか、だ。

ちなみに大きいので山五つ、小さいのでも町二つぐらいは軽く買えるし、買ってもまだお釣りがくる。それをこんな子供が持っているのだからそりや驚くだろう。まあこの子が持つてるのは魔力を結晶化したものであつて、宝石ではないのだがこの男にそれを見分ける術はないようだ。

「いい拾いもんしたぜ」

会心の笑みを浮かべ懷にしまおうとすると

「それ私のなんだけど。勝手に取らないでもらえる」

怒りを含んだ声音が背中につかる。

振り返ると女の子、優香がこちらを睨んでいた。リーダーは鼻であしらい

「そのまま気絶しとけばよかったものを。おい、片付けろ」

仲間共に命じ、歩き出そうとした先に男の子が立っていた。

（こいつ、いつの間に）

息を呑み、反射的に数歩後ずさつた。男の子が静かな声で

「そのネックレスを置いて失せろ。仲間を連れてだ」

「なに言つてやがる。身の程をしれ！小僧」

そう言つて弓矢を持ち、射る。

（この距離じゃ避けきれまい）そう思い、再び歩き出そうとすると「遅いな。燈架の弓に比べたらカタツムリ並みだ」

そう冷評し、矢を指で止めた男の子、連夜はニヤツと笑い

「返すぜおっさん」

言い放つた瞬間矢を投げ、矢に氣をとられている隙に懷に入り込み顎に一発蹴りを入れる。そのまま流れるようにリーダーがもつてた

ネックレスを奪い取る。

「はい終了」

「連、カッコいい」

紅蓮と夕軌は感嘆の声をあげる。朱音もめんどくさそうに拍手して
『あなたホントに十歳？詐欺じゃないの？』

「失礼な。俺は真正銘十歳の子供だよ」

あえて沈黙を選んだ朱音。そんな朱音を捨て置き、前方を見て

「あっちも終わった頃合だね」

そこには、炎に追われ笑えるくらい必死の形相で逃げ回る山賊共の姿が。

おおかた優香が「こつち来ないほうが身のためだよ。まあそれでも来たいんなら止めないけど、痛い目みたくないでしょう。山賊気取りのおじさん達」とか言っただろう。

そして挑発に乗った山賊が自分の間合いに入った瞬間、魔法を発動したのだろう。

優香の口元には、「ほらね」とでも言いたげな意地の悪い笑みを浮かべている。

『紅くてキレイ』

紅蓮が、山賊共の身体に点いている炎を追いかけ始める。幼さゆえにこの状況をうまく飲み込めてなくて、ただ単に花火の類と誤っているようだ。

「優香、そろそろ止めとけ。そいつらもう懲りただろう」

「ちえっ。仕方ないな」

不満げにしながらも炎を消す優香。連夜は優しく頭を撫でて

「お疲れ様。治療再開するか」

「お願いします」

「素直でよろしい」

偉そうに言いつつ治療再開。一応麻酔をかけたが、完全に治してはいないのだ。麻酔が切れないうちに治癒してしまうのが賢明だろう。
『優香、魔力は』

「あと三十分程度ならぶっ続けでも大丈夫」

『そうか。よかった』

ホッのため息をつく紅輝。優香はなんでみんなして過保護なんだろうと心の中でぼやく。

数分後、連夜は疲れたように伸びをして

「はい、終わり」

「ありがとう連夜。誕生日なのにごめんね」

申し訳ない気持ちでいっぱいになった優香は俯く。連夜の手を煩わせてしまった自分の馬鹿さ加減に腹が立つ。

「いいってことよ。気に病むな」

優香の頭をポンポン叩き、身軽に立ち上がり

「足止めを食っちまったがそろそろ行くか」

「うん。紅輝、紅蓮。おいで」

駆け寄ってきた紅蓮を抱き上げ、紅輝が肩に止まったのを確認してから連夜に目配せする。連夜は人差し指と親指で輪を作り、笑ってみせる。

風が二人を取り巻き虚空に消えた。

「よし。準備完了」

達成感に満ちた表情で室内を見回す竜也。そこには『連夜 十歳の誕生日おめでとう』と書かれた誕生日チョコケーキが一個。しかも、二段重ねだ。作ったのは美麗ちゃんと零と竜也で、皿はケーキの飾りつけ、優也は各自の用意した誕生日プレゼントの包装、燈架と魅希は室内の装飾担当だ。

「みんなも終わったかい？」

零が優也と燈架と魅希に訊ねる。優也は薄く笑みを浮かべ

「お・・・終わったよ」

「バッチリです」

「完璧だよ」

疲れきってる優也と燈架をしりめに、魅希は零に抱きついて答える。

零は苦笑いして

「えーと・・・」

困ったように魅希を見下ろすが、魅希は気づかず

「そっちのケーキ美味しそうだね〜ねえ一口食べていい？」

「ダメに決まってるだろう」

呆れ混じりに呟く竜也。魅希は今度は竜也に歩み寄り

「一口だけ、ね」

可愛らしく小首を傾げてみせる魅希。竜也、優也、零、連夜、各当主以外の男なら一発で頷いてしまっただろうが、生憎ここにいる男には効かなかったようで

「ダメなものはダメ」

ため息をついて魅希から離れる。魅希はつまらなそうに頬を膨らませ「竜也が冷たい」

とかなんとか言って玄関に向かう。気晴らしに男共のところに行くのだろう。

「ふう〜。今のやり取りで疲れが倍増した気がする」

「お疲れ、竜君。お茶いる？」

「もらう」

美零からお茶をもらい、近くの椅子に腰掛ける。

「美麗。俺にもちようだい」

「私ももらっていい？」

「どうぞ」

「ありがとう。零さんももらう？」

今まで呆けてた零はその声で我に返り

「ああ、もらう」

心なしか動きがぎこちない。

「どうかしたの？」

「いや・・・優香達は何してるかなって」

「きつと楽しんでるよ」

凧は窓を見つめてそう呟く。みんなもつられて外を見る。さっきま

で降っていた雪は止んでいた。

「やっと着いた」

魔力を使い過ぎてへたり込んでる優香を見下しつつ、微笑む連夜。その笑みは見る者の心を温かくさせるような微笑だ。優香は魅せられたように連夜の笑みを見返す。

「俺の顔に何かついてる？」

慌てて両手を左右に振り

「違って………かつこいいなって………思つて」

「優香？ 頬が真っ赤だよ。リングみたい」

無邪気な笑顔で優香の頬を鼻面で突く。

「ホントだ。珍しいこともあるもんだ」

明日は霰が降るかな、とか言いながら空模様を確認する朱音。

「どういうことかな」

口元に笑みを浮かべるが目が笑つてない。

「優香、落ち着け。連夜、夕軌が海に向かってるぞ」

「なに！？」

滅多に動揺しない連夜の端整な表情に焦りの色が浮かぶ。海の方を見てみると、夕軌が海に入るまであと数歩のところにいた。

「連々入っていい？」

「入っていいけど………朱音。溺れたら助けてやってくれ」

「わかったわ」

「紅蓮も入りたいなら紅輝と行つてきな」

「うん」

嬉しそうに返事をする優香の頬を一舐めし、紅輝と海へ向かう。

「何度みても綺麗だね」

連夜が優香の隣に腰を下ろす。

「そうだね。この景色は何度見ても飽きない」

二人はしばし無言で海で遊んでいる紅輝達を眺める。
ふと思いついたように

「ネックレスつけなきゃ」

ポッケから出したのは、後継者と守護者の契約の証の大切なネックレスだ。これを匣に使ったと緋寒が知れば何を言われるか想像に難くない。

ちなみに、契約の証にはネックレスのほかにもブレスレットと指輪がある。

美麗と優也は、契約の証を指輪にし。右手の中指にはめている。凧と竜也は、契約の証をブレスレットにし、左手首にはめている。

「もう一回契約の儀式しない？」

連夜が自分のネックレスをはずし優香に渡す。

「ここで？」

「もちろん。やってみたかったんだ」

「面白そうだね。やろっか」

そういうと、優香は立ち上がり姿勢を正した。反対に連夜は片膝をつき、右手を左胸に当てる。

「汝、我が牙となることを誓うか」

「誓います」

「我が盾となることを誓うか」

「誓います」

「我が守護者になることを誓うか」

「この命に懸けて誓います」

優香は連夜に立つよう促す。連夜が立ち上がったら、一言言つて連夜の首にネックレスをかける。そして、ネックレスの宝石部分に手を当てて

「火の国の後継者、優香の名のもとに連夜を火の守護者に任ずる」

優香には不似合いな真面目な表情と厳かな声で締めくくる。

数秒の沈黙の後、堪えられなくなつたのか連夜が肩を震わせ笑い出す。

「連夜・・・」

洪面を浮かべて連夜を睨む。

「ゴッ・・・ゴメッ・・・」

「笑いながら謝っても許す気になれない」

不貞腐れたようにそっぽ向く。連夜はまだ笑いながらなだめる様に優香の髪を梳き

「だって・・・優香が似合わない真面目な表情するんだもん」

「ほっとけ」

「まあまあ、悪かったよ。怒るな」

なんとか笑いをかみ殺して真面目な表情を作る連夜。

しばらくして、海で遊び疲れた紅蓮達が紅輝達に運ばれて戻ってきて

『優香、寒いよ。温めて』

『連。身体が冷たいよ』

『冬なのに海に入るからだよ』

半ば呆れ混じりの声で紅蓮を地面に下ろす紅輝。朱音はため息をついている。

「紅輝の言葉は正論だな」

夕軌の身体についた水気を魔力を使って飛ばす。優香も紅蓮に同じように水気を飛ばしてやり、上着で紅蓮を包み

「これで少しは温かくなるだろ」

『ありがとう』

お礼のつもりか頬をぺろぺろ舐めてくる。

「くすぐりたいよ」

そんな風にじやれていると、一頭の龍が飛んできた。凧の相棒、満潤だ。

優香は腕を上げ、満潤が止まりやすいようにする。

『探したぞ。せめて行き場ぐらい言ってから行け』

優香の腕に止まった途端文句を言う。優香はすまなさそうな表情を作り

「ごめんごめん。満潤達に行き場所を告げる暇……時間になかった」

『いま暇って言ったかな？』

「いや、言ってない。空耳じゃん」

ねえ連夜、と話をふる優香。連夜はわざとらしく咳払いをして

「そうだな。満潤の聞き間違いだな」

そして夕軌を抱き上げるためしゃがんだとき、肩が震えるのを優香は見た。それについては触れず、仕方ないと言わんばかりの表情で「帰るか。連夜、紅輝、朱音、しっかり掴まってね。飛ばすから私を置いていく気？」

「忘れてた。満潤も一緒に帰るならおいで」

言いたいことが心中に溢れかえってるが、押し止めることになんとか成功した満潤。口を開いたら一気にぶちまけてしまいそうなので黙って連夜の肩に乗る。

その後、寮に帰った優香達は連夜の誕生日パーティを盛大に催した。

第十二話 連夜、目覚める（前書き）

「いいかい優香。今から言うことはとても大事な事だから、意味がわからなくてもちゃんと覚えておくんだ。いいね？」

「はい。父さん」

「お前の体には、人の身をはるかに超えた力が宿っている。今は封印で抑えているがここからが大切。絶対に封印を解いてはいけない」
「なぜですか？」

可愛らしく首を傾げる優香。緋寒は破顔して膝をおり、幼い優香の視線にあわせ

「人の身を過ぎた力は我が身すら焼く。封印を解いたら一時的だが甚大な力が手に入る。だが、忘れてはいけないよ。それはあくまで一時的、限界は必ず来る。大いなる力の代償は自分自身に返ってくる。お前のその力は命を蝕む諸刃の剣」

「????」

訳が解らないという顔をしている優香の肩に手を置き

「今はまだ解らなくていい。お前には連夜がいる。あいつがいる限り、力が暴走する心配はないな……………」

第十二話 連夜、目覚める

「連夜と優香の関係はこんなんだ」

そう話を締めくくった竜也。

「仲良かったんだな」

少し掠れた声でそれだけ言う克弥。竜也は頷いて

「あの二人が組むと必ず騒動が起こったもんだよ」

懐かしそうに目を細める。克弥は意を決して

「その連夜って……死んだのか」

竜也は悲しそうに俯いて黙り込む。そして小さい声で

「優香は死んでるって思ってる」

「え……どういう」

竜也は言いにくそうに言葉を選びながら

「連夜は……生きてるって言うべきなのかわからないが……」

・その……仮死状態？みたいな感じなんだが」

妙に歯切れが悪い。ますます訳がわからないという表情をしてる克

弥を一瞥して

「だから……ああもう。ついて来い」

「はっ？何で……」

「いいからついて来い。言葉で説明するより見たほうがわかるだろう」

そう言うのと立ち上がり歩き出す。克弥は慌てて竜也の後を追いかける。

「おい。どこに行くんだよ」

「黙ってついて来い。うるさいと教えないぞ」

そう言われたら克弥は黙るしかない。舌打ちしながら黙ってついていく。

しばらくすると、何の変哲のない壁に着いた。

（行き止まりじゃないか。それとも隠し扉でもあんのか）

そう思っていると、案の定竜也が扉に触れ呪文を唱えると扉が現れた。その扉を開け、中に入るとそこにあったのは

（ここって・・・集中治療室か）

中は二十畳分ぐらいの大きさの部屋だった。克弥達の入ってきた扉の真正面にはガラスが張っており、その中には一人の男の子が寝ていた。大人びた端整な顔は青白く、死人と見間違うほどだが微かに胸が上下している。

「あそこで寝ているのが連夜だ。美麗曰く『雷の後継者に伝わる秘薬で一命はとりとめた』らしい。だが、目覚める気配はない」

重い口調で克弥に説明する竜也。克弥は食い入るように連夜を見つめ「あれが、連夜」

そう呟いた瞬間、窓ガラスの割れる音と、悲鳴が上がった。

「この声は・・・風」

竜也がそう呟いたのと同時に、克弥が外に出ようとする。それを阻止し

「今、外に出るな」

「なんでだよ。襲われてるんだろ！」

思わず声を荒げる克弥。竜也は辛そうに顔を歪ませ

「この部屋から出たら、連夜が無防備になる。それに、この部屋は優香に教えてないんだ。ここから出て、優香に会って『この部屋の中見せて』とか言われたらどうすんだ」

「そんなの見せればいいじゃんか」

「よくない！」

克弥に詰め寄り睨みつけながら

「優香が今の連夜を見たらどんな反応するか考えたか？」

「それは・・・」

黙り込んだ克弥に更に言いつのろうとしたそのとき、悲痛な声で

「助けてよ。連夜！」

という優香の叫び声があがる。すると、その悲痛な声に答えるように

「優・・・・・・・・香・・・・・・・・っ・・・・・・・・？」

聞こえるはずのない第三者の声が室内に響く。竜也は目を見開く。
今の声を自分が聞き間違えるはずは無い。この少し大人びた声は・

「まさか・・・」

ゆっくり振りかえる。そこには、ベッドから起き上がってる連夜の姿が。

「意識が戻ったのか」

驚きの混じった声を出す克弥。そんな二人の言動には反応せず、連夜は着ていた動きにくい服を破り捨てた。そして近くにあった服を着て、刀を手に取る。そのまま竜也達の方に・・・正確には竜也達の後ろにある扉に向かって歩いてくる。

「連夜・・・お前・・・」

「もしかして・・・竜也か？」

竜也の顔をまじまじと見つめる連夜。

「そのまさかだよ」

「そうか・・・俺の寝ている間に少しは背が伸びたみたいだな」

「うるせえ。それより何で今この瞬間に目覚めたんだ？」

連夜は困ったような笑みを浮かべて

「優香の声が聞こえたから」

その声にかぶさる様に再び悲鳴が上がる。竜也が若干焦ったように

「襲撃を受けてるんだ。多分闇の奴らだと思う」

「そこ退いてくれ。俺は優香達を助けに行く」

「俺も行く」

克弥が竜也の斜め後ろから言う。

「お前は？」

「優香の守護者だ。名は克弥」

「優香の・・・そうか。じゃあ克弥、行くぞ」

俺も行く、と言っている竜也をスルーして扉を開ける。

連夜が覚醒する少し前。

「眠い」。つたく、久々に見たあの夢のせいだ」

壁に八つ当たりしながら部屋から出る優香。結局あのまま寝付けず、まだ午前四時にもかかわらず起きることを余儀なくされたので、機嫌がすこぶる悪いのだ。

『物に八つ当たりしても意味ないぞ』

優香の肩に乗っている紅輝が諫める。だが、優香は睨みつけて黙らせる。足元では紅蓮が呆れ混じりのため息をつく。

「くそっ……」

イライラしてまた壁を蹴る。

「さつきから誰だ。壁を蹴って人の安眠妨害する馬鹿は」

不機嫌な声音で部屋から飛び出してきた凧。優香の姿を見咎めると、怖いほど素敵な笑顔を顔に貼り付けて

「ねえ、優香が壁を蹴ってたのかな？」

「まあね」

「ふーん、私の安眠を邪魔した罪は重いよ」

言ったそばから優香の顔すれすれに水の槍が飛んでいく。さすがにヤバイと感じたので

「えっと……すみません」

「許すと思ってる？」

「じゃあ」

なんて言えばいいのさ、と続けようとした瞬間

「突入！」

短い命令と共に窓を突き破って、複数の黒い影が寮の廊下に降り立った。

「ちっ……敵襲」

すばやく状況を把握し、凧を背後に庇う。美麗と優也、零と燈架も部屋から出てきて

「何事！？」

「敵襲か」

零と優也も状況を把握したようで、燈架と美麗を庇うように一歩前

に出る。

「後継者と守護者を討ち取れ」

「出来んならね」

優香が挑戦的に怒鳴る。襲撃者達は次々に襲いかかってくる。

（こっちは人数少ない分不利。なにより、戦闘力の低い風達がいるんじゃ守戦を維持するしか。とにかく風達を逃がさないと）

そんな思いが三人の動きを縛る。それを見逃してくれるはずのない襲撃者だ。優香達の身体に浅い切り傷が増えていく。

優香は悔しげに唇を噛む。このままじゃいずれは深手を負って動けなくなる。

そう思ったとき、体の中で鼓動が生まれた。心臓の音ではない。それよりも更に深い場所からだ。

（まずい・・・“封印が”・・・）

優香の心に反応して、生まれたときに奥底に閉じ込めたはずの人の身を過ぎた力が外に出ようと暴れだす。

（なんでこんなときに）

舌打ちしたい気持ちになった。この力を抑えるのに、体力も魔力も根こそぎ奪われるのは願い下げだ。

優香の横で優也がよろめく。足をやられたらしく、左足の太腿から膝にかけて血が噴き出してる。

優香は歯噛みした。また・・・また私は誰も守れず、守られるだけなのか。力がほしい。もう誰も失わなくてすむような、力が。

体の中で“何か”が脈打つ。この力を使えば・・・

（ダメだ）

前に一度“封印”が解かれ暴れたことがあった。このまま力を解放すればあのとときの二の舞だ。むしろあの時以上にまずいかもしれない。なぜならあの時いた人物がいらないからだ。

頭を振って思考を切り替える。今はそんな事を考えている場合じゃない。

視界の隅で零が倒れるのが見えた。すつと血が凍る。これ以上は持

たない。

「助けてよ。連夜！」

無意識に叫んだ瞬間、聞いたことない言葉が耳に入ってくる。

『力ガ欲シイカ』

「えっ・・・？」

周りを見回すが優香に声が届く範囲には誰もいない。また声が響く。

『力ガ欲シイノナヲ解放シロ』

「却下」

即答した優香の言葉に驚いたのか声は不思議そうに

『我ヲ解放スレバ皆助カルゾ』

「そうかもしれないね。でも、お前の言葉に二度と耳を傾ける気はない。失せろ」

ドクン、と心臓とは異なる鼓動が再び鳴るが無視する。そして身を伏せる。先ほどまで優香の首があつた場所を敵の刀がなぎ、髪が数本舞う。

敵の足元を払い、腹に鞘を振り下ろす。そのまま流れるような動きで次の敵を打ちのめす。

だが、いかんせん敵の数が多すぎる。多勢に無勢とはこのことだろう。

優香の左右から刀が振り下ろされる。片方を刀で防ぎ、もう片方は避けようとしたが間に合わず、肩から胸にかけて血が噴き出す。後ろから悲鳴が上がるがそれに構ってる暇はない。

優香は心の中で叫んだ。誰か！

「優香！」

呼ばれた当人はビクツと体を強張らす。若干声が変わってるが、少し大人びたこの声に聞き覚えがある。ゆっくりと視線を巡らす。隠し扉からこちらに駆け寄ってくる懐かしい姿。

「連夜っ」

一歩後ずさる。駆け寄りたいが、自分が連夜を殺めたという罪の意識が優香を苛む。

「連夜・・・意識が戻ったのか・・・？」

啞然として呟く優也。美麗と零はようやく起きたか、と呟いてる。

「お寝坊さんだね」

飲み込みが早い凧は口元に安堵の笑みを浮かべている。

「優に零兄さんに凧と美麗か。久しぶり」

昔と変わらない微笑を浮かべている。優香は順にみんなを睨んで

「なんでみんな驚いてないの？」

地獄の底から響いてくるような低い声だ。連夜の後から来た竜也は苦笑して

「お前にだけ伝えてなかったんだ。言ったらお前ずっと連夜のそばから離れないだろ？みんなそれが心配だったんだ」

「でも・・・連夜は私が・・・」

唇をかみ締めて痛みを堪えるように胸を押さえる優香。竜也は優香の頭を撫でて

「そうだな。優香がそうやって自分を責めるから、言えなかったんだ」

凧達もすまなさそうに優香を見つめてる。

「みんな私を思って・・・ありがとう」

襲撃者が武器を手に襲い掛かってきているのに、ここだけ穏やかな空気が流れる。

そのとき、魅希の部屋が壊れそうな勢いで開かれた。中から出てきたのはもちろんこの部屋の主、魅希だ。

「魅希、起きたの」

嬉しそうに魅希に近づいていく凧。だが、三步ほど駆け寄ってなぜか食い入るように魅希を見つめる。そして何を思ったのか引き返して

「魅希、寝ぼけてる」

すると、克弥以外の全員が顔を引きつらせた。特に優香は、凧の話聞き終わったと同時に安全圏に避難している。克弥だけは意味がわからず

「優香？何してんだよ」

「・・・・・・・・・・」

答えない優香の代わりに連夜と竜也交互に

「何も聞くな。死にたくないなら逃げろ」

「魅希がああなったらもう誰にも止められない」

克弥は不本意そうに優香の近くへ避難する。凧達も逃げながら襲撃者に

「あなた方も早く逃げたほうがいいよ」

一応忠告してみるが、襲撃者達は聞いていない。突然現れた魅希に敵意をむき出しにする。どうやらの絞ったようだ。

「お気の毒に」

人の悪い笑みを浮かべながら連夜が呟く。

「まったくだね」

凧には珍しく心から同意するような声音だ、と妙なところで感心する優香。

その横では竜也が美麗の手元を覗き込んで

「なに書いてんだ？」

「哀れなあの方々にちよつとね」

さらさら、と流れるような字で和紙に何かを書いている美麗。

優也も来て少し面白そうな表情で

「美麗・・・緊張感無さ過ぎ」

「そんなことないよ。よし出来た」

「どれどれ」

和紙を見てみるとそこには

『寮に侵入した不法侵入者共は、自らの行いを悔いる暇もなく人生の終点を迎えた』

竜也と優也は微苦笑を浮かべ

（やっぱ美麗は怖いな）

第十三話 連夜目覚める2 + 連夜お帰り会!?(前書き)

ここは闇の主城、暗黒城。

「守弥、これなんだ」

彩夜は黒い球体を弄びつつ得意げに守弥に訊ねる。守弥はしげしげとその黒い球体を見て

「人の闇を映す珠ですね」

「当たり前。さすがだね」

「恐れ入ります」

「じゃあ・・・」

これまでにないほど冷たい笑みを浮かべ、口調だけは優しげに「これをどう使うかわかるかな」

第十三話 連夜目覚める2 + 連夜お帰り会！？

魅希は恐ろしいほど魅力的な笑みを口元に貼り付けながら、普段の魅希からは想像も出来ないぐらい低い声で

「魅希はね・・・今最高に機嫌悪いんだ」

襲撃者達は訳がわからず困惑した雰囲気のを漂わせている。そんな雰囲気のを綺麗に無視して

「なんでかわかるかな・・・それはね、魅希の安眠を邪魔したからだよ。責任取ってくれるよね」

襲撃者達は何も言わず間合いを詰める。魅希の話は終わらない。

「ていうかね・・・世界一可愛い魅希の安眠を邪魔しといて五体満足で帰れると思うなよ、雑魚共が。というわけで魅希を起こした報いを受けてね」

言い終わる前に襲撃者達は飛び掛る。魅希は見たものの血を凍らせるぐらい冷たい笑みを浮かべ、それを迎え撃つ。

数十秒後、服の所々に返り血をつけながら冷然と地に伏す襲撃者達を見下ろす魅希。息ひとつ乱していない。クスツと背筋が凍る笑みを零し

「魅希の眠りを妨げるからこうなるんだよ」

一言言い捨て、部屋に戻る魅希

優香は惨状を眺めた。骨が何箇所か折れているだろうが、命に別状はなさそうだ。まあたとえ再起不能になっても

「自業自得だね」

「優香、無意識だろうけどそれトドメだから」

連夜が笑いを堪えつつ優香の肩を叩く。尻は壁に手をついて大爆笑している。後でぶん殴ってやる。

「優香ちゃんは容赦ないからね」

壁に寄りかかって、誰が見ても感じの良い笑みを浮かべている燈架。「私ほど優しく思いやりのある奴はなかなかいないぞ」

「優香が少しでも優しさと思いやりを持ってるんなら、みんなの気苦労も減るだろうに」

「何か言ったかな・・・？克弥君」

「何にも空耳じゃないの」

わざとらしくそっぽ向いて口笛を吹く克弥。もともと気が短い優香は柄を握っている。

連夜が小さく懐かしそうに

「相変わらず気が短すぎだろ。短気は損気って教えてやったのに・・・」

「優香・・・おちつい「うるさいよ優。先にあんたから斬ろうか」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

顔面蒼白にして後ずさる優也。竜也が優也を庇うように優香の前に立って

「まあまあ、落ち着けて。こんなチャラ男気にしないで」

俺はチャラ男じゃない、と克弥が抗議するが誰も取り合わない。連夜の目がほんの少し見開かれ

「へえ、君チャラ男なんだ」

「違う」

即座に否定し、半ば怒鳴るように

「俺は克弥だ。変なあだ名で呼ぶな」

連夜はきよとした顔をして克弥を見つめ、次に幼馴染にしか見せなかった柔らかい笑みを浮かべ

「克弥か、いい名前だね。よろしく克弥君」

「いつ見てもあの魅力的な笑みは慣れない」

優香が連夜の笑みを見つめながら呟く。それもそのはず。あの笑みは女性陣はおろか、男性陣の中でも息を呑む人がいるくらい魅力的な笑みなのだ。しかも、いつもは風と張り合えるくらい無愛想な顔なのに、突然こんな魅力的な笑みを見たら誰でもドキッとするだろう。

「私は慣れたけどね」

興味無いと言わんばかりに欠伸している風。

「私もお茶の方が魅力的かな。あつ優也くそこのお茶菓子取って」
「美麗ちゃんらしいね」

いつも通りの会話が交わされている中、優香はみんなに気づかれな
いよう階段を下りる。連夜が優香を一瞥して後を追う。

外は眩しすぎる朝日に照らされている。

「優香、どうした」

中庭について誰もいないことを確認してから訊ねる。優香は俯いて
いるので表情は見えない。

「おい優」
「………て」

「え？」

声が小さすぎて聞こえなかったので聞き返すと、泣きそうな声で

「どうして………どうして追ってくるの？」

「お前が心配だったから」

「何であんなこと頼んだの？」

あの日のことか、と心の中で呟く。視線を下にずらし

「……つごめん」

優香が自分の胸元を掴んで今まで溜めていたものを吐き出すように
続ける。

「今までどこにいたの………どうして………」

「ごめん。俺、あの時……優香に苦しそうな顔を……辛そ
うな顔をさせたくなくて………優香がこれ以上傷ついた顔を
しなくていいようにって、もう自分を責めたりしないようにって思
って頼んだんだ。

なのにいま考えると俺のためだったんだ。俺が優香の苦しそうな顔
を見ていたくなくて………苦しそうな顔を見たくなくて、俺自身の
ために優香に頼んだんだ。最低だよな」

最後は自分を責めるような口調になった。俺は自分自身が許せない。
俺は、ほかでもない自分のために俺の一番大切な人の心に深い傷を

負わせてしまった。生涯消えない深く重い傷を。

優香がゆっくり動いた。何をされても耐えようと覚悟を決めたとき、優しく抱きしめられた。そして幼子をあやすように頭を撫でられる。「私は、連夜が生きててくれて泣きたくなるくらい嬉しい。だから自分をそんなに責めないで」

目頭が熱くなつた。目を閉じると熱いものが頬を滑り落ちていく。それを見られないように俯くと、優香が連夜の顔を自分の肩に乗せた。これなら優香に顔は見られない。

「私ね、連夜に言いたいことがある。いいたいことって言うか、聞きたいことかな・・・これから私の守護者として私のそばにいてくれる？」

驚きに目を見開く。優香の声音には同情の類の響きはいつさいなく、心の底からそう望んでいるようだ。

「俺でいいのか？お前の心を傷つけた最低な奴だぞ」

驚きで強張った口をなんとか動かしそれだけ言う。

「そんなの関係ないよ。連夜は連夜でしょ？私の大切な親友兼幼馴染兼悪友に変わりはないよ」

嬉しかった。そんな風に思ってくれてたことに。だからこそ余計に、優香を傷つけた自分でもいいのかと思う。

正直にそう言うと、優香は呆れたように連夜の頭をぐしゃぐしゃ撫で回し

「連夜らしくないよ。あんまり悩むな、胃に穴開くしはげるぞ」

「なっ・・・余計なお世話だ！お前こそもう少し考えてものを言え！」

食って掛かると優香はこれまで以上に優しい笑みを浮かべ

「そうそう。連夜はそうじゃないとね」

どうやらうまく乗せられたらしい。俺のいない間に成長したみたいだ。

ちょっと悔しいのはきつと多分気のせいと思うことにしよう。

数日後の昼。

パパーン

クラッカーの音が響き渡ると同時に

「お帰り連夜」

という九人分の声が上がる。連夜は頭をかきつつ

「ただいま。てか大げさすぎない」

「そんなことないって」

竜也が上機嫌に鼻歌を歌う。凧はめんどくさそうに

「はあゝめんどくさ。眠いし」

「なに言ってるんだよ。今日はめでたい日なんだからもっと楽しみよ」

竜也がそう言うのにあわせて、優也も

「そうだよ。楽しまないと損だよ」

「私は寝てるほうがすき」

「怠け者だね」

美麗がお茶を飲みつつ言う。凧は欠伸して

「まあね」

「俺は今すぐこんなくたらない事終わらせたいがな」

なぜか滅茶苦茶不機嫌な克弥がボソツと呟く。

「克弥君は何でそんなに不機嫌なの？」

燈架は不思議そうに聞くと

「別に不機嫌じゃない」

言葉とは裏腹に、声音が地を這っている。竜也が燈架の肩に肘を乗せ、耳打ちするように顔を寄せ

「優香の隣に連夜がいるのが気に食わないんだよ」

「ああ、そういうことか。なぐんだ、ただ単にやきも「聞こえてるぞ」

地獄の底から響いてくるような低い声が耳朶を打つ。竜也はわざとらしく顔を顰めて

「地獄耳だな」

「お前らの声が大きいだけだ」

「いつもと同じくらいの音量だけだな」

なあ、と燈架に同意を求める竜也。燈架は苦笑して

「私を巻き込まないでくれますか。竜君が蒔いた種なんだから」

敵前逃亡だ、と嘆く竜也を無視し文字通り山になつて料理を食べ始める。

ちなみに、凧と美麗と優香と連夜と零と魅希はもうすでに食べている。竜也も克弥をからかうのをやめて、料理を皿に盛る。克弥は竜也、燈架、連夜の順に睨んでから料理を食べ出す。

「美味しい。これ誰が作ったんだ？」

グラタンを食べてる連夜がおかわりを皿に取りつつ聞くと、優香が

「それは、私と美麗ちゃんと凧が作ったやつだよ」

「へえ、料理上手くなつたじゃん」

優香の頭を撫で回す。優香は嬉しそうに笑み崩れて

「そうかな。連夜に褒められると嬉しい」

次いで凧の頭を撫で回すと、振り払われた。

「ちっ、相変わらず冷たいやつ」

「子ども扱いしないでくれるかな」

「いいじゃんか。俺より小さいんだから」

凧は無言で水を槍に変え、連夜に投げる。連夜は鋭い身のこなしで難なく避け、その横で普通に食事してた優香に直撃。優香の瞳に怒りの炎が灯る。

手は今にも刀を抜きそうだ。

「禁句をさらつと言えるなんて・・・さすが連夜君」

美麗が感心したように呟く。

「そんな事言つてないで止めようよ」

優也が顔だけでなく声まで蒼白にしながら美麗に言うが、美麗はサラダを食べつつ

「無理。見てるほうが面白い」

「ははっ。美麗らしいな」

零が微笑を浮かべている。その視線の先には、水の槍を連夜に向

かつて投げつけている凧と、それを笑いながらかわす連夜、その二人に炎を飛ばしている優香の姿がある。

「こうしてるとあの日に止まった時が再び動き出したみたいだね」

「そうだな」

燈架が懐かしそうに目を細めると、零が頷く。竜也がクスツと笑みを零し

「ああしていると、いくら大人っぽく見える連夜もまだまだこどもだね」

「本人に言っなよ。後が怖いから」

零がそう言つと、竜也は楽しげな笑みを浮かべ

「まあ気分によります」

「竜君、凧の性格が移ったんじゃ・・・」

優也が強張った笑みを竜也に向ける。竜也は口笛を吹いて

「気のせいだよ。優也」

「自覚がないってそれだけで罪だな」

克弥が不機嫌丸出しの顔で話しに割り込むと

「自覚くらいあるし」

と言つて、自分が墓穴を掘った事に気づきあはは、と誤魔化すように笑う。

それから一時間後、ようやくご飯を食べ終えてデザートのカークが出てきた。

「いろんなカークがあるな」

「私達全員で作ったんだよ」

優香が自慢げに胸をそらす。凧は呆れたように

「優香が自慢することじゃないから」

「なんだと」

射殺出来そうなくらい鋭い視線を凧に当てる。当の凧はのんびりと「ホント優香って短気だね。ほら、連夜君が呼んでるよ」

確かに連夜は優香の名を呼びながらカークを食っている。舌打ちして

「仕方ない。ここだよ」連夜

と言いつつ連夜の所へ駆けていく。連夜は嬉しそうに笑って

「いたいた。どこ行つてたんだよ。何回も呼んだのに」

「ごめんごめん」

周りが騒がしくつて、と続ける優香の言葉に納得したようなしてないような複雑な表情の連夜。

「そんな事どうでもいいから何で私を呼んだの？」

「ケーキー一緒に食おうぜ」

無邪気に笑う連夜。その笑みに視線が釘付けになる。こんな風に無邪気に笑う連夜は珍しすぎる。

連夜は優香が何も言わないことを訝ったのか首を傾げて

「どうした？俺の顔になんか付いてるか？」

「え・・・そつそうじゃなくなつて・・・えっと・・・その・・・」

あなたの笑顔に見惚れてました、なんて言える筈もないし。どうしよう、と焦つてるとき

「なにしてんだお前ら」

不機嫌そうな声音が耳朶を打つ。顔を上げると、そこには不機嫌さを露にした克弥の姿が。

「克弥？」

「俺以外の誰が克弥なんだよ」

不機嫌＋怒り八割突破の聲が地を這う。だが克弥はなぜ不機嫌なのか、何に怒つてるかがまったくわからない。なので、とりあえず

「ごめんな」何で謝る！

謝つたら怒られた。では、なんと言えいいのか。必死に考えていると、横から助け舟が来た。

「まあまあ。そうカリカリしないで、楽しくやろうよ」

ニコツと感じのよい笑みを浮かべて、克弥の肩を叩く連夜。克弥は先ほどより更に不機嫌そうな声音で

「気安く触んな」

「怖い怖い。おっかないねえ」

言葉とは裏腹に楽しそうに笑う連夜。克弥は連夜を睨みつける。優香は不思議そうに二人を見比べて

「なんか仲悪いね、二人とも。喧嘩でもした？」

「なに言ってるの。こんなに仲良しじゃん」

どこかうそ臭い笑みを顔に貼り付けながら、嫌がる克弥の肩を抱く。そして優香には聞こえないように

「お前も笑顔作れ。それとも、優香に説教されるのどっちがいい」
「俺に命令すんな」

そっけなく言い放ち、連夜を振り払って

「性格の不一致だ。こいつとは性格が合わないしなにより気に食わない」

「ふん。君達ちよつとそこに直れ」

それから、優香の説教が始まった。

第十四話 連夜と克弥

ようやく解放されたのはそれから一時間後だった。ていうか

「なんで俺が説教されなきゃいけないんだよ」

ブツブツ文句を言っていると、隣に座ってる優香がギロツと睨んできた。

「なにか言ったかな、克弥君」

「いいえ、何でもありません」

慌ててそう言っていると優香は何も言わずケーキを食べだした。

ホツと息をつく。さっきの説教は結構堪えた。特に連夜と一緒に説教を受けたということが一番堪えた。

「生涯唯一の汚点だ」

今度は絶対に優香には聞こえないように呟く。そして優香と楽しげに話している連夜を見る。

連夜は嬉しそうに優香と話している。とても四年間会ってなかったとは思えないほどに話題に弾んでいるようだ。それが羨ましい。

「クソッ」

小声で悪態をつく。ウジウジしてる自分に嫌気がさしてくる。ため息についてケーキをつつく。美味しそうに見えるのに、食欲がわかない。

チラツと横を見て

（え．．．．．）

優香が一瞬だが苦しそうに顔を歪ませた。まるで内から出ようとしてるものを、必死に抑え込んでるみたいだ。どうしたのか訊ねようと口を開いたのと同時に

「優香！ちよつとこつち来い」

そう言って連夜が優香を引きずる様に連れて行く。優香はしまったと言わんばかりに頭を押さえている。

「おい。どこ行くんだよ」

思わず声をかけると、連夜はなにを思ったのか克弥の腕を掴み
「ちようどいいお前も来い」

「はっ?!」

わけがわからず聞き返すが、連夜は何も言わず早足に歩いてく。優香は微笑を浮かべて、申し訳なさそうに克弥をみて

「来たくなかつたら無理に來なくてもいいよ?」

「あそこに居ても暇だから行くよ」

「ごちゃごちゃ言っでないで足動かせ」

連夜の叱声が飛ぶ。優香は適当に

「ゴメンナサイ」

「謝るんならもつと感情を込めろ」

優香の頭を小突く連夜。優香はへいへい、と欠伸をしながら言う。
連夜が優香の頭を今度は拳で叩く。結構痛そうだ。

「痛いよゝ暴力反対」

殴られた部分を押さえて涙目になりつつ叫ぶ優香。連夜はその抗議を軽く流して

「ハイハイ、喋ってないで足動かせ」

「酷い、克弥ゝ連夜がいじめる」

そう言いつつ克弥の後ろに隠れる優香。克弥は嬉しいような困ったような曖昧な笑みを浮かべて

「えっと・・・俺にどうしろと」

「克弥、その優香^{バカ}ほつといてさっさと行くぞ」

「いま優香^{バカ}って書いてバカって読んだよね」

あんまりだ、と噓泣きする優香を捨て置き歩き続ける連夜と克弥。

「置いてっでいいのか?」

さすがにやりすぎだと思ったのでそう問うと、連夜は後ろを一瞥して

「優香^{バカ}に優香^{バカ}って言っでなにが悪い」

容赦ねえ。声に出さずそう呟く克弥。優香はというと柱に額を預けながら

「ああそうだった、連夜はこういう奴だった。忘れてた私がバカだ

った。柱君私はもう立ち直れないよ」

とか柱に話しかけている。傍からみれば変人以外の何者でもない。へたすると不審者として警備兵に捕まりそうだ。

「優香？一応聞くけど大丈夫かい？」

「うん、大丈夫だよ」

声だけならその言葉を疑いはしないだろう。問題は、優香が壁に向かって話している事だろう。

「……………俺こっちだよ」

「ごめんごめん」

今度は窓に向かって話しかける始末。連夜が克弥の肩を叩き

「先行こうぜ。こいつに付き合ってたら日が暮れる」

少し先にある中庭への出入り口を指差す。

外に出ると、空には目が眩みそうなくらい眩しい太陽とそれと対極の黒雲。もう葉桜になってしまった桜の木々の隙間から、包み込むように優しい光が差し込む様子は美しいの一言に尽きる。爽やかな春の風が雨の匂いを運んでくる。

「気持ちいいな」

体を伸ばして軽く運動する克弥。連夜は眩しそうに手を翳し

「そうだな。いい風だ」

「で、なんで俺を呼んだんだ」

ぶつきらぼうに問うと、連夜は少し寂しそうに笑って

「お前に嫌われてるのかなって思ってた……………」

「それは……………」

確かに連夜の事を好いてはいないが、口を利きたくないほど嫌いというわけでもない。さて、どうやって説明しようかと考えていると「まあ俺もお前のことに気に食わないけど」

「んだと……………」

一気に不機嫌になる。連夜の顔にも声にもさっきまでの少し寂しげな態度は欠片も残ってない。もしかしくなくとも

「さっきのあの態度は演技か」

「ご名答。よくわかったね」

ニヤツと人の悪い笑みを浮かべる連夜。そのどこか感に触る笑みを嫌そうに眺めて

「お前って性格悪いな」

「そんな事ないって」

日の当たっている芝生に寝転がる連夜。克弥も、そこから五歩ほど離れた場所に同じく寝転がる。

「あと数刻ほどで雨が降る」

ボソツと連夜が呟く。克弥は顔だけ連夜のほうに向け

「よくわかんない。お前って天気読めるのか？」

「そんなんじゃないさ。空気に混ざってる雨の気配を感じ取る事が出来るだけだ」

「すげえな、と声に出さず感嘆する。声に出しても良かったのだが、絶対調子に乗るのが目に見えてるのであえて口をつぐんだ。代わりに「それって優香達も出来るのか？」

「凧と竜と燈架なら出来るよ。優香はこういう細かい作業苦手みたいで」

「ああ、確かに」

優香の性格が大雑把な事は、もうわかりすぎるほどわかっている。連夜が薄く微笑して

「細かい作業させると必ず失敗して緋寒に怒られてたよ」

「容易に想像できる」

思わず想像して吹きだしてしまった。そこへ、本人が来て

「なに話てんの、二人して」

ずいぶん楽しそうじゃないか、と子供のように頬を膨らませる優香。連夜が起き上がって優香の両頬をつまんで

「お前が不審者のごとく壁に話しかけてるから悪いんだろ」

「いひゃい」

涙目で抗議するが連夜はニヤニヤ笑って

「どこまで伸びるかな」

とか言っている。さすがに可哀相になってきたので

「そろそろやめてやれよ」

「ちえっ、つまんねえの」

そう言いつつも渋々放す連夜。優香は頬を押さえて

「連夜の意地悪。痛かったよ」

連夜は優しく優香の髪を撫で

「悪かった。お詫びに今度なんか奢ってやるから機嫌直せ」

「じゃあ雷の国の『抹茶屋』にある特大抹茶パフェ奢って」

「げっ……あれを？」

「嫌なら許さないもん」

連夜は困ったように頭をかいて

「ったく、仕方ねえな。わかったよ。奢ればいいんだろ。奢れば」

半ばやけくそ気味に叫ぶ連夜。どうしてそこまで嫌がるかわからな

いので聞いてみると、優香曰く

「雷の国は抹茶のお菓子屋がたくさんあって、『抹茶屋』はその中

でも一番高級抹茶を扱っている店」

なのだそうだ。

「ふーん。雷の国って抹茶が特産品なんだ」

「そうだよ。雷の当主が代々抹茶好きなんだよ。それで、大好きな

食べ物だからって言って売り出したら、思いのほか好評だったから

いろんな店が売り始めたらしい」

連夜が不満ありありの顔で説明してくれる。なんで俺が、と言外に

訴えかけている。だがそこまで嫌そうではないのは気のせいだろう

か。

「へえ、意外と詳しいんだな」

「意外とってどういう意味だよ。意外とって」

眉間にしわを寄せて睨んだくる連夜。わざとらしく咳払いをして

「ナンノコトカナ。ボクワカンナイ」

「っ……この野郎」

低い唸り声をあげる連夜。克弥は勝ち誇ったように腕を組み、連夜を見下している。まるで

「子供の喧嘩だな」

優香が小声でそう呟くと、連夜と克弥が同時に

「こんな奴と一緒にすんな！」

「うるさいなあ。近所迷惑」

耳を塞いでそう言い放つ優香。克弥は聞こえないように

「この近くに人いないし」

と言ってるが、優香は完璧無視。連夜が気持ちを切り替えるように頭を振って

「本題に戻るぞ」

「本題？」

意味がわからないので聞き返すと、まあ見てろ、と返された。優香は嫌そうに連夜の傍へ歩いてく。

「克弥はちよつと離れてた方がいいぞ」

連夜にそう忠告されたので、優香達から数十歩離れた場所から見ることにした。

「優香、刻印出せ」

優香が言われたとおり刻印を出すと、連夜はその刻印に触れて

「やっぱり封印が外れかけてるな。しかも結構前から外れかかってただろう」

「しょうがないじゃん。私の感情に反応しちゃうんだもん。それに、私の力だけじゃ封印を守りながら戦うのは厳しいし」

「封印かけ直すぞ。封！」

短く叫んだ瞬間、優香の刻印が反発するように紅く輝き出す。それを押さえ込むように連夜の力が広がっていく。あまりの眩しさに目を閉じた克弥は見えなかったが、優香が痛みを堪えるように顔を歪ませた。

「っ・・・優香、呑まれるなよ」

「わかってる！」

連夜の力が優香の体を包み込み、反発するように輝いている光すらも呑みこんでいく。

数秒後、光が収まったので目を開くと連夜が気を失っている優香を支えて立っていた。よく見てみると、一般語ではない言葉が円を作り優香の刻印を囲んでいる。

「おい大丈夫かよ」

慌てて駆け寄ると、連夜が疲労困憊といった感じで片手を挙げ

「割合へーき」

「全然そうは見えないけど」

呆れ混じりにそう言っていると、連夜は薄く笑みを浮かべて

「目が悪いんじゃないの」

「こんなときも軽口が叩けるとは・・・ある意味尊敬するよ」

「それって貶してんの？」

「まさか。褒めてんだよ」

「じゃあそういうことにしようかな」

「それがいい」

ニコニコしながらそう返すと、連夜はため息をついて

「部屋帰るか。物凄い睡魔が襲ってきてるんで」

「優香はぐっすり眠ってるけどね」

「お疲れ様。無事封印はすんだのかい」

お茶を差し出しながら問うてくる美麗。連夜は眠そうに目を擦って、お茶を受け取り

「終わったよ」

「いつも通り封印終わった後は眠そうだね」

零が苦笑する。優也が心配そうに顔を覗き込んで

「大丈夫？部屋に戻ったほうが・・・」

「大丈夫だよ。こいつ案外丈夫だし」

連夜ではなく竜也が答える。連夜は竜也を睨みつけて

「勝手に人の言葉変えんな」

「ワリイワリイ。あはは」

軽やかな笑い声を上げる竜也。反省してる様子はまったくくない。風がすまなさそうに

「ごめんね連夜。こいつ（竜也）はほっといていいから

「おい風。どういう意味だそれは」

竜也が猛抗議するが風はまったく取り合わない。

「今のうちに部屋に行きな。眠いんでしょ」

燈架がそう囁いてくる。感謝の言葉を述べてから部屋への階段を上っていく。

「ふあゝあ・・・ねむい・・・早く部屋にいこつと」

蛇行しつつ部屋に向かう。眠気で瞼が鉛のように重い。今にも夢の世界に旅立ってしまいそうだ。

優香の部屋に着いて、少し寂しげに

「優香に聞こつと。俺の新しい部屋どこか」

自分に言い聞かせるように呟き、優香の部屋に入る。

第十五話 変わらぬ関係

部屋の中はあれから四年の月日が経ったにもかかわらず、まったく変わってなかった。

（案外変わらないものなんだな）

妙なところで感心してしまう。それと同時にホッとしている自分がいるのも事実だ。

音を立てないように寝室に入り、小声で声をかけてみる。

「優香、起きてるか？」

返答なし。どうやら爆睡しているようだ。

「困ったなあ。俺も眠いんだけど、これじゃあ寝れない」

ガクリと頂垂れる。気を抜いたらすぐにでも夢の世界へ飛び立てそうだ。

「仕方ない。ソファで寝るか」

よろめきつつソファに歩いていくと、後ろから鋭い声で

「そこで何してる」

この声は聞き覚えがある。懐かしそうに目を細め

「久しぶりだな。紅輝」

「その声は・・・連夜・・・か？」

「連!？」

紅輝より若干幼さの残る声だ。この声は

「紅蓮か」

「連」

駆け寄ってきたのは、四年前より成長した紅蓮の姿が。その背中には、馴染みの紅輝もいる。

「大きくなったなあ、紅蓮。紅輝は・・・その姿じゃわかんないけど」

「お前も背が伸びたな」

「連は何しに来たの？」

紅蓮が足に鼻面を押し付けてきたので、しゃがんで頭を撫でて
「優香に俺の部屋どこか聞こうと思って」

「ああ、その事か。その事なら優香から指示を受けている」

「連夜の部屋はここだよ」

「えっ」

連夜は呆けたようにポカンとしている。

「連夜の呆けた顔つてのも見物だね」

紅輝がニヤニヤ笑いながら連夜を眺める。連夜が気を取り直すように頭を振って

「ジロジロ見んな」

紅輝の頭を軽く小突く。紅蓮がその手にじゃれついて

「連く久しぶりに遊ぼ？朱音と夕軌は？」

「朱音と夕軌なら・・・」

そう言って笛を吹く。数秒後、紅蓮と同年ぐらいの狼と紅輝と色違いの鼬が現れた。

「久しぶり、連夜。紅蓮に紅輝も」

朱音が挨拶する。夕軌も紅蓮に体をすり寄せ

「お久しぶり、紅蓮兄さん」

「四年ぶりだね。夕軌」

「そついえば二人とも兄弟だったっけ？」

瞳の色以外すべてが瓜二つ。まあ兄弟というよりは双子に近い。

「忘れてたのか」

紅輝が呆れたように呟く。朱音は器用に尻尾で頭を押さえている。

「ゴメンゴメン」

「そついうことは、もう少し申し訳なさそつに言つものじゃん」

紅蓮が連夜の顔を覗き込んでそう言い、夕軌も

「形だけでもすまなさそつにしなきゃ」

「確かに」

「お前ら」

頭痛を堪えるように頭を押さえている朱音。紅輝がため息をついて

『話を戻すぞ。連夜の部屋はここだ。この部屋を三人で使うんだとさ。で、寝室は優香の部屋か克弥の部屋、どっちがいい？』

「克弥と同じは嫌だ。誰が好き好んで男同士で寝なきゃならんのだ。暑苦しい」

『なら、優香の寝室を改造するか。よし、決定』

紅輝が話は終わったとばかりに寝室に戻る。紅蓮も連夜の服の裾を銜えてグイグイ引っ張り

『連夜も一緒に寝よ？朱音も夕軌も皆一緒に寝ようよ。昔みたいに』

『そうね。四年ぶりだしいいかもね』

『寝よう寝よう』

夕軌も紅蓮と同じようにグイグイ引っ張る。連夜は苦笑して

「わかったわかった。わかったから引っ張るな。服が伸びる」

優香の寝室に入ると、服が散乱していた。どれも動くやすく、なおかつシンプルな服ばかりだ。

（どこかの誰かさんとは大違いだな）

そう思いつつ服を畳んで隅に寄せる。

「相変わらず片付けるのは苦手なんだな」

『仕事部屋も凄いことになってるから、覚悟しといたほうがいいぞ』
「やっぱり」

思わず顔を顰めてしまう。昔は、仕事している時間より片づけをしてる時間のほうが多かった。またあんな風になるのか。

『諦めな。優香は片づけが大の苦手なんだから』

『それやらせるより、仕事をやらせた方が無難だしね』

『性格の問題なのかねえ』

『言ってる。あいつがさつだからな』

本人が聞いたなら怒りそうな内容を、本人の枕元で話している四人（一人と三匹）。

紅輝は欠伸をして

『とにかく早く寝ようよ』

「そうだな」

優香を起こさないようにベッドに潜り込む。酷く懐かしい香りが鼻孔をくすぐる。ようやく自分の居るべき場所に戻ってきた気分だ。
「ただいま」

誰にともなくそう呟き、睡魔に身を委ねた。

耳障りな音が静まりかえっている部屋に響く。その音は次第に大きくなり、窓を叩く。

「……雨……か」

ポツリ、と目が覚めきつてない声が漏れる。もう一眠りしようと寝返りを打ち、そこにいるはずのない人物をみつけ目を見開いた。

大声を上げそうになった口を塞ぎ、目を瞬かせる。

「なんで連夜がここに」

優香は啞然としつつようやくそれだけ呟く。よく見れば、朱音や夕軌も一緒に寝ている。

おそらく、紅蓮が連夜達と一緒に寝ようと言ったのだろう。実際に会話は聞いていないが、大体の想像はつくのだ。

小さく笑みを零し、連夜の髪を梳く。自分と同じように細い髪だ。

昔はこの髪が気に入らなかったが、今は結構好いている。理由は寝癖が気にならないから。

「連夜には茶髪より漆黒が似合う」

優香も黒い髪が似合ってるよ。ずっと前に聞いた言葉が脳裏に木霊す。ため息を飲み込んで、窓を開ける。外は薄暗く、正確な時刻はわからないが四時前後だろう、多分。

「……優香、起きたのか」

「紅輝……ごめん、起こした？」

「自然に目が覚めただけだ」

安心したように紅輝の背中を撫でる。気持ちよさそうに目を細めながら

「外は雨か。嫌な天気だな」

「うん」

雨は嫌いだ。雨音を聞いていると、思い出したくない過去^モを思い出してしまう。

軽く頭を振って思考を切り替える。いつまでも過去に囚われていては前に進めなくなる。立ち止まってる暇などないのだ。

「私は私の出来ることをすればいいんだから」

自分に言い聞かせるように呟く。紅輝が励ますように尻尾で背中を叩く。薄く笑って言葉を続ける。

「今までずっと過去から目を背けてた。逃げてたんだ。直視するのが怖かったから。認めてしまうのが恐ろしかったから、ずっと見ないようにしてた。だけど、それじゃあダメなんだ。前に進むには、過去を乗り越えないと話にならない。今頃になって気づくとは、情けないことこの上ない」

最後は自嘲気味に吐き捨てた。

『これはお前の問題だから、俺達は手を出せない。ヘタに手を出すと、傷口を広げかねないからな。だが、一言言っておく。辛くなったらいつでも言え。迷ったら自分の信じた道を行け。一人で抱え込むな。その為に俺達がいるんだから』

優香は顔を歪ませた。目尻には涙が溜まってる。泣いてるところを見られまいとして俯き、涙声で

「ありがと・・・」

『優香が泣くのを見たのは久しぶりだ』

「うつせえ」

涙を拭いながら軽い口調で返す。そうでもしないと泣き崩れてしまいそうだ。

紅輝が何か言おうと口を開いたが、優香の後ろを見た途端わざとらしくそっぽ向いた。不思議に思い後ろを見てみると、前足で頭を押さえてる朱音、真剣な顔して会話を聞いている夕軌、目を丸くしている紅蓮、最後にニヤニヤ笑いながらこっちを眺めている連夜が

「俺らのことは気にせず続けて」

「アホか！」

恥ずかしさと、黙って会話を聞いていた怒りが混ざった声で怒鳴り、近くにあった枕を連夜に投げる。危なげなく受け止めて

「危ないな。一応女なんだからもっとおしとやかにしてなきゃ」

「うるさい」

『連がからかうからだよ』

朱音がそういうと、連夜が心外なとばかりに目を見開いて

「からかつてるんじゃない。遊んでるんだ」

「なおさら悪い」

噛み付きそうな勢いで抗議するが連夜は意に介さず

「ハイハイ。優香ちゃんお静かに」

「子供扱いすんな」

『優香って子供なの？』

さつきより目を更に目を見開く紅蓮。連夜は腹をかかえて爆笑している。紅輝も枕に顔をうずめて体を震わせてる。唯一夕軌だけが話の内容がいまひとつわかってないようで、朱音に聞いている。

「私は子供じゃない。連夜が勝手に言ってるだけだから真に受けないで」

自分の持っている数少ない自制心を総動員させ気を静める。だが、声音にはわずかながら怒りが含まれている。紅蓮は無邪気な笑い声を上げて

『連夜が勝手に言ってるだけなの？そっか。そうだよな。優香は怒りやすくして無鉄砲で考え無しだけど子供じゃないもんね』

物言わず撃沈した優香。連夜は爆笑どころではなく、大爆笑している。紅輝は枕で笑い声を押し殺しているが、時々

笑い声が漏れている。夕軌もようやく理解したみたいで笑みを浮かべている。朱音も同様に笑ってる。

優香は全員を睨んで、ベッドに身を投げた。そして、掛け布団を頭からかぶる。

「不貞寝開始だなッ」

必死に笑いを堪えつつ声を絞り出す連夜。紅輝が少しやりすぎたか

なと思い

『優香、その・・・悪かった。ちよつと悪ふざけが過ぎた』

『優香？どうしたの？どこか痛いのか？』

自分の言葉が優香にトドメをさしたとは露知らず、心配そうに布団の隙間から頭を突っ込む。

『紅蓮つて無意識な分性質悪いね』

朱音が同情の眼差しを優香に向ける。夕軌も苦笑いを浮かべてる。

紅輝が何とか優香の機嫌を直そうとわざと明るい声を出して

『そういえば、あと一カ月後には武術・魔術総合大会が行われるんだつたな。優香はどれに出るんだ？』

「剣術と魔術」

物凄く不機嫌そうな声が返ってきた。連夜が挑戦的に

「へえ、俺も同じの出よつと。今年こそは未成年の部で優勝してやるよ」

そう言い放つと、優香が掛け布団を跳ね上げて

「やれるもんならやってみな」

不敵な笑みを浮かべている。お互いに言い合ってる二人を尻目に夕軌が首を傾げて

『武術？魔術？大会？』

『そうか。お前はまだわからないか』

朱音がそう言い、夕軌に説明する。

『この光の世界では、年に一回武術と魔術の総合大会が行われるんだ。会場はその年毎に火・風・水・雷という順番で回ってくる。今年の会場は火だから私たちのところでやるんだけど、それは置いといて』

そう言つて、何かを脇に退ける仕草をする。連夜は可愛いなあと呟き、頭を撫で回す。

されるがままになりながら話を続ける。

『武術の部門では、剣術、弓矢、魔術の部門では、攻撃魔法、防御魔法がある。全部に出てもいいけど、どれか一部門は必ず出なきゃ

いけないんだよ』

『朱音物知りだね。じゃあ未成年の部ってな〜に？』
今度は紅蓮が朱音に問う。

『未成年の部は八歳から十五歳までで、成人の部は十六歳から出場出来るんだよ』

『そうだったのか』

『知らなかったな。やっぱり物知りなんだな、朱音は』

言い合いを中断して話に割り込んでくる優香と連夜。

『知らなかったのか』

呆れ混じりのため息をつく紅輝。優香と連夜は同時にそっぽ向く。

朱音は苦笑して

『まあそんなことだろうと思ったよ。昔勉強サボったツケが回ってきたね』

『うつせえ』

『ほつとけ』

『説明を続行するか』

朱音がそう言うのと、すぐさま寄ってくる紅蓮と夕軌。朱音は説明を続ける。

『総合大会のあとには、九月に武術大会、十一月に魔術大会があるんだ。その大会は成人も未成年も関係なくこちゃ混ぜでやるから、怪我人が続出するという・・・』

『うわぁ・・・怖いね』

『怪我人が続出して・・・・・・熱中しすぎでしょ』

紅蓮と夕軌がそう言うのと、優香がわざとらしく咳払いする。連夜が意味あり気な笑みを浮かべて

『そういえばどっかの誰かさんは、出場するたびに怪我してたっけ』
『確かに。どっかの誰かさんは毎回大怪我してたっけな』

さりげなく優香の方を見ながら言う紅輝。

『うるさいぞ。余計な事を吹き込むな』

ニヤニヤ笑ってる紅輝と連夜と朱音に向かって、優香は噛み付きそ

うな勢いで怒鳴った。

第十六話 仕事をサボって・・・

それから一週間と少し経ったある日の最高指揮官室。

心地よい風が開け放たれた窓から入ってくる。それに加えて、柔らかい包み込むような日差しが差し込んでいる。それが眠気を誘っているのだ。

仕事机に突っ伏しながら書類をぼんやりと眺めている優香。仕事をしなきゃいけないのはわかってる。だが、昨日は昨日で仕事が付かず、徹夜して終わらせたのだ。そのせいで睡魔が半端ない。都合の良いことにうるさいあいつらも居ないことだし、一眠りするかと思って目を閉じたそのとき

「起きろ！仕事サボるな！」

ゴスッ

怒声と共に、頭に重い衝撃がふってきた。

「——っ——！！」

突然のことで頭を押さえ、痛みを堪えるしか出来ない優香に向かって

「仕事サボって居眠りしてるからだよ」

優香は声の主を仰ぎ見て、その手が握ってるものを見てギロツと睨みつける。

「だからと言っていていきなり鞆で頭をブツ叩くな。頭が悪くなったらどうしてくれるんだ！克弥」

克弥に詰め寄る優香の肩を連夜が叩いて

「大丈夫大丈夫。優香の頭はこれ以上悪くなりようがないから」

「どういう意味だ！」

「そういう意味だよ」

食って掛かる優香を軽くいなす連夜。克弥は笑みを浮かべて

「まあまあ落ち着いて」

「落ち着けるか！」

聞く耳を持たないというのはこういうことだろうか、と小声で感心

してる連夜。

二人を交互に睨みつけて

「お前からこそ人に仕事を押し付けるな！自分らの仕事まで私に押し付けやがって」

「そんな事してないよな、連夜」

「ああ、人聞きの悪いことを言わないでくれなかな、最高指揮官さん」

「人聞きもなにも事実を述べてるだけだ！」

不毛な言い争いを続けていると

「何をやってるんだ、お前らは」

『毎度ながら騒がしいことこの上ないね』

呆れたような呟きが頭上から降ってくる。

「紅輝、朱音。どこ行ってたんだよ」

優香が不機嫌なのを隠そうともせず問うと

『新しい書類だ』

言いづらそうな紅輝を尻目に朱音がはっきり言った。優香は嫌そうに顔をしかめて

「まだあるの……冗談でしょう」

ガクリッと頂垂れる。今日だけでいったい何百枚の書類を片付けなくてはいけないのか。

『そう気を落とすな。俺も出来るだけ手伝うから』

頂垂れてる優香の頭をポンポン叩き、書類を整理し始める。

「ありがとう、紅輝。お前らも少しは見習え！」

『優香、そんなに怒らないで？俺もお仕事手伝うから。ね？』

『俺も手伝う』

「紅蓮、夕軌。ありがとう」

お礼を言ってから、残り二名を睨みつではなく見つめる。

「わかったわかった。俺も手伝うよ」

連夜が両手を挙げてそう言うと、克弥も

「仕方がないな。手伝えばいいんだろ。ったく」

物凄く嫌そうに顔を顰める。

それから数分後。

「厭きた〜」

「真面目にやれよ〜」

「はえ〜よ」

という声がため息と共に室内に響く。

「うるさいぞ、ていうか……」

仕事机から立ち上がり、を睨む。

「くつろいでなにもしてないお前らに言われたかねえよ!」

克弥はソファーに寝そべり、お菓子を食べつつ漫画を読んでいる。

連夜は椅子に座り、こちらと同じく漫画を読んでいる。仕事の書類はすべて優香の書類に加えている。

二人は優香の怒鳴り声を綺麗に無視して、のんびりくつろいでいる。

『優香、落ち着け。深呼吸だ』

「落ち着けるか!」

『本日二回目だね』

朱音が呟く。

『優香〜怒っちゃヤダ』

紅蓮が優香に体をすり寄せる。夕軌も同じように体をすり寄せる。

適当に深呼吸して気を落ち着かせる。そして、書類の山を見て

「こんなの終わりっこないよ。………そうだ」

立ち上がり、書類の山に向かって手を振って

「風よ」

と囁くように言う。すると、風が書類を取り巻き整理し始めた。次いでペンや印鑑に手を振ると、それらにも風が流れて動き始めた。

優香は満足げに頷き

「よし、これで仕事は終わりっと。さて、緋寒に見つかる前に逃げますか」

そう言って、窓枠に足をかける。

「どこ行くんだ？」

連夜が問いかけると、優香は楽しそうに答えた。

「風んところ。どうせあいつも仕事に嫌気がさしてるころだろうしね」

『俺はお昼寝してる』

紅蓮がそう言っていると、夕軌も

『俺も』

と言い、二匹は寄り添い丸くなって目を閉じた。紅輝は疲れたようにため息をついて

『俺もパス。行つてらっしゃい』

『私も行かない。風の面倒見とくよ』

「わかった。じゃあ行ってくるね」

そう言い残し、優香は窓から出て行った。克弥と連夜は互いに顔を見合わせて

「俺は行くけどお前は？」

克弥がそう言うと、連夜は窓枠に手をかけ、下を覗き込みつつ

「行くに決まつてる。優香と居ると退屈しないし、仕事にはうんざりしてたところだ」

「そうか」

二人は笑い合い、慌ててそっぽ向き外へ飛び出した。

「報告事項は以上でございます。風様」

「堅苦しい呼び方はしないでって何回言わせるの？守弥」

風は嫌そうに顔を顰めつつ自分の目の前に立つ男の子、守弥を睨む。

「申し訳ありません」

全然申し訳なさそうに謝る守弥。竜也が口元を隠している。おおかた笑みを隠しているのだろう。

「だから敬語はやめると・・・」

頭を押さえつつそう言っていると、守弥は悪戯っぽい笑みを浮かべる。ここに一般の女性が居たら心の中で悲鳴を上げてただろう。

「すみません、ついいつもの調子で」

「まあいいけど」

ため息混じりに呟く。竜也が守弥の肩に手を置き

「闇の奴らもお前がこっち（光）の人間だとは思いないだろうな」

「バレたら間諜の意味ないですからね」

「守弥は一番信用してるからね。今後も期待してるよ」

「はっ、ありがたいお言葉」

そう言って頭を下げる。そして守弥が退出しようと踵を返したとき
《ガッシャーーン》

破壊音と共に黒い塊が飛び込んできた。もちろんガラスが盛大に砕け散り、窓の傍にいる凧に降り注いだ。竜也が水を使って凧をガラスから守る盾を作り出す。

「——っ！　いつて。思ったよりきつかったかも」

黒い塊がムクリと起き上がった。三人は無言で見つめる。こういう登場をする奴は彼らの知ってる中では一人しか思い至らない。

「優香！　なんてことしてくれるんだ」

凧が大声で怒鳴る。優香はやけに嬉しそうに笑いながら

「よっ凧。仕事ははかどってるかい」

「まずはなんで窓から入ってきたのか説明しようか」

淡々と訊ねる竜也。口調が淡々としてる分彼の怒りのほどが伺える。だが優香はそんな彼の様子を意にかいすことなく

「ああ、そのことか。それなら簡単だよ。凧達が仕事に息詰まってるんじゃないかなって思っ、一緒に散歩でもしないかなって」

「いいね」

最初の怒りは何処へやら、喜色満面の顔で抱きついてきた凧。優香は若干困ったように微苦笑を浮かべている。

竜也が何かを言おうと口を開いたとき、割れた窓の外から

「そういうことだ。竜也も行こうぜ」

「そうそう。仕事詰めも良くないしさ」

窓から入ってきたのは連夜と克弥だ。守弥が目を見開き

「兄さん！」

「守弥！？なんでここに」

お互いを驚愕の眼差しで見合う兄弟。凧が説明する。

「守弥は元から光側の人間なんだよ。私が守弥に闇の潜入捜査を命じた」

守弥が付け足す。

「まさか、潜入した闇から逆に光の潜入を命じられるとは思ってませんでした」

「へえーお前間諜だったのか」

優香がひゅーと口笛を吹く。連夜も守弥をジロジロ眺めて

「お前が間諜か。凧が直接報告を聞くって事は相当優秀なんだろうな」

「そんな事はありません」

感じの良い笑みを浮かべて首を左右に振る守弥。怒るタイミングを逃した竜也が守弥の横に立ち

「こいつは超優秀だぜ。今までの誰よりもな」

「竜也がそこまで褒めるって事は、やっぱり優秀じゃん」

優香が感心したように呟く。

「僕はそこまで優秀じゃないですよ。彩夜が勝手に僕に向かってペラペラ喋ってくれるだけです」

「その敬語やめてくれない？どうせ同年代か一個下くらいでしょう？」

「僕は皆さんと同い年ですよ」

連夜が感心したように

「この年でそこまで賞賛されるとは・・・とんでもない奴だな」

「守弥は闇では火の後継者だよ。光では？」

「風の守護者です」

数秒の間があつた。優香と連夜は同時に訊ねる。

「風って・・・燈架の守護者！？」

「そうなりますね」

口をパクパクさせている優香と連夜を面白そうに眺める兄弟（守弥と克弥）。竜也はニヤニヤしながら

「予想通りの反応だな」

「驚いてる驚いてる」

いち早く驚愕から立ち直った連夜が守弥に指を突きつけて

「こいつが燈架の守護者・・・マジかよ」

「燈架もようやく守護者を決めたのか。まあそんな事はどうでもいい。緋寒に見つかる前に行こうぜ」

「賛成」

四人の声が重なった。

「んじゃあ早速」

そう言うが否や優香は風を脇に抱え、割れた窓ガラスから外へ。一応言っておきますがここは六階。一般人なら死ぬほかない高さだ。案の定

「きゃあーーーーー！！！」

風の黄色い悲鳴が響き渡る。優香は楽しそうに笑いながら

「あはは、風の女の子っぽい悲鳴初めて聞いた」

「俺も」

上から連夜の声が降ってきた。視線を向けると、竜也と連夜と克弥も飛び降りたところだった。そして、克弥と連夜二人に襟首を掴まれ守弥も落ちていく。

「これはどの絶叫マシーンも負けるな、結構面白い」

「風が気持ちいいなあ」

「楽しそうになに言ってるんですか！兄さん、竜也君」

守弥が体勢を整えようと無駄な努力をしている。その間も地面はすぐそこまで近づいていた。風は目を閉じる。この距離じゃあもう・・・

「風は忘れてるっばいな」

優香はニヤツと不敵に笑って風を操り全員の体を包み込む。フワツと体が浮く感覚を覚え、風は目を開けた。風の膜が全員を包んで空

に押し上げている。

「・・・・・・・・風を出すのが遅い！」

優香に向かって叱責すると、優香はめんどくさそうに頭を押さえて

「えーだってスリルがあつていいじゃん」

「確かに楽しかったね。もう一回やりたいな」

連夜がニコニコ笑いながらそう言っていると、克弥も

「俺ももっかいやりたい。また今度やろうぜ。なあ竜也」

「そうだね。ところで、どこに行くんだ？優香」

「んー秘密の場所。私と燈架の」

悪戯っぽく笑う優香。

「それを私らにバラしちゃっていいの？」

凧が優香の顔を覗き込みつつ問うと、優香はクスツと風に溶けそうなほど小さく笑い

「場所がわかったって風の魔法が使える奴。それも空を飛べる奴以外行けるはずないから、バラしたって大丈夫な訳」

「そうなんだ。ちなみに何処そこ」

克弥が面白半分といった感じで訊ねてきた。

「克弥は聞いたことあるかわかんないけど、『疾風山』だよ」

すると、克弥以外の顔がいつせいに引き攣った。守弥が確信を込めた声音で

「それはまさか断崖絶壁かつ誰も近寄らない魔の山と恐れられてるあの『疾風山』ですか」

「そんな風に思われてるんだ。私はあの山結構好きだけどな」

「まああの山に行ったことないし、大人達が勝手に危ないと言ってるだけだしな」

連夜が腕を組みうんうん頷いてる。凧も竜也も頷いてる。守弥は少し複雑そうな表情だ。

「じゃああと一時間空の旅をお楽しみ下さい」

どっかの案内役の人みたいな台詞が風に溶けてく。

第十七話 魔の山でダイビング！？

眼下には美しい町並みがある。いつもは上から見る機会がなかったので、優香と守弥と連夜以外の全員が息を呑んで見つめている。

しばらく経った時、下の町から聞き慣れた声が聞こえてくる。

「皆、魅希ね、あれが欲しいんだ、買ってよ」

「うわっ。出た」

凧と守弥を除く口から同じ言葉が漏れた。下を見てみるとピンクのワンピースできわどい所までスリットが入ってるど派手な服を着た魅希が、数百人にも及ぶ男子を引き連れて歩いてた。ちなみに魅希が欲しいと言った物は、高価な化粧品類やその他諸々だ。

「ねえ、お願い」

『わかりました。魅希様』

男共の声が響く。とてつもなく

「うるさい」

今度は全員の声が重なった。互いの顔を見合って吹きだす。

そこを通り過ぎてから数十分後。今度は一軒のお茶屋さんに美麗と優也が居た。

「あつ、美麗ちゃんだ。美麗ちゃん」

優香が子供のようににはしゃいでいる。凧が呆れ混じりに

「この距離じゃあ聞こえないよ」

と言っているが、優香は聞く耳をまったく持たず美麗に手を振っている。が、美麗は気づかず団子頬張り、お茶を飲んでいる。

「美麗・・・それ二十本目だよ。いい加減やめといたほうが・・・」

「優也もいるかい。みたらしとあん団子どっちがいい？」

「じゃあみたらしで・・・って違うから」

思わず受け取ってからそう言うが、美麗はまったく意に介さず団子を食べている。

「相変わらずだね」

連夜が口元を隠しつつそういう。

「二十本って食べすぎだろう・・・」

克弥が頭を押さえつつそういうが、竜也が

「俺はわかる気がするな。雷の国の茶屋は美味しい団子があるから」

「確かに」

凧と優香が同意する。

「そうなんですか。僕も今度食べてみようかな」

守弥が呟き、優香が

「それがいい。なんなら美麗ちゃんに案内してもらいなよ。茶屋の場所なら知り尽くしてると思うよ」

「そうします」

そうこうしてるうちに目的地が見えてきた。

近づくにつれて、何故ここが魔の山と恐れられてるかがわかる。人をまったく寄せ付けない断崖絶壁に加え、なんとなく気味が悪いのだ。

だが優香は宝物を目の前にした子供のように無邪気な笑みを浮かべ「もうすぐ見えてくるよ。空中散歩で偶然見つけた秘密の場所が」その言葉通り、すぐに秘密の場所が視界の端に見えてきた。

『うわぁ』

計五人の感嘆した声だ。山の頂上が窪んで満々と水をたたえた湖になっている。湖は透き通っていて、底が見える。様々な色の魚の群れが泳いでいる。これは今まで見たどの景色にも負けず劣らず美しい眺めだ。

「綺麗」

凧の唇から素直な感想が零れた。優香が意味ありげな笑みを浮かべつつ

「湖の中にはいろんな種類の魚がいるんだよ」

「泳ぎたいなあ」

「じゃあ泳いできなよ」

凧が聞き返す前に突然空中に投げ出された。目を見開いて周りを見ると、克弥、連夜、守弥、竜也も同じように落下している。上を見ると、優香が手を振ってるのが見えた。

「くっやられた」

急いで魔力を足の裏に集中させて、体勢を立て直して足を下にする。物凄いスピードで落下していく中でその体勢を保つのは骨が折れたが、唇をかみ締め落下していく。他の皆は凧ほど状況把握が出来ておらずただ落下していくだけだ。守弥はさすがとも言おうか。冷静に状況分析をし、自らの体を風で包み込む。それらを上空から見ている優香は不敵に笑んで

「さすが風の守護者。燈架に選ばれただけはあるな。凧もなかなかやるじゃん」

バsshアン

盛大な水しぶきがあがり、最初に克弥、次に連夜、竜也の順に湖に突っ込んだ。凧は水の上に波紋ひとつ立てず着地した。そしてしゃがみこんで安堵のため息をついた。守弥も少し離れた場所に着地し、湖の中を覗き込んでる。

「クスツいい気味だ」

凧も同じように湖を覗き込みつつ呟く。

凧の三步先に気泡が上がった。見つめていると克弥があがってきた。だがあがれないらしく首から下はまだ水の中だ。次いで連夜もあがってきた。竜也の姿はない。

克弥は頭を軽く振って水を飛ばし髪をかきあげて

「冷て〜ったく。優香の奴やるのが無茶苦茶だろう。そう思わないか」

「ウザッ」

一言言い放ち克弥の頭を押さえて再び水中に突っ込む。しばらく気泡が上がっていたがやがてそれも消えた頃ようやく手を放し

「……………死んだか」

「ヒデエ」

ボソッと呟いた連夜。ここまで容赦ないとは。そのとき、風の後ろから

「水も滴るいい男」ごへっ！」

その言葉が言い終わった直後、風の裏拳が容赦なく優香の顎に炸裂した。痛そうだ。

優香はそのまま後方に吹っ飛び、水の上に大の字に倒れこむ。それと入れ替わるように竜也が水の中からあがってきた。そして大の字に倒れている優香を見て

「なにがあっただ……」

その後、克弥も無事に浮いてきたので回収して、魔力で水気を飛ばし優香の風で上空へ。

「おい優香。いきなり何してくれたんだ」

「寒くて凍え死ぬかと思ったぞ」

「いくら暖かくなっただとは言えまだ五月の終わりだぞ。俺らを殺すきか」

詰め寄る三人を手で押し返しながら

「まあまあ。気持ちよかったでしょう」

『反省しろ！』

「ハイハイ、反省してますよ」

「はいは一回」

「はい」

俯いて叱責に耐える優香。三人も反省したと思い説教をやめる。三人が優香から視線を外したとき、優香と風が目配せしあったのには誰も気づいてない。

「よし、そろそろ帰ろうか。もう昼過ぎてるし」

竜也がそう言い、克弥がそうだな、と言った瞬間再び三人の足元から支えていた風が消える。

「これってまさか」

「さっきと同じ展開」

「てことは」

『優香!!』

と怒鳴りつつ落ちていく三人。優香と凧はハイタッチして

「やった〜成功」

「上手くいったね。凧」

守弥が目の前ではしゃぐ二人と、おぼえてろ〜とかお決まりの台詞を言いつつ落ちていく三人を交互に見つつ苦笑を浮かべてる。

再び派手な飛沫があがり三人は湖に突っ込んだ。が、先ほどの学んだようですぐにあがってきた。そして口々に叫びだす。

「おい！何してくれんだ、優香！」

「降りて来い！一発ぶん殴んなきゃ気がすまない」

「凧もグルか！いつの間に協力してたんだ！」

三人の怒声を綺麗に聞き流し

「さて、帰るとするか。腹も減ったしね」

「そうしよう。今日の昼ごはん何かな。優香はなに食べたい？」

「チャーハン」

「僕も一緒にしてよろしいですか」

『もちろん』

楽しそうにワイワイ騒ぐ三人を恨めしそうに見上げる下の三名。そのまま飛び去っていく優香達を見て

『置いてく〜！』

「じゃあね〜頑張つて。克弥と連夜は私の守護者なんだからこのくらい簡単でしょ」

「そうそう。竜也も私の守護者ならこんくらいの事出来なきゃね」

優香と凧が交互に言う。守弥は爆笑している。

そして、克弥達から見えなくなったら近くの木に止まる。

「どうなるかな」

「三人とも負けず嫌いだから、楽しいことになりそうだね」

「兄さんは足だけ速いですからね。誰が先に水の上に立てるかで決まりますね」

一方の湖の中では。

「あいつら言いたいこといいやがって」

「思い知らせてやる」

こういう時だけ意気投合する克弥と竜也。連夜だけは冷静に目を閉じて優香達の魔力の残滓を負う。

「絶対見返してやる。行くぞ竜也」

「よしきた」

二人同時に水から飛び出し、優香達が去って行った方向に向かって走り出す。人間ではありえないほどのスピードだ。連夜は二人を無言で見送り、誰も居ない場所に向かって

「お前らもいい加減出てきなよ」

「やっぱり連夜にはバレてたか」

木から飛び出してきた優香と凧と守弥。連夜は薄く笑みを浮かべつつ「当たり前。小さいときから優香と悪友やってたんだから、わかんないはずはないよ」

「違うない」

凧がつまらなそうにそっぽ向く。連夜と凧はなぜか相容れないのだ。まあその話はまたあとで。

「そろそろ帰りましょう。各当主方がお待ちになってるでしょうし」

「説教がお待ちになってるの間違いでしょ」

優香は物凄く嫌そうに顔を顰めつつ呟く。連夜も若干嫌そうだ。

余談だが、昔説教された回数が一番多かったのが魅希と優香と連夜なのだ。ちなみに説教されたことが一番少ないのが燈架と美麗と優也。

優香の風で空を飛びつつ城に向かっていくと、前方で小さな砂煙が上がってる。見てみると、克弥と竜也が普通の人間ならありえない速度で走っているのが見えた。守弥は苦笑いしつつ

「兄さんと竜也様は相変わらず足が速いですね」

「体力馬鹿だからね」

連夜がバカにしたように鼻で笑う。

「連夜だって体力馬鹿じゃん」

「あんな奴らと一緒にすんな!」

横で始まった言い合いをうるさそうに睨む凧。その凧をなだめるように守弥が

「落ち着いてください、凧様。深呼吸です」

「敬語をやめろ!」

ギロ、と睨みつけると

「睨まないでください」

そんな会話をしているうちに優香達は寮に着いた。寮の玄関に着地すると

「よっ遅かったじゃねえか」

「俺らのが早かったようだな」

克弥と竜也が勝ち誇るように腰に手を当ててる。

「そうみたいだね・・・」

欠伸びつつ適当にそう言う優香。あきらかにどうでもよさげだ。凧にいたってはさっさと食堂に向かって行く。

「皆さん、こんなところに突っ立ってないで早く中に入りましょう」

守弥がパンパンと手を叩いて入り口の扉を開けた。

「そうしよう。今日の昼食なにかな」

スキップしながら食堂へ走っていく。連夜がそのあとを追い、守弥、克弥、竜也と続く。

食堂に入った途端、美味しそうな香りが鼻孔をくすぐる。優香が無邪気に笑いながら

「よしっいただきます」

机に綺麗に並べられていたご飯に飛びつく。今日の料理当番だった風華と翡翠が顔を見合わせてしまったほどだ。

他の人は行儀良く手を合わせ、優香の食べっぷりを横目で見ながら

食べ始めた。ちょうど風が優香のほうを見た時、
優香はご飯を勢いよく口に詰め込みすぎたようで、連夜に背中を叩かれていた。それを見た人全員が爆笑している。もちろん風も含めた全員だ。

皆と一緒に笑いながら

（いつからこんなに楽しくなったっけ……いや……いつからこんなに仲良くなったっけ）

第十八話 凧の過去

消えない過去がある。深く癒えることのない傷がある。闇というベ
きモノが少しずつ大きくなっていく。一生消えることのない傷跡が、
しだいに闇に変わっていく。止める術はない。居場所がない限り・

雪が降っている。心まで凍てつきそうな冷たい雪が。

「あの子よあの子。後継者になった子」

「でもあの子親がいないんでしょ」

「聞いた聞いた。捨てられてたあの子を現当主が拾ったんでしょ」

「後継者の証があるからってあんなどこの馬の骨かわかんない奴が
後継者なんて」

「この国も終わりがも」

「しっ聞こえるよ」

そんな大人達の横を生気のない目をした少女が通り過ぎていく。

少女が通り過ぎたらまたひそひそ話し出す。歓迎されてない。そんな事は最初からわかってた。だがもうどうでも良い。すべてがどうでも良くなった。

聖藍にお前は捨てられたんだと告げられたときは、絶望が襲いかか
つてきたが今はもうなにも感じない。

涙も枯れてしまった。もう一生分流しきってしまったかのように。

闇が蠢く。その闇に意識のすべてを委ねようとしたとき

「あなた、なにしてるの？」

幼い声が問いかけてきた。顔を上げると、真っ白な雪の中にくるつ
と巻いてある綺麗な茶髪が視界に飛び込んできた。見たことのない
顔だった。少女がもう一度問うてきた。

「あなたはだれ？」

「あんだこそだれだよ」

つつけんどんに言つと、怖がる様子もなく

「わたし？わたしは魅希っていうの。ひかりのこうけいしゃよ。あなたは？」

「わたしは凧。みずのこうけいしゃ」

ぶつきらぼうに名乗ると、魅希は驚くほど優しい微笑を浮かべ

「凧っていうの？」

一拍置いて手を握ってきた。目を見開いて固まる凧の様子に気づかず

「いいおなまえね」

「わたしといっしょにいないほうがいいよ」

「どうして？」

「いいことないから」

そう言つと、魅希は首を傾げてからこう言つた。

「そんなのいっしょにいてみないとわかんないじゃん」

これが凧の未来を変えた少女との出会いだった。この少女と出会わなければ今の自分はなかっただろう。

「みんな、このこがみずのしゅごしゃのこなんだつて。なまえは凧。わたしたちとおないどしなんだつて。ね？」

「うん。五歳になった」

魅希がやたらと嬉しそうに話しかける。皆の中の強気そうな少女が値踏みする様子上から下までジロジロ眺め

「ふーん。このせいきのかけらもないやつがしゅごしゃねえ」

「優香ちゃん、そんなにジロジロみたらしつれいだよ」

弓矢を肩に背負った少女が優香と呼んだ少女を嗜める。優香は頬を膨らませ

「いいじゃんか。燈架はケチだなあ」

「そういうもんだいじゃ」

言い合いを始めた二人を捨て置き、お茶を飲んでる平和オーラ垂れ流ししてる少女が名乗る。

「わたしはかみなりのくにのこうけいしゃ、美麗といえます」
「ぼくはかみなりのくにのしゅごしゃ、優也です。よつよろしく」
「おれはひのくにしゅごしゃ、連夜。おぼえなくていい」
非友好的な態度をとる連夜。竜也が連夜の肩に腕を置き
「あいかわらずぶあいそうなやつ。おれはみずのくにしゅごしゃ、
竜也。これからよろしく」
「……よろしく」

それから一年が経ったある日。

いつものように薄暗い通りに呼び出された凧はうんざりしていた。
今日で何回目だろう。数えるのも億劫になってきた。目の前には通
称いじめっ子と呼ばれる少女が数人、偉そうに腰に手を当てている。
「いい加減こういうことやめて欲しいんですけど……」

「うるさい。親無しが」

髪をツインテールにしてる少女がそう言うと、リーダーらしき人が

「まあまあ、落ち着きなつて」

「だけど愛夢^{あいむ}。こんな親無「いい身分だよね」優遇されてさ。さすが後継者様。チョー羨ましいわ。どこの馬の骨かわかんない捨てられっ子のくせにさ」

明らかに悪意込めまくりの言葉だ。凧は無言で手のひらに爪を食い込ませた。こうでもしないと飛び掛ってしまいそうだ。リーダー的少女、愛夢の演説は続く。

「あんたみたいな力がない奴が後継者になれるなんて、マジ信じらんないわ。てことで私に後継者の座譲ってくれない？あんたみたいな親無しの特別扱いされてる奴みてると思ったらくんだよね」

「なんで私があんたらの都合で後継者をやめなきゃいけないのかわかんない。それに後継者は生まれながら決まって「黙りな！」

髪をお団子にしてる少女が腰にさしてある刀の柄に手をかけた。

「あんたに拒否権はないの。あんたみたな弱い奴が、後継者の証があるからって優遇されてるのが気に食わないんだよ！ここで死ぬ！」

その言葉を合図に、少女が武器を手に襲い掛かってくる。風は必死に応戦するが、いかんせん数が多すぎる。

腕、足、腹、背中、頬、胸に次々と切り傷が増えていく。

「どうせこんな奴を助けに来るやつなんかないんだ。厄介な魅希は今当主たちと呼び出しを食らってる。じわじわいたぶってやろう」その通りだ。自分を助けに来る奴なんかない。魅希だけだ。自分を特別扱いしないで友として接してくれたのは。他の守護者や後継者達は一定距離離れたところから話しかけてくるだけだ。

まあ話かけられても、最低限の返事しかなかった自分が悪かったのもあるが。

「いいざまだね。水の後継者様よお」

壁に背中を預け喘ぐ。口の中に血の味が広がる。視界が揺れる。体の感覚がまったくない。

「これでトドメ」

いじめっ子全員が刀を振り下ろした。

こんなところで死ぬのか。まあ自分には相応しい最後かもしれない。キーン

金属同士がぶつかり合う甲高い音が響く。咄嗟に閉じてしまった目を恐る恐る開いて見ると

「・・・火の後継者!？」

「よっ水の守護者の・・・なんて言っただけ?・・・っ・・・ねぎだっけ?・・・ぎんなん・・・だっ・・・け?」

「風だよ!なんだよぎんなんって」

「・・・ごめんごめん。で、・・・っ・・・大丈夫か?」

数本の刀を一本の刀で止めたままで心配そうに振りかえる優香。そのとき

「あんだ・・・そこ・・・」

優香の脇腹に止めきれなかった刀が一本突き刺さってる。そこから赤い血が流れる。苦しげに息をしながら

「こんくらいッ・・・どって事・・・ない。・・・それより・・・

「怪我は？」

「私の事より自分の事を気にしなよッ！血が出てんだぞ」

「そうそう、自分の心配しなよ」

優香の脇腹に刺さってる刀をゆっくり押しながら愛夢が囁く。優香の顔が苦痛に歪み、唇から血が滴る。

「うるせえ・・・」

風に溶けてしまうほど小さい声で呟く。髪で表情が隠れていて見えないが、優香のまとう空気が触れれば斬れそうなほど鋭くなる。

次の瞬間、優香は顔を上げた。その瞳は真紅に染まっていた。

その目を真正面から見た愛美は一步後ずさった。優香の瞳には抑え切れない怒りがこもっていた。

「死にたくなければ二度と風に出すな！でなきゃお前らを殺す」
この年の少女でもわかる明確な殺気を向けられ、いじめっ子達は一目散に逃げ去った。

「あれくらいの仕打ち、耐えられたから。余計な事しないでよ」

優香の傷の手当をしながらそう言った。まさか魅希以外に助けてもらえると思わなくて、嬉しさ半分で動揺していた。

「助けてやったのにその言い草はないだろう」

時々顔を顰めつつ、不貞腐れる優香。

「迷惑だって言ってるの！どうせ私の事親無しの力のない名ばかりの後継者って思ってるくせに！」

いつも心の中で叫んでた言葉を吐き出す。

優香は目を見開いて驚いたように私を見ている。数秒黙ったあと

「じゃあ私が・・・私達がお前の友達になってやるよ。それと、名ばかりの後継者って言われなくなるように一緒に特訓してやる」

「え・・・」

人間意外な答えが返ってくるとどうしても上手く返事が出来ないらしい。呆然としていると優香がニコツと笑って

「よろしくな、風」

それから一週間と少し経ったある日。全員で親睦を深めつつ修行しよう。という優香の提案で近くにある修練場へ向かった一行。が・

・
「魅希！早速サボってんじゃねえ」

少女にあるまじき怒声を上げる優香。怒鳴られた本人は

「うるさいなあ。魅希は今神聖なメイク勉強中なの〴〵邪魔しないで」

「な〴〵にが神聖なメイク勉強だ！そんな事してる暇があるんなら、魔術と剣術でも磨け！」

「え〴〵魅希そんな野蛮な事したくない」

「なつ〴〵〴〵野蛮だと〴〵〴〵この野郎〴〵〴〵真面目に取り組んでないお前がそんな事言えると思ってるのか！」

「うん。思ってるよ」

「てめえ〴〵〴〵」

果てがなさそうな二人を見て、美麗がのんびりした声で

「優香ちゃん。あんまり暴れると傷口開くよ」

「傷！」

「いつ負ったんだ！誰にやられたんだ」

不機嫌そうに木に寄り掛かった連夜と、微笑ましいものを見てるような顔をしてた零が目の色を変えて優香に詰め寄る。凧が深く俯く。優香は困ったように頭を押さえて

「この傷は大事な友達を〴〵〴〵家族を守った証なんだ」

「友達？」

「家族？」

うろんげに返した二人には何も言わず、凧の傍に歩いていきその頭に手を乗つけて

「だから〴〵〴〵そんな悲しそうな顔〴〵〴〵すんなよ」

優しく頭を撫でる。凧はその手を払って、そっぽ向き

「ほっというてよ」

「えっと凧さんだっけ？なんでそんなにツンツンしてんのかな」

優也がビクビクしながら訊ねる。凧が目をやると体を強張らせ涙目になる。ずいぶん気弱な性格のようだ。

竜也が優也の肩に腕を置き

「お前は相変わらず気弱だなあ」

「男のくせに泣くんじゃねえよ」

連夜が吐き捨て、優也が更に泣きそうになる。零がその様子を見て「お前ら。優也をいじめるな。優也もすぐ泣くな」

三人の頭を順番に叩く。まるでお兄さんみいだ。

「優也君は連夜君と竜也君の玩具になってるね」

燈架が苦笑しつつその様子を傍観してる。その横ではいつものようにお茶とお茶菓子を広げ、美麗がくつろいでいる。

「よっし。連夜、竜也、手合わせしよう。今日こそ連夜に勝つ」

勢いよく拳を上にあげて傷に響いたのか顔を顰める。連夜が口元に微笑を浮かべ

「受けてたつ」

凧は目を見開いた。喜怒哀楽が欠落したような顔で突っ立てた連夜が笑ったのだ。しかも見たものをハッとさせるような、魅力を兼ね備えた笑みだ。

「久しぶりにみたな。連夜の笑顔」

竜也がひゅーと口笛を吹いた。優也は同姓なのに見惚れている。

「きゃあ、連ったら超カッコイイ」さすが魅希の王子様」

すぐさま元の不機嫌そうな顔に戻って

「俺はお前の王子様じゃない。気持ち悪いこと言っな。鳥肌がたつ酷い言いようだ。そう思ったのか凧が批判的な目で連夜を睨む。連夜がその視線に気づき真っ向から睨み返す。その不毛な睨み合いの真ん中に立ち

「お前ら、なに見つめ合ってた？もしかして一目ぼれてやつか？」

優香が間の抜けた事を真顔で言い、全員が一瞬固まったあと笑いの嵐が巻き起こった。

第十九話 水無月祭りまで一週間

六月に入った。光は年に十二回ある祭りのうちの六月の祭り。水無月祭りの準備で大忙しだ。

「そこ、ちよつと間違つてるよ。ちゃんと位置を正して」

「おいそこ。仕事をサボるな！」

「こら！メイクしてんな」

「のんきにお茶飲んでるな！しっかり働け」

そこら中で怒鳴り声が飛び交う。あと一週間後には水無月祭りが始まるのだ。忙しくなるのは当然だろう。

大通りは人が行きかっている。大人から子供まで忙しそうに行き来していて、慌しいことこの上ない。

「零兄。これどこだっけ？」

「それはあそこだよ。二本目の街頭のそこ」

「零さん。これは？」

「それは緋寒に聞いて。俺の監督下じゃない」

矢継ぎ早の質問に若干疲労を滲ませながら答える零。優香達は本来は指示する側だが、昔大失敗した事があるので指示される側になったのだ。

「十分休憩」

零の声と共にあちこちで嬉しそうな声上がる。かれこれ二時間以上ぶつ続けで動いていたので皆疲れていたのだ。

「よっしゃー！休憩だ」

とまあ無駄に元気な奴もいますけど。その声を目ざとく聞きつけた緋寒が眉をつり上げる。

「そんなに元気があるんならもつと働け！」

「うつせーよ。私は緋寒みたいに人に指図するだけの楽な役割じゃないの」

「人に指示するのも骨が折れるんだぞ。それがわからないほど大馬

鹿なのか。お前は」

「なんだと・・・このクソ親父！」

突然始まった親子喧嘩に、外野の皆さんは大爆笑。連夜と竜也と克弥にいたっては腹を抱えている。笑いすぎて息が出来ず、咳き込んでる奴もいる。だが、止めようとする奴は皆無だ。

「優香ちゃんは相変わらず元気一杯だね」

「そうじゃなきゃ優香ちゃんじゃないからね」

自他共に認める大親友の二人の言葉に、凧が

「そうそう。逆に静かだったら気味が悪い」

凧の言い草に零が笑いをかみ殺しながら

「優香が元気ないと空気が重くなるよね」

優也がおろおろしつつ

「そんな事言つてないで止めようよ」

「ほつときな。それにしてもいい年して緋寒も進歩ない言い合いばつかして・・・」

凧が頭を押さえそう呟くと、克弥が淡い笑みを口元に乗せ

「毎回こんなことしてる訳？」

「そうだよ。ホントよくもまあ飽きずに」

竜也がやれやれと肩をすくめる。連夜が空を仰ぎ

「家族か・・・」

《私がお前の家族になってやるよ。そしたらもう・・・一人じゃないし寂しくないだろう？来いよ、暁家へ》

懐かしい声が脳裏に響く。この声のおかげで俺は自分の居場所を見つけた。

「なんか言った？連夜」

竜也が首を傾げつつ問ってくる。

「いや、なんでもない」

「休憩終わり。皆さん！作業を再開して下さい」

零の声が響き渡り、全員は重い腰を上げて各々の作業に取り掛かる。優香と緋寒もようやく言い合いをやめて、睨みあいながら作業に移

った。

「不機嫌な優香さんの機嫌直しといきますか」

誰にともなく呟く連夜。

「俺も手伝うよ」

「独り言を拾うな」

いつの間にか横に立ってた克弥を横目で見る。

「まあまあ。睨むなって」

手をあげてニコニコ微笑む克弥。その笑みを見てると無性に殴りたくなってくるのは俺だけだろうか。そんな事を思っていると

「おいそこ。サボってんじゃない。残ってやらせるぞ」

それだけは勘弁して欲しい。心の中でそう呟き、作業に取り掛かる。ちらつと優香の方をみると、道具に八つ当たりしていた。そこへ呆れたようにため息をついている風が

「子供じみた真似はやめなよ」

的な事を言ったらしく、優香が風に詰め寄って怒っている。

「俺も交ざろうかな。面白そうだし」

「やめときな。今交ざったら巻き添えを食うぞ」

「ちえっ。つまんねえの」

「克弥君、連夜。口を動かしてる暇があるなら手を動かしな！」

零が半ば怒鳴るように声をかける。二人は適当に返事をして作業を再開。

「お疲れ様。とりあえず今日分のやるべきところは終わったみたいだから、ここまでにしようか。解散」

「お疲れ様でした」

「お疲れ」

時刻は午後七時。友達や仕事仲間挨拶をしてそれぞれの家へ帰っていく。

「やっと終わった」

終わったと自覚した途端疲労の波が押し寄せてきた。

「一生分働いた気がする」

「そんなわけないじゃん」

馬鹿にしたように鼻で笑う凧。美麗がお茶を差し出し

「これを飲むと疲れが吹き飛ぶよ」

「もらう」

一気に飲み干す。冷たいお茶が臓腑に沁みて旨い。おかわりをついでもらって

「やっぱり美麗ちゃんのお茶は美味しいね」

「そりゃよかった」

「美麗。俺にもお茶くれよ」

連夜が手でパタパタ仰ぎつつ手を出す。美麗はその手をチラッと一瞥して、妙に色が濃いお茶を渡す。

連夜は一口飲むと、吹きだして

「苦ッ！」

優也を除く男性陣がいつせいに口元を押さえる。女性陣は燈架があゝあと言わんばかりの顔で腕を組み苦笑してる。凧は小声で

「ざまゝみる」

と呟いてる。優香は複雑そうな笑みを浮かべてる。そんな和やかな空気が流れている場に

「皆々魅希喉渴いちゃった。飲み物持ってきて。お・ね・が・い。パチ」

数多の男を虜にする笑顔を振り撒きながらウインクをする魅希。零を含めた連夜達以外には効果絶大なその笑みを至近距離でみた数名の男が、目をハートにしながら崩れ落ちた。他の男子共は野太い声を揃えて

『今すぐ持ってまいります、俺らの魅希様！』

と大合唱している。はつきり言って、騒音以外のなにものでもない。

「またやってるよ。魅希の奴」

忌々しそうに舌打ちする優香。魅希が可愛いのは認めてやってもいいこともないが、こうも毎回アイドルのコンサート並みに騒がれる

とウザさを通り過ぎて殺意を覚える。コップに残ってたお茶を一気に飲み干す。恐怖を覚えるくらい爽やかな笑みを浮かべ

「私ちよつとあの連中を沈めに逝ってくるわ」

「優香。漢字が間違ってるような気がするんだけど」

尻が引き攣った笑みを顔面に張り付けつつ問うと、優香はこちらの背筋を冷たくするくらい軽やかな笑い声をあげ

「気のせいだよ。あんなに騒がれたら近隣住民に迷惑だろうから、一喝殺りに逝くだけだつて」

内容がとてつもなく怖い。それに加え、笑いながら言うもんだから更に怖い。

「明らかに漢字が間違ってるだろう」

「ホントに殺すなよ」

竜也と連夜は軽い口調で返す。

「うゝん。半殺しにするかもね。少なくとも黙らせた後、五体満足ではいられないかもしれない」

その言葉を満面の笑みで言うのだ。燈架は青ざめた表情で

「優香ちゃん、落ち着いて」

「なに言ってるの、燈架ちゃん。私は最高に冷静だよ」

「燈架をちゃん付けするの初めてきいた」

克弥がのんきな事を言っている。

「燈架の事をちゃん付けで呼ぶって事は……もうダメだな」

「ああ。もう誰にも止められない」

ひそひそ囁き合っている連夜と竜也。優也がそんな二人に必死に訴える。

「そんな事言っていないで止めましょうよ」

『無理』

声を揃えてその訴えを一蹴する。優也はがくりと頂垂れる。がくりと頂垂れてる優也に美麗はお茶を差し出し

「優也。これでも飲んで立ち直りな」

「ありがとぅ。……って美麗なら止められるんじゃない？」

「いやゝ皆元気だねえ」

「・・・・・・・・・・」

そうこうしているうちに優香は騒いでいる男共に近づいていく。そして、男の群れの一人の肩を叩く。男が振り返った瞬間、男は吹っ飛んだ。比喻でも冗談でもなく本当に、約三十メートル前後の距離を。

男が吹っ飛んだ先には、男共に投げキッスしたり、ウィンクしたり、色香を振り撒いたりしている魅希が。

魅希は吹っ飛んできた男を寸前でかわし、悲劇のヒロインのようにワザと転んで

「ヒドイ・・・」

目尻に涙を溜めてしゃっくりをあげる。もちろん演技なのだが、男共の中にはそこまで洞察力に長けている者がいないようだ。

「誰だ！俺らの魅希様を泣かせた奴は」

「出て来い。再起不能にしてやる」

「生きて帰れると思うな！」

優香はそれらの言葉を笑い飛ばし

「お前らごときが私を再起不能にする？笑わせるな。返り討ちにしてみよう」

「調子にのんな！このガキが」

「こいつ火の後継者だぜ。やめといった方が・・・・・・・・」

「こつちに何人いると思ってるんだ！軽く百人はいる。数で仕掛ければケリはつく」

「皆ゝ魅希の為に頑張ってる」

派手な投げキッスをそこら中に振り撒く。

『俺らの魅希様！！』

「勝利の女神だ！」

「魅希様に勝利を！」

叫びながら優香に向かっていく男共。連夜は牛肉になる運命の牛をみるような目で男共を眺め、竜也は

「勝算ゼロだな」

美麗はお茶菓子をはお張りながら、黒い笑みをひらめかせている。燈架と優也は止めるべきかどうか右往左往。凧は

嘲笑っている。零は包帯や傷薬、添え木などを用意している。克弥は「ワクワクするな。どうなるんだろっ」

結果は悲惨だった。

優香が宣告したように、男共は誰一人、五体満足ではいらなかった。必ずどこかを骨折してるか、火傷してるか、切り傷が全身にあるか、青あざがあるか、だ。

「ほらね。だから言ったでしょ？お前らごときじゃ無理だって」

最初に突っ込んできた男の襟元を掴んでつり上げつつ不敵に笑う優香。男は呻きつつ

「嘘だろ……あんなにいたのに全滅なんて」

「安心しな。殺してないから。まあ全治一ヶ月以上だろうけど、全員」

そう言い放ち、男をそこらに投げ捨てる。男はしばらく傷の痛みに呻いたいたが、気絶した。

「無駄な運動だったな。腹も減ったし、帰るか」

終わったようだ判断して近寄ってきた連夜に声をかける。

「容赦ないね」

「完膚なきまで叩きのめすのが、私のモットーだから。だいたいあつちから喧嘩売ってきたんだから、手加減無用でしょ」

「喧嘩売ってきた？」

胡乱げに返すと優香は当然の事のように腰に手を当て

「私の目の前で騒いだ」喧嘩売った」

「お前の頭の中はどうなってるんだ」

竜也が惨状を見やりながら言う。

「まあまあ。とにかく終わったんだから、帰ろっか」

零がそう言つと全員は寮へ帰った。

翌日。日の光と、外の騒がしさで目が覚めた。

「・・・・・・・・う・・・・・・・・うるせえ・・・・・・・・」

寝ぼけつつ目を開けると、紅蓮がカーテンを開けていた。紅輝が優香の顔を覗き込んで

『起こしたか』

「外が騒がしいみたいだけど・・・・・・・・なんかあった？」

『俺らもわからない。だが、外で何かあったことは確かだ』

体を起こし、伸びをしてカーテンを完全に開ける。

「・・・・・・・・う・・・・・・・・ん」

「へっ？」

自分の横から声が聞こえる。視線を下げると連夜と一緒に寝ていた。その横には当然のように夕軌と朱音が寝ていた。そのまま固まっていると、優香の視線を辿った紅蓮はああと呟き

『昨日一緒に寝ていい？』つて連夜が言ったら優香がいいよって言ったんじゃん』

そう言われて慌てて記憶を辿る。そういえば言ったような気がしないでもない。とにかく

「起きろ連夜。いつまでも寝てるな」

強く揺すると、連夜は薄く目を開けて

「・・・・・・・・優香。おはよう」

「おはよう、じゃねえよ。起きやがれ」

『朝から元気な事だね』

『おはよー優香、連夜、紅輝、朱音、紅蓮兄さん』

「おはよ。朱音、夕軌」

「はよっす」

お互い挨拶していると、外が更に騒がしくなってきた。顔を見合わせて急いで服を着替えて外に出ると

「なんだよ・・・・・・・・これ」

隣では連夜も絶句している。紅輝達も目の前の光景が信じられないのか、何度も目を擦っている。

二匹と二頭と二人の前には、昨日を入れて一週間かけて作っていた祭りのセットがすべて壊されていた。薪の山に見えても、元が神輿や矢倉や屋台には見えないだろう。

優香はギリツと唇を噛み締め、拳を固く握り締めた。

「誰が……こんな事を……」

唸るように声を絞り出す。

「彩夜です」

後ろから答えが返ってきた。ずいぶんと悔しそうな声音だ。振り向くと守弥が立っていた。

「すみません。僕が間諜とばれてしまいました。それでキレた彩夜が……」

「彩夜か……」

口の中に血の味が広がる。怒りで視界が真っ赤に染まった気がする。

《わたし、しょうらい優香のしゅごしやになりたいな。いまは光と闇っていつかべがあるけど、いつかならず》

《うん。約束だよ彩夜》

《もちろん》

幼い頃指切りをした言葉が夢い泡のように浮かび上がって消えていく。なんで、という言葉が言葉にならず消えていく。

「優香」

気遣うような声が耳朶を打った。のろのろと顔をあげると、連夜が一瞬痛みを堪えるような顔をして優しく頭を撫で

抱きしめた。

「我慢するな。お前は昔から何でも抱え込みすぎだ」

「優香様。申し訳ありません。僕がばれないようしっかりしていれば……」

自分を責めるような口調になった守弥。自分の些細なミスのせいでこんなことになったのだ。悔やんでも悔やみきれない。

「守弥のせいじゃない」

意外としっかりした声で言う。顔を上げ

「彩夜を漬す」

第二十話 優香VS彩夜

光があれば闇がある

闇があれば光がある

光と闇が合わさるとき この世の繁栄なり

光と闇が分かれるとき この世の終焉なり

選ばれし後継者達よ 己の信ずる道を行け

選ばれし守護者達よ 守るべき者と共に歩め

繁栄は光にある 終焉は闇にある

《それなんてうた？》

まだ幼い、一番初めに聞いた声だ

《うたじゃないよ。詩だよ》

《詩？》

《そうだよ。えつとね。とうさんがいった。ずっとむかしからかたりつがれている詩なんだって》

《ふーん。わたしにもおしえてよ》

疑わしそうな目で睨み

《てかあんだだれ》

《わたし？わたしは彩夜っていうの。よろしくね》

ギリツと唇を噛み締めて過去の記憶を振り払う。今はこんな事を思い出している場合じゃないのだ。

すぐに大勢の人を集めて命令を発す。

「まずは壊された祭りのセットを直す。後継者と守護者は彩夜の探索。見つけたら攻撃はせず、場所を私に報告」

『了解しました』

四方八方に散っていく。連夜が場違いながら感心したように

「こういう時に優香の言動がリーダーっぽくなるな」

「そんな事言ってる場合か」

優香達のあとからやって来た竜也が頭を小突く。連夜は眉間にしわを寄せて竜也の腹に拳を叩き込む。

竜也はギリギリで避けて、代わりにボーっと立っていた克弥の腹に直撃。

「ぐえ!?!」

カエルが潰れたような声を出す。連夜が目をパチパチさせて、自分の手を見下ろして

「悪い克弥。間違えた」

「許せるか!」

憤然と眉を跳ね上げる克弥。尻が必死に笑いを堪えている。燈架が気の毒そうに目を細め、零が克弥の肩に手を置く。若干引き攣った顔で

「落ち着きなつて。俺らは彩夜を探すよ」

「こいつを一発殴ってからだ」

視線に殺傷能力がないことを物凄く後悔している克弥。視線に殺傷能力があつたら、おそらく連夜は致命傷を受けている。

「うるさい」

ボソツと呟いた瞬間、雲ひとつない晴天の空から稲妻が落ちてきた。ありえないほど正確に克弥のそこへ。

「ぎゃー!!!」

プスプス煙を上げつつ倒れる半死半生の男一名。優也があわあわしながら恐る恐る克弥を突く。

「克弥君・・・生きてるかい」

「なにしてんの？優也。てかそれなに」

一部始終を見ていなかった優香が、優也が突いているものを興味津々に覗き込む。優也が微苦笑を浮かべつつ

「一応克弥君なんだけど・・・」

「はっ？この真つ黒焦げの屍があのか弥！？」冗談でしょ」

目をむいて食い入るように真つ黒焦げのか弥らしい物体を見る。確かに克弥に見えないこともないが

「誰がやったか大方予測がつくけど、自業自得？」

「まあ、ある意味自業自得な気もしないでもないような・・・」
燈架が困ったように頭を掻いてる。

「ふーん。まあ軽く応急手当しといてやるか」

荒っぽいかつ大雑把に包帯を巻いて

「よし。じゃあ皆彩夜を探しに行くよ」

『おう』

『うん』

「彩夜、見つけたら顔が原型留めなくなるまでぶん殴ってやる」

物騒な唸り声を上げつつ神経を研ぎ澄ます優香。彩夜はおそらくここ（光）に留まっている。彩夜が祭りのセットを壊す意味は定かではないが、あいつの目的は光をのつとる事。なら光が浮き足立ってる今、事を起こすには絶好のチャンスだろう。

「あいつの考え・・・わかんねえや」

昔は彩夜の思考はだいたい読めた。だが今はまったくと言っていいほど理解出来ない。まあわかりたくはないけど。

「どうしてこんな事になっちゃったんだろう・・・」

叶わないだろうが幼少期に戻りたい。あの頃が一番幸せだった。なにも考えなくてよかったから。重い責任や立場、身分を考えずにすんだから。なら今不幸なのかと問われると、そうでもない。大切な友もいるし、口うるさいが父もいる。自分を慕ってくれる人々もいる。むしろ、昔より幸せだと思う。だが

「後継者とか、守護者とかじゃなかったら・・・それと、この時代にあれがこなきゃ」

そう。後継者という見えない壁が目の前に立ちはだかる。この壁さえなかったら、彩夜もここまで。だからこそ自分が

「私が彩夜を止める。それしかないんだ」

少し悲しみが混じった声で自分自身に誓うように呟いた。

「出来るもんならやってみなよ」

「!!!」

頭上から降ってきた声につられて顔を上げようとした時、鼻孔に甘い香りが入り込む。思わず息を呑み口を塞ぐが

（ヤベッ少し吸っちゃった）

自覚した途端頭の芯がぐらりと揺れた。舌打ちしたい気持ちを抑え、風で吹き飛ばす。清浄な空気が戻ってきた。

「やるね。でも、これは少し吸っただけでもアウトだよ」

「催眠系の・・・魔法・・・っ・・・か」

消えそうな意識を必死にたぐり寄せながら言う。彩夜は軽く目を見開いて

「まだ喋れるんだ。さすが火の後継者にして歴代最年少の最高指揮官だね」

彩夜の声が遠くから聞こえる。沈みそうな意識の中でボンヤリとそんな事を考えてる優香。体から力が抜け、片膝をつく。

（これは本格的にまずいな）

力がうまく入らない手で、腰に差してある短刀をひき抜く。そのままの勢いで左肩に突き立てる。

「そうこなくっちゃ」

クスツと小さく笑みを零す彩夜。優香はうめき声をもらさないように唇を引き結ぶ。痛みで催眠魔法の効果が無効にしたのだ。

彩夜は優香の一手手前に着地して、肩からぱたぱた滴り地面に溜まってく血を無感動な表情で見下ろす。

「余裕の・・・つもりか・・・!」

短刀を横にふる。彩夜はとんぼ返りをして避ける。肩で息をしながら立ち上がり、上に羽織った服を脱ぐ。そしてその服を破り、きつく肩の傷口を縛る。

「もう動けるんだ」

ふふつと人のカんに触る笑い声を上げる彩夜。優香は無言で刀を抜き、構える。

「やる気？あんた程度の実力でホントに私に勝てると思ってんの」

「やってみなきゃわかんないでしょ！」

語尾を放った瞬間、走り出し彩夜に斬りかかる。彩夜も刀を抜き、優香の刀を受けた。一合、二合、魔剣同士がぶつかり合い最大な火花が散る。

「左腕を庇いながらどこまでやれるのかな」

すすつと死角に移動し、あっと思っただけには視界の隅に閃光が走る。

「くっ・・・」

体勢を崩しながらもなんとか避ける。頬に血が伝う。避けきれず薄皮一枚斬られたようだ。

「惜しい。あともう少し下だったら頸動脈だったのに」

刀を左右に振り回しながらさざりと言う彩夜。優香は頬の血を手の甲で拭い、刀を肩に担ぐ。

「腕が鈍ったんじゃないの。鍛錬しないからそうなるんだよ」

嘲るように笑うと彩夜は冷たい笑みを顔面に張り付け

「そう言うあんたは動きが鈍いみたいだね。太ったんじゃないの」

ブチッと何かが切れた音が聞こえた気がする。優香は真紅に染まった瞳で彩夜を睨みつけ

「軽口叩いてる暇があったらかかってこい」

「言われなくても」

バチバチバチ

魔剣同士が何度もぶつかり合い、桜色と黒の閃光が走る。頬に、腕に、足に、次々に浅く血が滲む。

ぜいぜいっと喘ぎつつ二人はいったん離れ、相手の出方を伺うように睨みあう。技量はほぼ互角。迂闊に隙を見せれば殺られる。

（左腕を使えない分こっちのが不利。さて、どうする）

左腕を一瞥し、苦渋の色を浮かべる。この傷さえなければ……。今さらだが悔やまれずにはいれない。

「このままやれば、あんたは負ける。それとも、内なる力でも解放する？」

ああ、その通りだ。だが、内なる力を解放する気はまったくない。この力を解放しなくても勝つ。

「それはお前が決めることじゃない。私は今のところ死ぬ気はないんでね」

力強く言い切る。刀を鞘に納め、ゆっくり息を吸い、魔力を高めていく。

「魔法勝負か」

低く呟く彩夜。その彩夜を取り巻くように黒い風が集まってくる。

逆に優香の方には白い風が流れ込んでくる。対極の色が優香と彩夜の真ん中でぶつかり合う。優香は胸元を押さえて苦しそうに息を継ぐ。最初の睡眠魔法を吹き飛ばす為に使った魔力、そして血が流れると共に削られていく体力、最後に彩夜との斬りあい。この十四歳の子供、優香が持ちえる体力、魔力共に限界が近づいているのだ。

「魔力が足りないみたいだね」

勝ち誇ったように高らかに言い放つ彩夜。浅く速い呼吸を繰り返しながらも、まだ力を失っていない真紅の瞳で彩夜を睨む。彩夜ははっと鼻で笑い

「魔力、体力共に尽きた無力なお前になにが出来る」

「確かに、私の体力も魔力両方とも限界だ。でも……」

いったん言葉を区切って己の手のひらに視線を落とす。微かに痙攣しているその手を握りこみ、再び顔を上げる。にっと不敵な笑みを浮かべはつきり宣言する。

「お前だけには負ける気はない」

「しょせん強がりか」

「そうかもね。だけど、私の大事な国の祭りを台無しにした罪は償ってもらう」

そう言うや否や彩夜に向かって走り出した。

「相打ち狙いか。いかにもあんたが考えそうな手だな」

「言っただけだ！私は死ぬ気はないと！」

今んとこねつと口の中で呟き、動かない左肩の傷口を思いつきり掴んだ。

「なっ！！」

さすがに予想だにしていなかった優香の行動に彩夜の動きが一瞬鈍る。その隙を逃さず、痛みで無理矢理感覚を取り戻した左手で刀の柄を掴む。彩夜の間合いに入り、右斜め上から左斜め下に向かって刀を振り下ろす。わずかに遅れて紅い剣筋にそって血があふれ出す。ただし、傷が浅かったため彩夜はすぐに間合いを開ける。

「なんで……」

唸るような声を出す。

「なんで剣筋を変えた！優香」

「かんねえよ……」

風に溶けてしまうくらい小さく呟く。当然聞こえなかった彩夜は

「もっと大きな声で言えよ！」

「私にもわかんねえよ！体が勝手に動いちゃったんだから」

そう。気づいたら右腕が動いていたのだ。左腕を掴み、剣筋を変えていた。何でという思いもあるが、これでよかったんだという思いも自分の中にある。

彩夜が再度何かを言おうとした時

「彩夜様！」

新手が彩夜の前に降り立った。雷音だ。雷音は満身創痕の優香を見て、眉を顰める。

「彩夜様。ここは退きましよう。時間ならあります。愛美様が抜けどを用意して下さってます」

「わかった」

優香をちらつと見て、身を翻す。風が彩夜達の体を取り巻く。刹那、二人の姿が掻き消えた。

一気に気持ちいが緩み地面に座り込んだ。肺が空になるほど息を吐き出し、左肩を押さえる。まぶたが鉛のように重い。意識が闇に引きずり込まれる。最後に見た光景は急いで駆け寄ってくる見覚えのある男の姿だった。

第二十一話 現実と心

目を覚ますと真っ白なカーテンと同色の壁が飛び込んできた。一瞬身構えたが、すぐに緊張を解く。ここは光城の病室だ。

「誰が私をここまで運んできたんだろう」

最後に見た光景を探る。確か、見覚えのある誰かが駆け寄ってきてたような……。

そんな事を考えつつ体を起こす。すると左肩に痛みが奔る。

「……っ……」

痛みに顔を歪ませて左肩を押さえる。忘れてた痛みが蘇る。どんなに優秀な魔導師だろうと一瞬で完治することはない。かすり傷程度ならすぐに治るが。

「……うん……」

自分しかいないと思ってた部屋に第三者の声が響く。慌てて声のしたほうを見ると、凧が寝ていた。優香が寝てるベッドにうつぶせになって今にも椅子からずり落ちそうだ。見ていて危なっかしい。反対側には美零が凧と同じような格好で寝ていた。

「凧に美麗ちゃん。なんでこんなところで寝てんだよ」

「優香を心配してるからに決まってるでしょ」

「無駄だよ。優香は自分のこと心配する奴なんかいなくて思ってるんだから」

「紅蓮。紅輝まで」

「そいつらだけじゃないぞ」

ガラッという音と共に数人が病室に入ってきた。

「お前らまでくんなよ」

少し呆れ混じりに言っていると、連夜が優香の頭をぐしゃぐしゃかき回しながら

「少しは感謝しろ。傷だらけのお前を俺らが連れ帰ったんだからな」
「帰った俺らが背負ってる優香を見た途端、女性陣がいつせいに上

げた悲鳴がまだ耳に残ってるよ」

克弥が苦笑いを浮かべてそう言っていると竜也が頷き

「滅多に動揺しない風の動揺する姿が見ものだったな」

「そうですね」

「そつそんな事言っちゃダメだよ。竜也君、守弥君」

優也が風と美麗に薄い布団をかけつつそう言っていると、竜也がニヤツと笑い

「そついうお前だってみ」竜君病室ではお静かに」

わざとらしく人差し指を立ててみせる克弥。燈架がうんざりしたように男子を見遣り

「ここは動物園じゃないんだ。いい加減静かにしてくれないかな。それとも動物園に送ろうか？猿共」

「猿！？」

男性陣がお互いの顔を見合う。その表情は若干嫌そうだ。

「優也と零さんと守弥以外の男子だけどね」

「俺がこいつらと同レベル！？」

優也と零と守弥以外の男子がいつせいに叫ぶ。そしてお互いの顔を見合つて更に嫌そうに顔を顰める。そのあまりの騒がしさに風と美麗が眠そうに目を擦りながら起きてしまった。

「何の騒ぎ」

半分以上寝ぼけている顔で風が問うと、零が微苦笑を浮かべ

「猿の遠吠えだよ」

「零さんまで猿って言うな」

またまた三人そろって叫び。お互いをにらみ合い

「俺の真似すんな！」

優香はくすりと笑みを零した。三人が同時に優香を睨み
「笑うな」

「ごめんごめん。あんまりハモるから・・・つい」

お互いを睨みあいながら黙り込む三人。優香はまだ笑いながら
「悪かったって。祭りの修繕状況は？」

守弥が真面目な顔で報告する。

「順調に進んでいます。現在は使えなくなったものを処理する係と、使えるものをつなぎあわせる係の二手にわかれています」

「そうか。順調ならなにより」

安堵したようにため息をつく優香。連夜が腕を組み

「問題は祭りに間に合うかどうかだな」

「そうなんだよね」

全員が難しい顔つきで黙り込む。このままじゃ祭りには到底間に合わない。まあ手がないわけではないが、それは出来ればやりたくない。

「魅希は？」

「外で男共をオトしてる」

「まさかと思うが、あの手を使う気じゃないだろうな」

優香はちよつと以上に引き攣った顔で竜也を見上げて

「そのまさかだよ」

凧が窓を開けて

「しょうがないじゃん。その手しかないんだから」

「僕も凧様に同感です」

「仕方ないな。呼ぶか」

皆が嫌そうに顔を顰めながらも同意したのを確認しながら紅輝に目配せする。

『行かなきゃダメか』

「頼むよ」

『行かなきゃダメなのか』

「頼むよ」

『ホントに行かなきゃダメなのか』

「頼むよ」

『絶対行かなきゃダメなのか』

「頼むよ」

物凄く重い腰を上げ蛇行しながら音もなく窓から外に飛び出してい

く。皆は同情の眼差しを向けながら紅輝を見送った。

「彩夜様。気分はいかがですか」

「最悪」

小さな子供のように頬を膨らましている彩夜。雷音は彩夜の傷の手当を終えて立ち上がり

「まだ根に持っているのですか？戦いに割って入ったこと」

「当たり前。あそこでお前が割り込まなかったら優香をしとめられたのに」

「今の彩夜様では火の後継者は殺せません。よくて相打ちですね」

彩夜は殺気立った目で雷音を睨みつける。雷音は涼しい顔でその視線を流す。

「完全でない今の力では、ね」

「いつになつたら力が戻るのさ」

「あなたが成人になる年ですよ」

彩夜だあからさまに顔を顰め

「あと二年も待たなきゃいけないの。私は早く光をのっとりたいの。それには・・・それはわかっています。ですがまだ時が満ちていないのです。今しばらくのご辛抱を」

「わかつてる。今まで我慢してきたんだから、あと二年くらいどうってことない」

「あなたも火の後継者も気が短いので心配ですね」

「子供じゃないんだから心配無用。だいたいあっちがいつも喧嘩吹っかけてくるんだもん」

「その喧嘩を買ってしまうあなたにも非があると思いますが」

自覚があるのか黙り込む。雷音がさらにたたみ掛けようとしたとき、高らかな哄笑が響いた。そのままゆっくり近づいてきたのは闇の風の後継者の風牙だ。

「なに用だ」

警戒心をむき出しにしながら彩夜の前に立つ雷音。風牙は気にした

ふうもなく

「あんたらなんでそこまで火の後継者を警戒してんだ」

「あいつの封印されてる力を警戒しているだけだ。あの力を扱えるようになる前に奪う・・・」

「へえ、そんなにすごいんだ。火の後継者の内なる力」

「優香が気になるのか。風牙」

彩夜が口を挟んだ。風牙は二つと笑い

「俺は強い奴と戦いたい」

「優香の守護者も水、雷、の守護者も強いよ。裏切った守弥もね」

「腕が鳴るぜ」

瞳がキラキラ光っている。戦いが楽しみで仕方ないようだ。

「血の気の多い奴だ」

柱から声が発せられた。ぎょつとして振り返ると、氷が立っていた。相変わらず何を考えているのかまったくわからない顔だ。

「どうでもいいが、俺を面倒事に巻き込むなよ。それから彩夜」

「氷が声をかけてくれるとはね。明日は天気が荒れるかも」

「抜かせ」

雷音が氷に掴みかかりそんな顔をしているのを横目で一瞥し、鼻で笑う。

「お前はいい加減、相手の弱点を突く幼稚な戦い方をやめたほうがいい」

「幼稚だとッ」

怒りで瞳の色が変わりかけている彩夜。氷は一ミリたりとも動じず「火の後継者にあつてお前にないのは自分を鍛えることだ。そんなんじゃ足元をすくわれるぞ」

彩夜への忠義の欠片もみえない態度だ。風牙はパンパンと拍手して「言っじゃん。暗い奴って思ってたけど、そうでもなかったな」

「お前にどう思われていようが興味ない」

未練なく踵を返す氷。雷音は拳を柱に叩きつけて

「なんだあの態度は。失礼にもほどがある」

「落ち着きな雷音」

「じゃあ俺も好きにさせてもらっよ」

風牙がそう言い、瞬時に掻き消える。

「相変わらず、扱いにくい奴らだ」

雷音が心底から忌々しそうに吐き捨てる。彩夜は感情が抜け落ちた顔で

「春花しゅんかを呼べ」

「御意」

優雅に一礼してから一瞬で消える。彩夜は何もない虚空を見て口角をつり上げ

「優香。あんたの力、私がもらっ。そして、光の時代に永遠の終止符を」

「魅希にお願いってな〜に？」

思わず殴りそうになって、拳を布団の下で握り締める。努めて深呼吸をしながら

「魅希の取り巻き共に祭りにセットを直させてくれないかな」

「そのぐらいお安い御用だよ」

ウインクしながらホントに余裕そうに言う。ここにいる男性陣には効かないが、他の男子なら効果抜群だろう。そして軽快な笑い声をあげながら病室から出て行く。早速男共に頼むのだろう。

「これで祭りの件はひと段落したね」

じゃあ俺は緋寒に報告してくるから、と言って病室を出て行く。これようやく悩みの種がなくなった。ほっと一息ついていると、視線で穴が開きそうなほどじっと見つめてくる目に気づき

「どうしたの？ 風」

問いかけるが、反応なし。唇の端を引き攣らせながらも一度問う。今度は少し大きな声で

「私の体に変なところもあるのか」

またも無視。優香は風に頭を掴み

「人の話を無視するとはいい度胸だな。このや「怪我は大丈夫？痛いところない？左肩は動く？誰にやられたの？」

真剣な目で矢継ぎ早に質問を浴びせる凧。突然のことですまい反応が出来ず、目を白黒させている優香。

その様子を見て、連夜と克弥がにやにや笑い合い、竜也と優也は予想通りの反応だなつと言い合い、燈架は美麗と仲良くお茶タイムをエンジョイしている。守弥は微笑ましいものでも見ているような顔をしている。

「質問に答えてやれよ。優香」

克弥がまだにやにや笑いながら優香の頭を小突く。無言で克弥の脇腹に拳を叩き込んでから

「もう一回言ってくれないかな？速くて聞き取れなかった」

凧は優香の体を上から下まで一通り眺めてから

「怪我は大丈夫？」

「うん。心配かけたね」

「痛いところない？」

ない、と言いかけて凧の真剣そのものの瞳を見て

「左肩がちよつとね。あとは全然痛くない」

「左肩は動く？」

ために少し動かしてみると、鋭い痛みが奔った。優香とずっと一緒にいた者でなければ気づかないほど微かに顔を顰める。

「無理っぽいな」

優香の表情の変化を見逃さなかった連夜がぼそりと呟く。

「誰にやられたの？」

「彩夜」

全員の顔に緊張が走った。

「彩夜が！？」

「マジかよ」

「もう力が甦ったのか・・・」

「いや。それはないと思う」

優香が静かに呟く。守弥は

「と言いますと」

「うまく説明できないんだけど……あいつの力が完全なら、多分催眠系の魔法を使って私の動きを鈍らせる必要はなかったと思うんだ」

初めて聞いた内容を皆は聞き流さなかった。

「催眠系の魔法！？聞いてないぞ」

「なんで話さなかった！」

話さなかったからに決まってる。克弥と連夜に詰め寄られ、優香は内心でため息をついた。こういう風に騒ぎになるから話したくなかったのだ。自分の馬鹿さを心底から呪ったが、言ってしまったことは取り消せない。仕方なく説明する。

「最初甘い香りを吸い込んだんだ。それが催眠系の魔法を含んでたみたいで」

それから隠してもしょうがないだろうと観念し、戦いを詳しく話し始めた。皆は黙って聞いていたが、話し終わった途端全員の視線が心なしか冷たい気が……。

「お前の甘さには呆れるよ」

連夜が偉そうに腰に手を当てて言う。克弥も何も言わないが、言いたい事は同じらしい。優也だけが助け舟を出す。

「でも、それでよかったんじゃないかな？無駄な殺生を避けられたんだし……」

「あのな。そんな甘い事言ったらやられるのはこっちなんだぞ。」

あいつは殺す気で優香を襲ったんだ」

竜也は厳しい声ではつきり言い切る。優香は俯いて瞳を閉じる。竜也は更に言い募る。

「優香は敵に対して甘すぎなんだよ。教わっただろ。敵を一人斬るのを迷いしとき、味方が一人倒れるとき。て」

きつく唇を噛み締める。そんなこと言われなくてもわかってる。だけど

「人を……人を一人殺すたび、その人の人生を終わらせてしまう。それが……。怖い。それに、殺した人の帰りを待つてる人がいると思うと……。大事にしてる人がいると思うと……。」

搾り出すように震えた声を出す。連夜がそつと頭を撫でる。克弥も難しい顔で床に穴が開くほど熱心に見つめる。皿は微かに震えながら自分の体を自分の腕で抱く。燈架は風に溶けるほど小さく

「優香は優しすぎんだよ」

「それが優香ちゃんだから」

美麗が悲しみが混じった声で言う。守弥は形容し難い顔で黙り込んでいる。

この壁は自分で乗り越えなければいけない。いくら精神力が強くて、生来からもっている性情までは変えられない。一時的に心を押し殺すか、麻痺するのを待つしかない。竜也は低い声で

「厳しいことを言っているようだが、これがこの世界の現実だ。綺麗事ばかり言ってたらやられる」

しん、と静まり返った室内には竜也の言葉が響き、悲しい現状を突きつけていた。

第二十二話 過去の痛みと今やるべきこと1

竜也の言葉が胸に突き刺さってる。その傷口から血が流れ出し優香の心を飲み込んでいく。

またあとでつと竜也達は病室を後にしたが、優香はずっと俯いたまま。

敵を殺さなければ自分がやられる。それはわかってる。戦いとはそういうものなんだと理解している。だが、理解するのと実行するのは天地の差がある。理解してても、感情が、心が追いつかない。簡単に慣れることなどできるわけない。それに慣れるのが……怖い。

手のひらに爪を食い込ませる。体が震えだしそうになるのをそうやって堪えているのだ。

「私は……」

続きは声にならず掻き消えていく。どうすればいいかなんて決まってる。だが声に出せない。

「私……は……」

だんだん呼吸が荒くなってきた。胸を押さえて顔を歪ませる。視界が霞み、意識が遠ざかっていく。

「女子供は隠し通路を通って安全な場所へ避難しろ！」

「早く逃げる！」

怒声と悲鳴が入り混じり、全員恐怖に歪んだ顔で逃げ惑っている。近くで爆発音が響いた。更に悲鳴が大きくなる。

「皆さん、急いで下さい！」

「子供がまだ来てないんです！」

「お子さんのことなら任せてください。必ず助けます！今は避難を優先して下さい」

まだ幼い声が誘導する。視線を左右にさ迷わせ、安全かどうか確認

しているようだ。

「敵が近くまで攻めてきてます。なるべく速やかに移動して下さい！」

「連夜！そっちはどうだ」

連夜と呼ばれた少年は端整な顔に焦りを滲ませながら怒鳴り返す。

「問題ない！優香の方は」

「こっちも問題ない！竜也の方は敵が姿を現したみたい。あっちは危険だ」

「優也の方は！」

連夜が問うと、優香が待ったという風に手を上げる。よく見ると董青が優香の肩に乗って状況報告をしていた。

「優也の方はまだ安全っぽい！」

優香は爆発音に負けぬよう大声を出す。そこに紅輝が飛んできて

『ここら一帯に逃げ遅れた奴はいなかった』

「よし。ありがとう、紅輝」

一般人が全員隠し通路に逃げ込んだのを確認して

「連夜！封印式やるよ」

「タイミング間違えるなよ！」

「そっちこそ」

二人は隠し通路の入り口に己の血で封印式を書き込み、同時に叫ぶ。
『封！』

隠し通路は元通り平坦な道に様変わり。ほっと一息つき

「さて、じゃあ皆と合流するか」

「合流場所で落ち合おう」

拳をぶつけ合い連夜は右へ、優香は左へ走り出す。合流場所に向かう途中も周りに生存者がいないかどうか探すように見回す。

「ヒドいな……」

周りは瓦礫の山だ。元は一軒家が立ち並ぶ綺麗な町だったんだが、今は跡形もない。今さらながら敵のやり方に怒りを覚える。イライラして瓦礫を蹴ると、ひっと息を呑む声が聞こえた。

「誰かいるんですか!？」

注意深く周りを見る、が、人が居そうな様子はない。早くも気のせいかと思い始めたとき、ゴトッと何かが動く音が聞こえた。

「えっと。私は火の後継者であって敵じゃないので、出てきても大丈夫ですよ!」

そう呼びかけると、優香の右斜めにある大きな瓦礫の下から小さな子供が出てきた。一人は女の子、もう一人は強気そうな男の子。どちらも四歳、七歳に届くかどうか。

「君達、逃げ遅れたの?」

膝を折って視線を合わせながら聞くと、こくんと頷いた。女の子は今にも泣きそうだ。

「お父さんとお母さんは?」

「父さんは知らない。母さんは……外に出たつきり戻ってこない」

おそらく、父親は兵として戦っているのだろう。母親は無事隠し通路から逃げたか、巻き込まれて……のどちらかだろう。

「じゃあ私と一緒に逃げようか。ここは危ないから」

警戒しながらもこくんと頷く男の子。優香は出来るだけ怖がらせないように笑みを絶やさず

「行こうか」

女の子を抱えて、男の子と一緒に走り出す。その間も爆発音は耐え間なく響く。間が悪いことにだんだん近づいてきている気が……。舌打ちしたい気分には駆られながら、紅蓮を呼ぶ。連夜がいれば隠し通路への扉を開けるが、一人では無理なのだ。あの扉は同じ属性の後継者と守護者の血が必要だから。

風のようにかけてきた紅蓮は、優香の腕の中にいる女の子と、こちらを怯えたように見つめる男の子を交互に見て

『どうしたの? その子供はなに?』

「生存者だ。あんまり怖がらせるな」

男の子の頭をなだめるようにポンポン叩いて

「連夜にこつちに来てくれって伝言頼めるか？敵がこつちに近づいてるみたいで・・・」

『わかった』

返事と同時に走り出す。あっという間に見えなくなった紅蓮を見送り、合流場所に急ぐ。

突然ゾクツと背筋が冷たくなり、後ろから何かが飛んでくる音が聞こえる。

「ヤバッ」

男の子を抱え込み近くの瓦礫と瓦礫の間に出来た穴へ女の子と一緒に放り込み、自分には魔法のシールドを張る。その直後、何かがシールドにぶち当たり派手な爆発音が響く。

「魔法攻撃か」

振り返ると、敵が三名。しかも全員そこそ悪そうな顔をしている。

「ガキが一人か。こんなんじゃ一秒で終わっちまうな」

ガキっという単語に優香の肩がピクリと反応する。男共は気づいた様子もなく

「誰がやる？俺はパス。こんなガキ相手にしたってつまねえし」
びくびくつと優香の肩が動く。男共は自分達が地雷を踏んでいることに気づかず

「じゃあ俺がやる。こんな弱そうなガキでも刀の錆落しにはなるだろう」

ブチッと何かが切れる音が聞こえた。もう誰にも止められない。優香はやけに親しげな笑みを顔面に張り付け

「ねえ、おじさん達。あっち（天国）に逝ってくださいません・・・か？」

語尾を言い終える前に一瞬で男共の間合いに出現し、最初にガキっと言った奴の顎に膝蹴りを決める。続いて流れるように次にがきっと言った奴の腹に拳を叩き込む。そして最後にガキと言った奴の男の一番大事部分に一発。声もなく倒れこんだ男共を見下ろし

「言葉の使い方に気をつけろ、おっさん共。こう見えても私はもう

すぐ九歳になる。ガキじゃない」

憤然と言い捨てる。この場に第三者がいれば、充分ガキじゃなか、とつつこみを入れるだろうが、残念な事につつつこみを入れる無謀な奴はいない。

「さて、先を急ぐか」

誰にともなく呟き、女の子を抱き上げ男の子と走り出す。だが、男の子の体力の限界がきた。

「もっ……走れなっ」

喘ぎながら座り込む。優香は困ったように眉根を寄せ

「うゝん。仕方ない。歩くか」

男の子の頭を優しく撫でて手を差し出す。男の子は戸惑ったように優香を見上げる。

「手つないでこう」

出来るだけ優しい笑顔を作る。男の子は優香の手を握り、ゆっくり歩き出した。

（連夜早く来いよ。どこで道草食ってんだよ）

心の中で悪態をつく。子供の扱いには慣れてないし、なにより沈黙が重い。

（連夜達となら会話が弾むんだけどな。初対面の人だとダメだな）

そんな事を考えつつとろとろ歩いていると、男の子が

「あんた、名前は？」

「へっ？」

突然のことに思わず変な声をあげる優香。男の子は下を見たまま繰り返す。

「あんたの名前は？俺の名前は星哉^{せいや}。妹の名前は恵利^{えり}」

「私は優香。今さらだけどよろしく」

簡単に自己紹介を済ませると、次々に質問をしてくる。ホントに後継者なのか、魔法を使えるのか、さっきの狼は優香のパートナーなのか、なぜ刀を二振り持っているのか等。

連夜が優香達と合流したときも質問は続いていた。連夜はたっぷり

三呼吸をしてから訊ねる。

「なにやってんだ、お前は」

「あはは。連夜遅かったね」

若干やつれ気味の優香が弱弱しく手をあげる。星哉は好奇心に満ちた瞳でなんで、なんでと迫っている。恵利も兄を真似してなんで、なんでと優香に迫る。それらの状況を見て

「人気者は大変だな」

肩に手を置くと、星哉が連夜を見上げ

「あんた誰」

不仕付けな質問に連夜は口の端を引き攣らせ

「ずいぶんと礼儀知らずなガキを拾ったな」

声音にもとげが含まれてる。優香は微苦笑を浮かべ

「まあまあ。とにかくこれで早く進める。連夜は星哉を抱き上げてね」

「そういうことかよ。それより敵はどうしたんだよ」

「優香が瞬殺したよ」

優香より早く星哉が答える。意味をわかって言ってるのだろうか。

それに殺してないし。優香は心の中で反論した。

「俺を呼んだ意味なくね？」

ギロツと睨まれたので、さりげなくそっぽ向く。連夜は何か言いたそうな顔をしながら走り出す。しばらく走っていると、魔法同士のぶつかり合いに巻き込まれた一般人の死体が所々にあった。慌てて抱えている恵利の目を塞ぐ。連夜も同じく星哉の目を塞ぐ。この光景は子供にはきついだろう。優香は顔を歪ませ吐き気を堪える。

（これが戦争というもの。一般人を巻き込むなんて）

このとき初めて人の死というものを見たのだ。連夜も辛そうに顔を顰めている。死体を極力視界に入れないようにしながら走り抜ける。ようやく着いた合流場所にはもう全員そろっていた。皆心なしか表情が暗い。特に凧と美麗と燈架は隅っこにしゃがみこんでいる。顔色が青白い。優也があわあわしながら三人の背中を順番にさすって

る。

「遅かったな。道に迷ったのか」

竜也が明るく問う。努めて明るく振舞おうとしているのが丸わかりだ。

「生存者を見つけたんでね」

恵利と星哉をおろす。凧は目尻に涙を溜めながら抱きついてきた。体が小刻みに震えている。優香は目を閉じた。

（やっぱり、凧達も……）

九歳の子供が体験するにはまだ過激すぎた。だがいずれ通らなければならぬ道だ。それが少し速かったただけの話で。頬を熱いものが伝っていく。手の甲で拭ってみると、水だった。

（涙か……なに泣いてんだか）

自嘲気味な笑みを浮かべる。竜也が頷いて

「全員そろったようだから俺らも避難しますか」

軽い口調で言うのと、皆立ち上がる。星哉は連夜が、優香は恵利を抱き上げる。そのまま無言で走っていくと、前方に数名の人影を見つけた。明らかに光の人間ではない人影を。その人影はまだこちらに気づいてないが、こんなに光の内部まで攻め込んできたのだ。しかもたった四、五人で。かなりの手練に違いない。

竜也が手を上げ全員音を立てないように燈架、美麗、優香、連夜、優也の四人、竜也、魅希、凧の三人に別れて瓦礫に身を潜める。しばらく息を殺していると水華が足元に来て

『子供を連れて美麗、凧、優也、魅希、燈架が先に行く。残るのは優香、連夜、竜也だ』

「なんで私達だけ逃げなきゃいけないの」

小さく声を荒げる燈架と美麗。優香は柄に手を置き、燈架、優也、美麗の順番に目を合わせて

「この子達を頼む」

短くそれだけ言うと二人を優也と燈架に押し付ける。そして少し離れた場所に身を隠している竜也に合図を送る。竜也は頷き、いまだ

に納得していなさそうな風になにか囁く。風は神妙な顔で竜也の言葉に聞き入り、泣きそうに顔を歪ませる。そして風の頭を軽く叩いて、魅希に一言言ってから指を三本立てる。三・二・一

『行け！』

三人の声が発せられると同時に美麗達は走り出した。優香達は美麗達を追えないよう立ち塞がる。

「ようやく鼠が出てきたな」

冷淡な声音に体が震えだしそうになる。こいつらはとくに気づいていたのだ。思ってたよりかなり厄介だ。それに加え相手の年齢は二十以上。経験の差もある。圧倒的に不利だ。

「お前ら、何者だ！」

「闇の者だが？そんな事もわからないのか」

馬鹿にしたような口調に怒りがこみ上げてきたが、冷静さを失わないうちに深呼吸をする。感情的になつたら負けだ。ただでさえ力の差は歴然としているのだから、考え無しに飛び込んで行ったらそれこそ瞬殺される。

「ガキにしてはたいした度胸だ。褒めてやるよ。だが、お前ら程度の力じゃ俺らには勝てない」

一番背が高く、多分一番年上の男が偉そうに言い切る。その男の右側にいる男は不快な笑い声をあげた。

「こんな奴ら俺だけで充分だよ」

そう言うや否や目では捉えきれない速さで間合いに突入された。

第二十三話 過去の痛みと今やるべきこと2

恐怖で足がすくんで動かない。敵のむき出しの殺気に飲まれてしまったように。刀が振り下ろされる。もう、間に合わない。

覚悟して目をつぶった瞬間、隣から何かを刺す音と共に体が後ろに引つ張られた。

「わっ!？」

勢い余ってしりもちをついてしまった。顔をあげると、男が振り下ろした刀がつい先ほどまで優香が立っていた地面に刺さっていた。視線をずらすと連夜が自分の足に短刀を突き立てていた。痛みで恐怖を消し去ったらしい。更にぎこちなく視線を巡らすと、竜也が震えながらも刀を構えていた。

「連夜・・・足・・・」

「こんぐらいで優香を助けられたなら安いもんさ」

優香は自分を心底から呪いながら、連夜の足にいつも持ち歩いている包帯を巻く。連夜はきつく歯を食い縛りながら敵を見ている。

「優香！連夜は動けそうか？」

「傷自体は深くないから大丈夫だと思う」

「そうか」

優香は深呼吸をし、きつく目を閉じる。

（私のせいで連夜は傷を負った）

ドクンと心臓よりずっと深い場所で“何か”が脈打った。思わず胸に手を置くが、特に変わったところはない。

（なんだろう。心臓の鼓動じゃない。こんなの初めて）

不思議に思ったが、敵が動いたのを視界の隅で捕らえたのでそっちに意識を集中させる。

「今度こそ死ね！」

びくりと体が震えたが敵に集中する。感覚を研ぎ澄まし、敵が間合いに突入した瞬間に

「斬る！」

真紅に染まった目を開き、刀を振り下ろす。肉と骨を断つ感覚が刀越しに伝わる。返り血が服に数滴つく。斬りかかってきた男はゆっくり崩れ落ちた。その顔には驚愕の表情が張り付いていた。

ぽつぽつと雨が降ってきた。瞬く間に大雨になり、優香達を濡らしていく。

「私だって守られてばっかじゃない。大切な人を守るためだったら何でもする」

力強く言い切る。瞳には迷いの類が一切なく、真っ直ぐ敵を見据えている。竜也が目を見開いてふっと笑い

「急所を外してくせに偉そうに……まっ、その言葉もらった」

連夜も薄く笑って頷く。男共は唾を吐き

「なめんじゃねえ！」

と怒鳴り声を上げつつこんできた。優香も走りすれ違いざまに斬る。背後で血飛沫があがり男が力なく倒れる。倒れている男二人はどちらも急所は外されているが、この雨のせいで出血が止まらない。すぐにではないが早めに止血をしたほうがよさそうだ。

残った男がひゅんと口笛を吹く。十歳に満たない子供のくせに、ここまで正確に急所を外しつつも動けないようにするとは。大人顔負けの剣技だ。

「百年に一度生まれるかどうかの才能の持ち主か。未恐ろしいガキだな」

このまま己の技量を磨いていけば、最強の剣士になりうるだろう。

「ちょうどいい。お前を彩夜様への手土産にしよう」

「手土産？私は食っても美味しくないよ」

かなりずれたことを言う優香。しかも真顔で。連夜と竜也は思わず地面に座り込み、男も啞然とした顔で口を大きく開いている。今にも顎が外れそうだ。

「どうしたの？」

優香はきょとんとした顔で三人を見回す。何故揃いも揃ってポカンとしているのだろう。訳がわからない。連夜が口元を隠しながら

「あのな。手土産っていうのは何も食い物じゃなくて……………」

「？」

「連夜。優香に説明する時間が無駄だよ。やめときな」

「どういう意味だよ」

殺気立った視線で睨みつける。竜也はわざとらしく視線を前に戻し「来るぞ」

男は一気に間合いを詰めてきた。優香は気持ち切り替え敵を見つめる。連夜が前に飛び出し男の刀を受ける。竜也が男の右側面に移動し、横殴りの斬撃をくりだす。男は連夜の刀を力任せに弾き、そのままの勢いで竜也の刀を避ける。そして着地した瞬間、竜也の脇腹目掛けて刀を払う。

バチバチバチ

魔剣同士がぶつかり合い大雨にもかかわらず盛大な火花が散る。優香が竜也の脇腹目掛けてきた刀を止めたのだ。

ぐいぐい押してくる馬鹿力に歯を食い縛る。

（なんて力だ……………重い）

優香が立っている地面がぼこつという音と共に陥没した。雨で地面が柔らかくなり、堪えきれず片膝をつく。

「優香！」

連夜の慌てた声が聞こえる。大丈夫と答えたいのだが、一瞬でも気を抜けばやられるのは目に見えている。連夜が優香の刀の下に潜り込み一緒に支えてくれる。竜也が男の腕に刀を振り下ろす。男は後方に飛び、余裕の笑みを浮かべている。三人は肩で息をしながら男を見つめる。

「力強すぎだろ……………」

「剣技もハンパねえ」

「こいつホントに人間か」

三人が同時に別々のことを言う。隙のない構え。圧倒的な馬鹿力。

埋めようのない経験の差。そして、三人合わさってもかすり傷ひとつつけず避ける状況判断力。

「どうした。ガキ共。怖気づいたか」

息ひとつ乱さず余裕そうな顔でこちらを見ている男。優香はギリツと唇を噛み締めた。こいつに勝てる気がしない。

「連携攻撃でいくぞ」

連夜が小声で指示を出す。竜也と優香は頷いて、三人同時に男に斬りかかる。優香は左から、竜也は右から、連夜は真正面から相手に向かっていく。

「スピードはなかなかだな。狙いも悪くない。息も合っている。だな」

男は危険な笑みを浮かべる。優香は反射的に叫んだ。

「戻れ！」

「遅い！」

優香の警告と男の声が重なった。

ドサッ

「竜也！連夜！」

「他人の心配をしている場合か」

その声と共に腹部に激痛が走った。足から力が抜け、地面に倒れこむ。水溜りが赤く染まっていく。

「・・・う・・・く・・・っ」

腹部を押さえると温かいものが手を伝い流れいく。喉に焼け付くような熱い液体がせり上がってきた。堪らず吐き出すと、血だった。臓器のどこかをやられたみたいだ。

目だけを動かして竜也と連夜を探す。竜也は腕から出血しているが比較的傷が浅いらしく片膝についているだけだ。連夜は足から出血していて起き上がるうともがいている。

「まだ立つか。己を知らぬ無力なガキの分際で」

冷淡な声が続ける。その言葉は不思議と雨音にかき消されず三人の

耳に入ってきた。

「死ぬと・・・わかつているのに」

「勝手に決めんな！自分の未来は自分で決める。お前に決められるいわれはない！」

大きな声ではつきり言った連夜。竜也も同感とばかりに頷いて

「俺らは死ね気はないし、決められた運命^{レイル}を走る気もない！俺らの道は俺ら自身で歩んでいく」

優香は腹部の出血を止めようと全魔力を注ぎ込む。声を出したかったが、喉が焼け付くように熱い。更に二、三回吐いた。意識が朦朧としてくる。

（ヤバイ・・・速く出血を止めないと）

必死に傷を治していると、竜也が早足に近づいてきた。そして優香の腹部に手を当て、魔力を注ぎ込む。ようやく血が止まってほっと息をつく。

「優香、大丈夫か？」

「うん。大丈夫」

心配そうに顔を覗き込んでくる竜也に微笑むと、竜也は安堵したように薄く笑う。

「立てるか？」

声と共に差し出された手を握り立ち上がろうとすると、ぐらりと視界が揺れた。血が足りないのだ。だんだん地面が近づいていく。

「おっと。優香、しっかりしろ」

倒れてきた優香を受け止め、頬を軽く叩く。優香は頭を押さえて

「ごめん。血が足りないっばくて」

申し訳なさそうに言くと、竜也はポンポンと頭を撫でる。その仕草が気にするなと言ってくれてるようだ。

連夜が足の治療を終え、しっかりとした足取りで歩いてきた。

「どうしたんだ？」

「血が足りないみたいで。お前増血薬持ってるか？」

「ああ。持ってる」

連夜は左腰につけた救急バックから光のマークが入った赤い丸薬を取り出し、竜也に手渡す。竜也は丸薬を受け取り

「優香、口開けて」

言われるがままに口を開け、そこに竜也が丸薬を放り込む。優香はその丸薬をガリツと噛み砕く。

「ほう。増血薬か」

一部始終を刀を構えもせず眺めていた男は感心したような唸り声を出す。

増血薬とは、一粒食べれば失った血を素早く作り出してくれるのだ。特に連夜が持った光マークの入った増血薬は美麗の特製で、約一時間はどんなに深い傷を負おうとも勝手に血が増えていくのだ。

加えて言うと、増血薬は製造が難しいためほとんどの人がこの丸薬のことを知らないのだ。

「あんなガキ共がそれを持っているとはね」

「さて、行くか」

三人は刀を構え、男に向かって走り出す。男は余裕綽々といった感じで迎え撃つ。雷が鳴り響く中、魔剣同士がぶつかり合い激しいスパーク音が雷鳴に負けないほど大きな音を上げ、火花が雷光に負けないほど輝く。

双方苦しそうに息をし始めたとき、三つのことが起こった。

一つ目は優香がぬかるんだ地面に足をとられ一瞬体勢を崩した事。

二つ目は男が体勢を崩した優香見て、残酷な笑みを浮かべた事。

三つ目は連夜が恐怖の目で優香を見つめ、手を伸ばした事。

それらがすべて十秒にも満たない短い時間で起きた。

優香の目の前で連夜の肢体がゆっくりと崩れ落ちる。竜也が地面にぶつかる寸前に受け止め、急いで止血をする。優香の中でドクンと“何か”がまた脈打つ。視線は倒れている連夜から離れない。ドクンともう一度脈打った瞬間、優香の体から人としてあり得ない“力”が爆発した。優香を起点に凄まじい暴風が巻き起こる

「優香！その力に飲み込まれちゃダメだ！優香ッ！」

竜也が必死に呼びかけるが、優香には届かない。

「この力は……まさか、あの言通り……」

男の驚愕が滲んだ声が暴風にかき消されていく。優香はゆらりと刀を構え消えた。

「なっ」

男が更なる驚愕に目をむく。刹那、優香は一瞬で男の目の前に出現した。まったく見えなかった。優香はそのまま男の心臓に刀をつき立てた。そして素早く引く抜く。男は声もなく崩れ落ちた。

「……優………香っ」

連夜は最後の力を振り絞り、優香の元に這っていく。胸からの出血は止まらない。優香は刀をだらんと下げたまま立ちつくしている。竜也は状況が上手く飲み込めず呆然としている。

連夜はなんとか優香の元にたどり着き、優香の足に手をあて

「封刻！」

短く叫んだ。優香を起点に巻き起こっていた風が止み、優香は周りを見回す。

「連夜！」

足元にいる連夜を抱き起こし、傷の深さを確認して

「竜也！美麗ちゃん呼んできて。早く」

「わ………わかった」

竜也は優香の剣幕にびびりながら、走り出す。連夜は目を閉じたまま動かない。優香はひくりと息を吸い込んだ。目の奥が熱い。その熱いものが頬を伝っていく。

「連夜！」

優香は病室のベッドで目を覚ました。心臓が早鐘を打つ。背中がぐっしり濡れている。体を起こし、今だどくどくうるさい鼓動を鎮めようと深呼吸をする。

「夢………か」

竜也に言われたことが相当堪えたようだ。人を殺すことが嫌になっ

たときの夢を見るなんて。

「はっ、弱いな。私は」

ああいうことを言われると覚悟したはずなのに。自分の覚悟がどれほど脆かったのかを思い知った。

「ダメだな、私」

本人は無自覚だが辛そうに顔を歪ませる。背負うには重すぎる重荷を背負わされている事を優香は肌で感じ取っているのだ。そして、どれほど重かろうが弱音を吐くことは決して許されてないことも。深いため息をつく、外から足音が聞こえてきた。

第二十四話 誓いの言葉

外はお祭りのセツトを修理している音と、慌ただしい足音や人の声などが飛び交っている。時々「俺らの魅希様・・・いや、俺らの女神様の為に！」という関係ない掛け声もある。まあそれは無視して、城内の廊下は不気味なほど静まり返っている。

「どういうつもりだ！竜也」

「なんのことかな」

静かな廊下に響く怒鳴り声。その怒鳴り声になんの感情も読み取れない声が問い返す。怒鳴り声に主は、眦を吊り上げ

「とばけるな！さっきの優香に対する言葉だ」

「連夜。怒る気持ちはわかるけど、病室の中に響くよ。お静かに」
風が怒りを押し殺した声で連夜をいさめる。だが連夜は止まらない。竜也に詰め寄り言い募る。

「あいつがどんな気持ちで戦っているかわかんないのか！あいつは無理矢理最高指揮官に祭り上げられ、好きでもない争いに巻き込まれたんだ！そんなあいつにお前は何て言った！？よりにもよって綺麗事だと？ふざけんじゃ」「連夜、ひとまず落ち着きなって」「優香の病室に響くよ」

克弥が連夜の肩を引く。優也が小さくだがはつきりと言う。連夜は怒りに瞳の色を変えつつも黙った。瞳は竜也を睨みつけたままだ。

「優香がああいう性格なのはわかりきっているでしょ。なのになんで今更そのことで優香を追いつめるの」

燈架が穏やかに問う。こういうときも表情を変えないのは燈架のすごいところだ。竜也は一言一言かみ締めるように話し出す。

「優香の優しさは確かに良い所だ。だが、あいつは優し過ぎる、敵に対して。このままじゃあいつは、自らの優しさゆえに命を落とす可能性が高くなる。俺はそれが嫌なんだ。優しいのは良い事だ。でも時としてその優しさが仇になる時がある事に気づいてほしいんだ。

その為なら俺は……」

竜也は言葉を切り、俯いた。彼としても、苦しい決断だったのだろう。だが大切な友の為に決断する他なかったのだ。優香が自分の性情で死ぬ前に。

「竜也君の気持ちはわかった。でも、私の親友の傷を抉る行為は許せない。優香ちゃんはずっと努力してきたんだ。自分を変えようとそれなのにあんなこと言われた優香ちゃんの心情を理解できる？ 竜也君には竜也君なりの思いがあっただろうけど、少しは優香ちゃんの立場になってみた！？ 優香ちゃんが辛そうにしてるの見てもまだ言える！」

みんな目を見開いて固まっている。美麗が怒った姿を始めて見たのだ。瞳の色も微かに変わっている。優也が必死に美麗をなだめようとしている。

「みんなぐなに話してるの？ 魅希も混ぜて」

この一触即発の雰囲気の中、底抜けに明るい声が飛び込んできた。用事を終えた魅希だ。

竜也は脱力したように床に崩れ落ち、連夜は無言で壁に一発叩き込む。美麗はいつものもののほほんとした空気を取り戻し、優也と橙架と一緒にお茶を飲んでいる。風は形容しがたい表情をしている。克弥と守弥は揃ってぼかんと口を開けている。見栄えがいい容姿なだけにその様子は滑稽だ。

「ねえ。なんの話してたの？」

可愛らしく小首を傾げる魅希。あいにくながらここにいる男子には効かないが。

「優香の話だ」

連夜が怒りを押し殺した声で言う。魅希は表情を改め

「優香のどういう話をしてたの」

「優香の性格を殺すか生かすか」

淡々と答える連夜。声音が静かな分怒りのほどがわかる。優也は半分以上涙目になっている。

「ふん。生かすも殺すも本人しだいじゃない？ 私達がここで議論すべきことじゃない」

珍しい。魅希が正論を言うなんて。明日は霰が降るんじゃないか。ここにいる魅希以外の全員がいつせいに窓から外を見る。

魅希は子供のように頬を膨らませ

「みんなして酷い」とかなんとか言ってるが、聞えないふりをする。

「馬鹿はさて置き、優香は俺らが全員で背負うはずだったものをすべて背負っている。まだ成人にもなっていないのに、大人と同じくらい重い責任を問われている。だからこそあの時、俺らは誓ったんだろ。竜也」

連夜の悔しさが滲んだ声が廊下に響く。自分が背負うべきものを優香に押し付けてしまった事に対してか。それとも優香には知らされてない秘密を彼らは知っている。これを知ったとき彼らはまだ十歳に満たない子供だった。連夜と竜也はさらにもう一つの秘密も知っている。これは優香も知っているが。

とにかく、その時はよくわからなかったが、今なら優香が生まれながら背負ってきた宿命の重さがわかる。

そして、そのときに誓ったのだ。ここにいる全員で。

『俺達（私達は）はこの先にながらうと優香を信じ続ける。優香が迷ったときは道標となり、絶対に優香を一人にしない』と。

その誓いは今も彼らの胸に刻み込まれている。

竜也がゆっくり立ち上がり

「そうだったな。らしくもなく焦ってたみたいだ。俺、優香に謝ってくる」

つき物が取れたように晴れやかな顔をしながら優香の病室に向かう竜也。一同は思わずその背を見送ってから

「私らも行くのか」

という美麗の言葉で竜也のあとを追いかけた。

どたどたどた

「院内では走らないで下さい！」

看護婦さんの注意が飛ぶ。だが廊下を走っている足音はその注意を無視して走っている。のんびりした声が

「すみませんねえ。ああ、お茶が美味しい」

この平和そうな声は美麗だ。間違いない。お茶って言うてる時点で。

「魅希の可愛さに免じてゆる・る・し・て、パチッ」

通りかかった医師に向かってウインクをする魅希。

「ごめんなさい。あの人はちょっと急いでて」

オドオドした声が看護婦さんに説明している。この口調は絶対優也だ。

がらっ

「優香！」

扉が開く音と同時に名前を呼ばれ、反射的に

「はい！？」

返事をしてしまった。竜也は目をパチパチしながら苦笑して

「そんなに緊張しなくても・・・」

「ごっごめん」

視線をさ迷わせながら謝る。どことなく気まずい空気が流れる。竜也は困ったような笑顔を浮かべて頭を掻いてるし、優香は優香でさつき言われた言葉が胸に突き刺さっている。

竜也が意を決したように顔を上げ、頭を下げた。突然のことにぱかんとしていると

「さっきは言い過ぎた。ごめん」

「べっ別に気にしてないよ」

焦ったように返す。半分は本心だ。竜也の言ったことは真実なんだから。すべて自分が

「俺、優香の事わかってるつもりでいた。でも。まだまだだったみ

たいだ」

綺麗な笑顔を見せる竜也。その時、そろそろ美麗達が入ってきた。
「仲直りしたかい？お二人さん」

「優香の怒鳴り声が聞こえないって事は仲直りしたんでしょ」

「おい尻。それはどういう意味だ」

射殺出来そうなら鋭い視線を浴びせる優香。連夜が慌てて優香の頭を撫で

「落ち着け優香。ここは美麗の病院だぞ」

正確には翡翠の病院なんだが、まあ間違っではない。案の定、優香は大人しくなった。

「優香ちゃんは短気過ぎるでしょ」

少し呆れつつ燈架が言々と、連夜が

「まあまあ。こいつはずっとこういう性格だったじゃないか。今頃言っただけ詮ないことだ」

「確かに」

納得している二人を一瞥して、優香は傷口に手を当てる。よし、異常なし。ゆっくり動かしてみると、痛みはない。

「よし。もう退院していいかな？美麗先生」

「よろしいでしょう」

患部を見もしないで即答する美麗。克弥は不安げに

「大丈夫なのか？無理してんじゃ・・・」

「無理してるんなら退院を許す訳ないでしょ」

美麗が穏やかだがきつぱりと言う。それでも何か言おうと克弥が口を開くと同時に

「優香ちゃんの動きを見る限り、傷は完治ではないけど日常生活には支障がなさそうだから退院を許可した。他にも何か不満が？」

よどみなくすらすら述べる美麗に迫力負けした克弥は小さく

「いえ・・・なにも」

「よろしい」

お茶を飲みだした美麗を横目で見ながら、守弥は意気消沈している

兄の横にいる風に

「兄さんを言い負かせるなんて、美麗様はすごいお方ですね」

「言い負かされる君の兄さんが弱いんじゃないかな」

ふんと鼻で笑う風。竜也がその会話を聞いてたみたいで、爆笑を押し殺そうと必死になっている。優香が不思議そうに竜也を見上げる。竜也がその視線に気づき、身をかがめて優香に耳打ちする。始めはなんだろうという顔をしていた優香の表情に、しだいに笑いが広がっていく。

克弥がそれを見て竜也に殴りかかろうと竜也を追いかけて

「院内はお静かに」

美麗が注意するが、まったく聞いていない。優也もやめるように言うが、声が小さすぎて隣にいる美麗にしか届かなかった。燈架はすでに傍観者に身をていしている。

「お前ら……やるなら他所でやれ。ここには一応怪我人がいるんだから。見えないが」

「連夜。それどういう意味かな」

やけに低い声で問う優香。連夜は素知らぬ顔をして

「だから、こんなに元気な怪我人はいないって意味」

「少しは怪我人を労われ！」

どすつと鈍い音が聞こえ、全員が視線を巡らすと連夜のお腹に優香の拳がもろに決まっていた。連夜は声もなく崩れ落ち、優香はどこか晴れ晴れとした顔で手をパンパンと叩き、埃を落とす。

「うわあ、悲惨」

「連夜君、生きてるか？」

「美麗、どこから持ってきたのか知らないけど木の枝で連夜君突くのやめようよ。連夜君、しっかり」

「痛そうだな。おい、生きてつか？くたばったか」

「兄さん。連夜様に対して失礼でしょう。しっかりして下さい」

「おい守弥。なんで俺だけ様じゃねえんだ」

「守弥。様付けはやめてって言ったでしょ」

「申し訳ありません。風」

「皆。少しは連夜君の心配してあげなよ」

最早、連夜の事など話題にしない兄弟＋風を軽く睨む燈架。優香は立ち上がり体を動かしながら

「うゝ体がなまってるな。徐々に元通りにしないとな」

「それなら俺が相手してやるよ」

竜也が楽しそうに言うと、優香も嬉しそうに笑って

「じゃ、久々に本気でやりますか」

「望むところだ」

お互いに挑発的な態度で不敵に笑いあふ。すると、連夜が壁に手をつきながらも立ち上がり

「俺も混ざる」

「俺もやりたい」

「僕も混ぜていただいてよろしいですか？」

「おっ・・・俺も・・・やりたい」

「全員でやるか」

優香が刀を定位置に装着しながら提案すると、風と燈架と美麗以外の全員が賛成した。

さて行こうかと扉に手を掛けるとすごい勢いで扉が開き、すごい形相の緋寒が仁王立ちしていた。優香達が口の端を引き攣らせながら固まっていると、緋寒の横から零が顔を出し

「優香、ごめん。緋寒が優香が起きたんならって言って聞かなくっ

「零。お前は引っ込んで。優香、どこに行くのかな」

正直に答えたら怒られるのが目に見えてる。が、ここで引き下がるほど優香は聞き分けの良い子ではない。

「外に行くんだけど、何か問題が？」

「問題大有りだ！お前が気を失っている間にも仕事が溜まっているんだ。片付けろ」

「却下」

緋寒が最後の言葉を言い終わる前にはつきり言い切る優香。緋寒の

額に青筋が浮かぶ。だが優香は一步も退かない。

「始まったよ。馬鹿親子喧嘩」

連夜が呆れ果てた声音で頭を押さえる。燈架は微苦笑を浮かべ、美麗はうるさそうに目をすがめる。優也は右往左往して、竜也が大爆笑している。克弥と守弥は目をパチパチさせている。この二人にとつて、光は刺激的過ぎるらしい。

第二十五話 水無月祭り開催

「優香。始末書書いたか」

「何回言われようと書かない。そんなもの誰が書くか」

「お前……っ。これは大事な書類だぞ！それをなんだと思って「うつさいなあ。私は今呪文^{ルーン}の暗唱してるの。黙っててくれない。てか、はつきり言うけどウザい。話しかけんな。目障り」

「親に向かつてなんという口の利き方ツ！！そんなんだからお前は「くたばれ」

緋寒は顔を激怒のあまり真っ赤にしながら優香に詰め寄り、優香は軽やかに逃げながら魔法書に目を落としている。

「まだやってるよ。馬鹿親子喧嘩」

冷たい視線を馬鹿親子に浴びせる凧。正直このノリについていけない。「そんな冷たい目で見ないであげなよ。緋寒にとって唯一のコミュニケーション手段なんだから」

美麗が毎度の事ながら頭を抱えなくなるこの光景を見もせず呟く。まるで見る価値など無いとでも言わんばかりの態度で。では、見もせず何をしているのかというと、体は明後日の方に向けてお茶を飲み、後ろの騒音をバックミュージックにしながら優也と燈架を交えて和んでいるのだ。まあ優也はしょっちゅう後ろを見て体を強張らせているし、燈架は時々「もうやめなよ」と言っているので、実質的に美麗だけが後ろの騒音を完璧に無視して和んでいる。

凧は美麗の言葉をふんと鼻で笑い飛ばす。まあ聖藍と凧がこんな事をしていたら自分の目を疑うだろう。

「父さん。いい加減子供じみた喧嘩はやめてください。大人気ないですよ」

零が見かねて注意するが

「聞いちゃいねえし」

二人は綺麗に無視してぎゃあぎゃあ言い合っている。そろそろ本格

的に止めないといろいろとヤバそうだ。

「はあ。まったく毎度の事ながらウザってえな」

連夜は小声で愚痴り、風に溶けそうなくらい小さな声で呪文^{ルーン}を唱えだす。ルーンが完成に近づくにつれ、不気味な風が吹き始める。まるで嵐の前の静けさのようだ。

「皆、飛ばされないように踏ん張ってね」

一声掛けてから最後のルーンを叫ぶ。連夜が作り出した小型の台風は緋寒と優香の間に割ってはいいる。二人は口を閉じて互いを睨み合い優香は連夜の隣へ、緋寒は病室から出て行った。

「さて、落ち着いたところで仕事しましょうか」

「魅希。祭りの修繕状況は」

優香が問うと、魅希は待つてましたとばかりに身を乗り出して、得意げに報告し出す。

「魅希の王子様達が一日で終わらせてくれたんだ。もう明日には祭り始められたよ」

「凄いじゃん。さすが魅希」

凧が魅希を褒めると魅希は可愛らしく微笑み

「そう思う？やっぱ魅希って超可愛い」

「いや。そんな事誰も言つてないし」

凧が冷静に突っ込むが、魅希はまったく聞いていない。優香は満面の笑みを浮かべ

「皆に知らせてくるね」

そう言うと同時に優香は助走をつけて窓から外に飛び出す。慌てて窓から下を見ると優香は難なく地面に着地して、大声で知らせ回っている。

知らせを聞いた人々は喜びの声を上げている。大人も子供も関係ない。周りが一気に騒がしくなり、凧がうるさそうに目を眇める。

「ゆかゝおまつりできるの？」

まだ幼い子供が優香の服の裾をくいくい引っ張る。優香は膝をつき視線を合わせて

「そうだよ。明日お祭り開催だ」

「ほんとに？おとうさんとおかあさんにもおしえてあげなきゃ」

愛らしい笑顔を浮かべて駆けていく子供を見送り、まだ知らされていない人に伝えていく。

「俺らも行くか。普通に玄関から」

連夜の声を含図に皆は病室をあとにした。

翌日。

ひゅるるる　ドンドン

朝からやかましい花火が上がり人々の歓声があがる。屋台がたくさん立ち並び、売り手が客に呼びかける声があちこちで飛び交う。子供が駆け回り、大人がそのあとを追いかける。時刻はまだ十時。そんな中

「次チヨコバナナ買おうよ」

桜と朱がまじった浴衣を着て子供のようにはしゃぎまわる優香。その後を呆れ顔のメンバーがぞろぞろ歩いていく。

「優香様！まさかこのまま通り過ぎる気じゃないでしょうね」

「この声はたこ焼き屋のおっさんだな」

優香は声をかけてきた男に笑いかける。子供が優香の手を引っ張って「ゆかゝあっちでしゃてきやってるよ。ごうかしょうひんがあたるよ」

「お前ら、豪華の意味ちゃんとわかって言ってるんだろっな」

子供の頭をくしゃくしゃかき回しながら苦笑する。

「いいじゃんか。行こうぜ、優香」

連夜が優香の手を引っ張り走り出す。優香は慣れない浴衣なのでこけないようにバランスをとりながら

「ちよつ。連夜」

「とろとろすんなよ。ほら、早く」

連夜は優香の手を握ったまま足を止めない。後に残されたメンバーは苦笑し合いながら追いかける。

「おじさん！イカ焼き二つね」

「はいよ・・・って優香様じゃないか。連夜様も。デートですか」
優香と連夜は顔を見合わせる。お互いの若干赤く染まった顔を見て、不自然な動きで顔をそむけ

「そつ・・・そんなわけないじゃん・・・ねっ・・・ねえ。連夜」

「そつだよ。・・・そんなわけあるわけない」

（若いつていいねえ）

そんなことを思いながらイカを渡す。二人はぎくしゃくとしながらイカを受け取り、右手足と左手足を一緒に出しながら歩いてく。そして相手の格好をみて楽しそうに笑い出す。

そんな二人を後ろから見ていたメンバーの感想は

「青春だねえ」

お茶を飲みながら下になるにつれ濃い緑色になっていく浴衣を着ている美麗はぼそつと呟く。純白の布地に花火のような鮮やかな刺繍を凝らした浴衣を着た橙架がたこ焼きを頬張りながら

「あの二人は見てて飽きないね」

その隣で青空に川獺を模した雲が描いてある浴衣を着ている凧が竜也の袖を引っ張り

「あの二人ってホント仲いいね。いつからだっけ？連夜があんなに笑うようになったの。てか連夜ってなんで昔はあんなに無愛想だったの？」

「いまでも無愛想な気がするぞ」

克弥が突っ込むが、竜也が無視する。^{スルー}

「そっか。凧は知らなかったんだっけ・・・あいつも親がいないんだよ」

「えっ！？」

「はあ！？」

言われてみれば確かに連夜が親の話することなど一度もなかった。問うように竜也を見上げると、竜也は口を開け閉めしているだけで

続きがでないようだ。優也が言いにくそうに話す。

「連夜は・・・まだ二歳のときに捨てられたらしいんだよ。そして三歳のころ優香に出会って、それ以来ずっと俺らと一緒に生きてきたんだ」

「連夜曰く、『優香は俺の一番大切な家族だ』らしいよ」

零が補足する。克弥は連夜の背中に視線を向ける。陽だまりのような明るい笑い声を上げている連夜は、とてもじゃないが竜也や優也が話したような暗い過去があるとは思えない。克弥がそう思っていると、凧が竜也に

「誰かがなにか言ったのかな」

「ああ。優香が『私の家族にならない？そしたら絶対にお前を一人にさせない』って言ったんだってさ」

「優香らしいな」

思わず笑みが零れてしまう。克弥は凧の顔をまじまじと見て

「お前って笑えたんだな。あんまり笑わないから頬の筋肉が切れてんのかと思ってた」

失礼な奴だ。そんな思いを込めて睨んでやると克弥は「おっかね」と笑い声を上げる。

「馬鹿はほつといて俺らも自由行動にするか。凧・・・その・・・一緒に回らない？」

竜也が恐る恐る言つと、凧は首を傾げ

「何でビクビクしてる訳？私が断ると思つてんの？」

竜也が黙り込むと、呆れたように肩をすくめて

「断るわけないじゃん。私も竜也を誘おうと思つてたのだし」

竜也の顔が輝く。二人は楽しそうに話しながら人波に吞まれていった。

「じゃあ私達も行こうか、守弥」

「はい、そうしましょう。では失礼します。零様、兄さん、美麗様、優也様」

橙架と守弥も残りのメンバーに手を振り屋台を見て回る。優也がお

茶を飲んでいる美麗に

「一緒に回らないッ!？」

「いいよ、行こうか」

優也は滅茶苦茶嬉しそうに笑って美麗とゆっくり歩いていく。

「残ったのは俺らだけですか」

克弥はがくりとうな垂れる。すると、零が申し訳なさそうに

「俺は店番する時間だから行かないと。ごめんね、克弥君」

そう言うのと走ってどこかへ行ってしまった。ぽつんと一人で立っていると、女の集団が寄ってきて

「私達と回らない？」

魅希のがマシに思えるくらい厚化粧をした女が腕にまとわりついてくる。はつきり言って物凄く気持ち悪い。一秒ごとに生気が吸い取られていくみたいだ。すぐさま振り払い

「俺、先約があるんで。すみません」

早口にそう言い放ち、急いで走り出す。後ろから「待ってよ」とか声が聞こえるが、無視する。あんな奴らと一緒に回るくらいなら一人で回ったほうが何倍もマシだ。

「誰かに会うかもしれないし一周ぐるりと歩くか」

第二十六話 祭り巡り

その頃、射的の屋台では。

「よし。また1等!」

「連夜様、もう勘弁してください。このままじゃ商品なくなってしまうよ」

「連夜スゴイ」

腕におさまりきららないほど大量の商品を抱かかえている優香が満面の笑顔を浮かべる。連夜は得意げに笑って

「次はどこ行く?」

「わたあめ食べたい」

ポツケに入れといた袋に商品をつめながら楽しそうに言う優香。連夜は頭を押さえ、呆れまじりの声で

「これで何個目だよ。食いすぎだろう」

「だって美味しいんだもん」

子供のように頬を膨らませる優香。連夜はぼんぼんと優香の頭を叩いて

「はいはい、わかった。わかったから」

「わーい。わたがし屋ヘッソゴー!」

無駄にはりきって走っていく優香を、出来れば見送りたい心境な連夜は

「行つてらっしゃい」

そう言うと同時に優香は戻ってきて

「連夜も行くんだよ。ほら、早く」

ぐいぐい手を引っ張られる。今ならこういう落ち着きのない子供を持つ親の気持ちがいほどわかる。連夜はそんな事を思いながら仕方なく足を動かす。

一方、こちらは金魚すくいの屋台。

「私って才能ないのかな」

「いや。金魚すくい出来る才能あってもあんまし得しないと思うよ」
落ち込む凧を慰める竜也。

「そうかもね。でもそういうのはまったく取れてない人が言うものであって、竜也みたいにたくさん取れてる人に言われても空しいだけだよ」

そう。凧は一匹も取れてないのに、竜也は十匹以上も取れているのだ。竜也は困ったように笑って

「えっと・・・ごめん？」

「なぜ疑問形」

「ごめん」

「謝んなくていいよ。別に怒ってるわけじゃないし」

竜也は数秒考えた後、店主にお金を渡し

「もう一回」

そして、凧に微笑みかけ

「一緒にやってみようよ。上手く出来るかもよ」

「これで最後ね」

「よし。まずはここをこうやって」

出来るだけわかりやすいように教えようと悪戦苦闘している姿を見て
(ちよつとだけ可愛いかも)

そう心の中で呟いて、その考えが可笑しくて小さく笑うと、竜也は耳まで真っ赤にして

「笑うなよ」

どうやら自分の説明のし方を笑われてのだと思ったらしい。凧は口元を隠して

「ごめんごめん」

竜也の説明を聞きながらやってみると・・・

「取れた！」

「すげえじゃん」

竜也も自分の事のように喜んでいる。凧にしては珍しく子供のよう

な無邪気な笑みを浮かべて

「ありがとう、竜也」

「どういたしまして。次はどこ行きたい？」

「そうだな。のど渴いたから飲み物でも買わない？」

「そうしよつか。確か飲み物の屋台は零さんが店出すって言ってたっけ？行こうか」

「うん」

こちらはかき氷屋さん。

「はあゝお茶が美味しいね」

「そうだね」

お茶を飲みながらかき氷を食べている美麗と、のほほんとした雰囲気と同じくかき氷を食べている優也だ。

「やっぱりシロップは宇治金時でしょ」

「俺はレモンのが好きかな」

「レモンも美味しいよね。あつ、お茶飲むかい？」

冷たいお茶を差し出す。優也は微笑を浮かべて

「じゃあもらおうかな」

「どうぞ」

「いただきます」

冷たいお茶が臍にしみて美味しい。ふうと一息ついて

「このあとはどこ行こうか」

「優君が決めていいよ。どこ行きたい？」

そう言われると迷う。駄菓子屋にも行きたいし、焼きそばも食べたい。焼き鳥でもいいかも。顎に手を当て悩んでいると、美麗が

「お悩みのようなんでお昼時だし、昼ごはん食べれるとこ行きませんか？」

「いいね。それじゃあ焼きそばと焼き鳥んどこ行かない？」

「そうしめしよつか」

かき氷の容器を捨て、焼きそばと焼き鳥屋を目指して歩き出した。

そしてここは焼きそば屋。

「やっぱここの焼きそばは美味しい」

幸せそうな顔をして焼きそばを食べている橙架。その隣では、守弥が苦笑しながら

「美味しいのはわかるが、ゆっくり食べるよ。そんなに急いで食べなくたって焼きそばは逃げないから」

「焼きそばは逃げなくても美味しさは逃げる！」

「あゝはいはい。わかったから落ち着いて」

水を渡してため息をつく守弥。橙架は水を一息に飲み乾す。そして、ぐるりと首を廻らせて

「それにしてもすごい人だね。去年より人多いんじゃないかな」

「そうだな。年々賑やかになっていくからな……なんだよ。

俺の顔になんかついてんのか？」

橙架が顔に穴が開くぐらいまじまじ見つめてくるのでそう言つと、

橙架は視線を逸らして

「違うよ。守弥ってみんなの前では敬語なのに、何で私の前では敬語じゃなくなるの？」

「ああ、その事か。そりゃ俺がお前の守護者だからだよ。前にも言っただろう」

「そうなんだけど……」

ふつりと黙り込んでしまった橙架を心配そうに見て

「どした？」

「優香に言われたんだよ。守弥が敬語でしか話してくんないよ……ってさ」

守弥は眉をひそめ困ったように笑って

「長年彩夜の元にいたからその時の癖が抜けないんだよ。努力はしてるんだけど……なかなかうまくいかないみたいだ」

最後のほうは自分を責める口調になってしまった。自嘲気味に笑っている、橙架が勢いよく立ち上がり

「暗い雰囲気は苦手なんで・・・よし、的当てか射的やろっよ。行こう、守弥」

「はっ？俺はそんな子供っぽいものやらなっ・・・離せ！」

「たまにはいいじゃん」

「よくねえッ」

「守弥。お兄さんとおんなじ様な口調になってきてるよ」

「ほっとけっ」

軽口を叩きあいながら歩いていく二人を、眩しい昼の日差しが見守っている。

さて、残った最後の一人はリンゴ飴を買っていた。

「おばさん。リンゴ飴一つね」

「はいよ」

お金を払ってふらふら歩いていく。周りには刀を売っている店もある。魔法書売っている店もある。

「そこのおんた。安くしとくよー！」

「滅多に手に入らない『禁断の魔法書』。なんといつもの半額。買わなきゃ損」

そんな掛け声が飛び交っている間をリンゴ飴を食べつつ歩いていると「わたがし美味しい」

「そりゃよかった。慌てずゆっくり食べろよ」

「うん」

親子のような会話を交わしながら歩いてきたのは

「優香と連夜か」

「ん？克弥じゃん。何食べてるの？」

「一人か。零さんはどうした」

「俺が食ってるのはリンゴ飴で、零さんなら店番に行くって」

優香は考え込むような仕草をしながら

「そっいえば零兄、店番するから来てねって言ったような・・・」

「

「零さんが店番するってことは緋寒が店主の屋台だろう？確か飲み物とか売ってるところじゃなかったか」

「じゃあそこ行こう。リング飴買って」

「はいはい」

連夜が苦笑いして克弥に「お前も来るか？」と問いかける。

「もちろん」

気分が弾んだのがわかった。

「いらっしやい、って優香達じゃん」

「よっす、零兄。ラムネ三つね」

「ハイハイ」

ニコツと微笑み三人分のラムネを水から上げる。優香がお金を出そうと財布をだすと

「お金はいいよ。奢るから」

三人は目を瞬き、同時に

『いやいや。それは悪い（っスよ）』

「いいからいいから」

水から上げたラムネをタオルで拭き、三人に押し付ける。優香は数回瞬きしてから「じゃ、ありがたく」と言って栓を開ける。連夜は更に数回目を瞬いてから「いただきます」と一言呟き、同じく栓を開ける。

「えっ？そこのお二人さん。奢ってもらうの？悪いとかいっときながら？」

克弥がラムネと零を交互に見ながら二人に問うと、二人は顔を見合わせて

「だっていつもの事だ「断る言葉を考えるのがめんどくさい」

連夜の言葉の途中で自分の言葉を言う優香。

「断る理由を考えるのがめんどくさいって……なんて適当な理由」

克弥は呆れたように笑い、零に「じゃあ、いただきます」と言い飲

む。連夜は優香の頭を軽く叩き

「俺の言葉を遮るな」

「ごめんごめん。これからは気をつけると思う」

「思つかよ」

頭を今度は少し強く叩く。優香は頭を押さえて連夜から離れ、克弥の背中に隠れて

「間違えた。これからは気をつけようと思う」

「同じじゃねえか」

連夜が優香を追いかけて、優香が逃げる。自然に克弥の周りをぐるぐる回るようになり、克弥は最初こそ黙っていたが「おい！退け馬鹿克弥。優香を捕まえないじゃんか」

「退かなくていいよ、克弥。連夜に捕まっちゃう」

好き勝手言いまくる二人。克弥はさりげなく連夜の前に足を出し連夜を転かす。連夜は優香を追うことに躍起になっていたのでまともな受け身すらとれず、派手に転んだ。結構痛そうだ。

「っ………何しやがる！！」

モロにぶつけた額を軽く撫でながら連夜が怒鳴る。まあ怒る気持ちはわからないでもないが、自業自得な気がするな。零が成り行きを見守りながら心の中で呟く。間違っても声には出さないよう細心の注意を払って。とばつちりを食うのはごめんだ。

「それはこっちの台詞だ。^{セリフ}本人無視してよくも勝手に言ってくれやがりましたね、君達」

「克弥君？ちよつと言葉遣いおかしいよ」

優香がゆっくり後ずさりながら言っていると、不自然すぎる笑みを顔に張り付け

「そんなことあるわけねえじゃないですか」

「うん。訂正。かなり変だよ」

「なにしてんの？優香達」

声のした方を見ると、凧と竜也が不思議そうにこちらを見つめていた。優香は助かったと言わんばかりの顔で竜也の後ろに隠れ

「克弥が壊れてるんだよ」

「俺は機械か！」

「克弥が壊れてる？そんなのいつもじゃん」

竜也がさらりと普通に言い放った。克弥は標的を変更し、竜也を追いかけ始めた。竜也は「ホントの事言ってなにが悪い」と言いつつ逃げていく。

「うつさいなあ」

凧が心の底から迷惑そうに呟く。優香は困ったような笑みを浮かべている零に

「私お腹減ったから焼きそば買ってくる。零兄もいる？」

「頼むよ。この調子じゃ長引きそうだし、お客もこないだろうし」

「連夜と凧はいる？」

二人が頷いたので「めんどくさいから克弥と竜也分も買ってくる。どうせお腹減ってるだろうしさ」と言い、焼きそば屋へ走っていった。

「行つてらっしゃい」

後ろから聞こえる何かを殴る音や罵り合いを綺麗に無視して優香に手を振る凧と連夜。零は後ろを見て「やつ・・・やめなよ。二人とも」と言っているが、頭に血が上っている二人の少年には届いていない。

「これ、どうすれば止まるかな・・・連夜、凧、いい案ある？」

「うーん。俺はこのまま見てるのが面白いと思いますよ」

「まったく思いつかないですね。零さん、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。ほっとけばそのうち止まるよ」

これに小指の先ほどでも感情がこもってれば「ああ、凧は心配してるんだけど素直に言えないのか」とか思ったかもしれないが、まったく感情がこもってない。それどころかもはや、後ろの喧嘩など無きものにしてのんきにラムネを飲んでいる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そう」

引き彎った笑顔を浮かべて苦笑いする零。近くに置いたお茶に

手を伸ばし、一口口に含み

「優香が戻ってきたら止めさせるか」

更に騒ぎが大きくなるまいよう祈りながらお茶を飲み込んだ。

番外編1 船に乗ろう!?

「船、乗らない?」

凧が言い出した一言により、急遽船に乗ることになったお馴染みのメンバー。しかし

「無理無理無理無理無理無理無理無理ッ!!!!絶対無理!!!!てか丁重にお断りさせてもらいますッ!」

首がちぎれて飛んでいきそうな勢いで左右に振る優香。なにもそこまですなくても。

「優香。潔く諦める。世の中・・・いやこういう場合は諦めが肝心だぞ」

連夜が諭すように言うが、まったく聞いておらず「船に乗るくらいなら死んだほうがマシだ」とかなんとか言っている。もちろん、凧が聞く耳を持つはずもなく

「じゃあ決定ね」

「待てやこら!!」

素早く突っ込む優香。凧は仕方なく優香の方に顔を向けて

「なにか問題が?」

口ではそう言いながら目は「決まったことに口出してんじゃねえよ」と言わんばかりに優香を睨む。優香も負けじと睨み返し、叫ぶ。

「私が船苦手なお前も知ってるだろうっ」

そう。優香は船に弱いのだ。船に乗るといつもの元気は跡形もなく消え失せて、机に突っ伏したまま微動だにしない。そしてそのことは凧も含めて（克弥を除く）全員百も承知のはずだが・・・
「そうなんだ。優香にも弱点があったんだなあ。大発見。メモつとこ」

驚き顔の克弥はメモ帳を取り出し、達筆な筆跡で書いていく。優香は無言でメモ帳を魔法で燃やしギロツと横目で見ると、克弥は両手をあげて邪気のない笑顔を浮かべる。その笑顔に脱力し、ため息を

つきかけたと同時に

「そうだったっけ？最近物忘れが激しくって」

白々しい嘘を真顔で言う凧。

「お前は何歳なんだよ」

怒りのあまり黙り込んでしまった優香に変わって連夜が口を挟む。

凧は表情ひとつ変えず

「十五歳」

克弥と竜也は押し寄せてきた笑いの波を抑えようと顔を背ける。燈架は我冠せずといった態度を崩さない。守弥と優也は笑っているのかわからず曖昧な笑みを浮かべている。美麗はお茶を飲み

「優香ちゃん。苦手は克服しないと」

ともっともらしい事を言っている。優香は美零の頭を軽く小突き

「そういうことは自分の苦手を克服してから言いましょう」

「ナンノコト？」

美麗が半ば棒読みで問い返す。そのとき、魅希が優香を押しつけて割り込んできて手のひらの上に乗っている皿に山になっている苺味のチョコを美零の目の前に突き出し

「美麗が大っ嫌いな苺味のチョコの事だよ」

美麗は視線をずらす、魅希はしつこく目の前に移動させる。

ガッシャーン　ぐしゃっ

魅希の自称超可愛い顔スレスレに拳が飛んできた。拳はそのままの勢いで苺のチョコに当たり、壁に激突して容器が粉々に砕け、中身が派手に飛び散る。

優香は若干引き攣った笑みを顔面に張り付けながら

「美麗ちゃんが嫌いなものを出すな。その自称可愛い顔を変形させたくなかったらな」

「もう、優香ったらいくら魅希が可愛いからって妬かないでよ」

優香はため息をつき、につこると不自然すぎる笑みを浮かべ

「顔面と顔面と顔面。整形するならどこがいい？私優しいから選^{へんけい}ばせてあげるよ」

優也はひいっと情けない声を上げ、克弥の後ろに隠れる。凧は短く一言

「皆、逃げようか」

何かを壊す音を背に受けながら皆は我先にと逃げ出した。

ボ―

汽笛が鳴り響き、船は港をあとにした。海風が心地よく吹いていて、空も快晴。まさに絶好の航海日和。なのだが

「ぎもぢわるい」

船内の机に突っ伏し、青白い顔をしている少女一名。その少女の隣には、例のごとく行儀よく正座をしてお茶を飲んでいる少女。そして「だらしがないな。しゃきつとしなよ。しゃきつと」

盛大なため息をつき机に伸びている少女の背中を叩く背の低い少女。「凧。やめときな。優香は船の上じゃ、陸の上上がった河童同然なんだから」

壁に背中を預け必死に笑いを堪えている端正な顔立ちの少年。

「連夜の言うとおり。ほつといてやれよ、凧」

「竜也がそういうなら」

まだ何か言いたそうにしながら口をつぐむ凧。竜也は凧の頭をぽんぽん叩く。

「あゝん。魅希のビューティーヘヤーがべたべたするゝ」

これまた例のごとく自画自賛している自称美少女の魅希。いつもは突っ込む優香がないのをいいことに、優也の腕に抱きつき言いたい放題だ。抱きつかれている優也は困ったように笑いながらされるがまだ。

「ねゝえ、優。魅希と船内デートしないゝ」

可愛らしくウインクする魅希。優也は頭をかき

「えつとゝ。僕、美麗とお茶する約束してるから……ごめ」
えゝ優は魅希の事嫌いなのか？」

目じりに涙を溜めながら優也を見上げる魅希。優也はおろおろしな

がら何度も謝っている。

「まあまあ、魅希さん。優也困ってんじゃない」

克弥が助け舟を出す。優也は明らかにほっとしたように克弥を見つめる。魅希は頬を膨らませ、克弥に飛びつき

「じゃあ代わりに克弥が魅希とデートして」

克弥はひくつと口の端を引き攣らせ、瞬発力にモノをいわせて素早く逃げる。魅希は化粧をしながら追いかけ始める。

「克弥、ガンバ」

感情のこもっていない声で手を振る竜也。克弥は「助けるよぉ」とか叫びながら甲板へ。魅希はそのあとを追っていく。

「賑やかだね」

零が優香の髪をすきながら苦笑する。

「零さん。うるさいならうるさいって遠慮しないで正直に言っていんですよ」

凧が感情を込めず淡々と言う。

「そっ……そんな事ないよ。賑やかで楽しい航海じゃん」

零はむやみに手を振り回しながら否定する。零の言葉に優香の体が強張る。連夜がしょうがないなあと言わんばかりにお茶を差し出す。美麗特製船酔いした人用のお茶だ。まあ、もっぱら優香専用になりつつあるが。

「……ありがと」

いつもの優香らしくない弱々しい声でお茶を受け取る。さすがの凧もほんの少しだけ心配そうに顔を覗き込み

「ホントに大丈夫？ 顔色物凄く悪いけど、魂どっかに落っことしてきたの？」

「うるせ……え……」

反論する声もいつもとは似ても似つかないほど。これは

「重症だな」

「重症でしょう」

「重症なんじゃん」

まったく心配そうじゃない三人分の声が重なる。優香はその三人を睨みつけ

「お前ら・・・薄情すぎだろ」

「そんな事ありませんよ。優香様はいつも元気な方なので、つい」
守弥が爽やかな笑顔を浮かべながらさりと云う。凧がその通りと言いたげな顔で頷いている。

「ごめんって」

竜也はまったく悪びれず明るく笑いながら謝る。

「笑いながら謝ってもツ・・・ぎもぢわる・・・い」

竜也に食って掛かるうとしたとき、船が大きく揺れ優香は床にしゃがみ込む。零が部屋を用意してくると言い走っていった。連夜は優香を立たせて近くのソファに寝かせる。優香は胸元を押さえてきつく目を閉じる。

「あゝあ。ダメだこりゃ」

竜也が頭を押さえて呟く。美麗は再び酔い止め茶を作っている。優也は美麗が指示するものを腰につけているホルダーから取り出している。

「これって滅多に手に入らない薬草じゃん。どこで手に入れたの？」
凧が一枚の葉を指差しながら美麗に問う。一見どこにでも在りそうな草だが、売れば山がひとつ買えるくらい高価な物なのだ。

形は紅葉に似ている。色は青で、水の国の一部の地域にしか生えない薬草だ。その地の後継者である凧でさえ滅多に実物を見ることは出来ない。

そんな高価な薬草をちらつと一瞥し、世間話をすると同じような口調で

「それは緑に取ってきてもらったんだよ。禁断の森とてもじゃないけど人間が入れるようなところじゃないからね」

一同の脳裏に、いつも寮の和室で寝転んでいる緑色の縞模様が入った猫の姿が浮かんた。

「いや。優香と連夜が前禁断の森に度胸試しに言ったことがあるぞ」

竜也がそのときの事を思い出し笑いしている。優香の様子を見守っていた連夜はギロツと竜也を睨む。竜也は「怖い怖い」と連夜の頭を撫でる。連夜は竜也の背に蹴りを決め

「今度あのときの事を喋ったら、殺すッ」

明確な殺気を込めた声音で宣言する連夜。さすがにヤバイと察した竜也は

「ゴメンナサイ」

「よろしい」

いやに素直に許された。なので余計に恐ろしい。冷や汗が背中を伝う。

その時零が呼びに来て、連夜が優香を背負って零について行く。その背を見送りながら

「さっきの連夜はなかなかの迫力だった。そんなに言われるの嫌なのかね」

連夜に聞こえないよう小声で風に話しかける。風も同じように小声で

「そうなんじゃん？てか私知らないんだけど・・・教えてよ」

「無理っす。俺とて命が惜しい」

顔の前でバツテンしてみせる竜也。風は不服そうに軽く睨む。

「よし。完成」

「優香に持って行ってあげなよ。あとは俺がやっつくから」

「ありがとう、優也」

見ると、美麗がゆっくり立ち上がっていて、反対に優也がしゃがむとこだった。どうやら美麗特製船酔いした人用のお茶が完成したようだ。美麗はそれをこぼさないように慎重に運んでいく。優也は使った薬草の後始末をしている。

「私も手伝うよ。一人じゃ大変でしょ」

「えっ？い・・・いいよ。風は竜君と船内散策でもしてて」

優也は安心させるように笑みをみせて作業続行。

「じゃあお言葉に甘えて。行こうか、竜也」

「そっだな」

番外編 1

「さて、まずはどこ行く？」

「ん〜じゃあ一階に行つて、そこからぐるりと回らない？」

「賛成」

ということで船首にやってきた竜也と凧。眼前には少し雲の広がった空と眩しい太陽、そして青く澄んだ美しい海が広がっている。

「綺麗」

感嘆の声をもらす凧。竜也は眩しそうに顔の前に手を翳し、目を細め「晴れてよかったな」

「うん」

手すりにつかまりあちこちに視線をめぐらす凧。右側ではイルカが飛び跳ね、左側ではクジラが飛沫を上げる。しばらくその景色を堪能した二人は、船内に戻る。

「次はどこ行く？俺としては下に行きたいな。水中散歩したい」

「そうだね。じゃあ行こうか」

そしてやってきたのは船底？的なところ。床を含めてすべて魔法のシルドで覆われていて、外が丸見え。つまり海の生き物が見えるようになっていいる部屋だ。

「ここは私達後継者か守護者。それか私達に認められた人しか入れない場所だからね。優香みたいに騒がないように」

「わかってるよ。てか俺と優香を比べんな。あいつほど馬鹿じゃない」

「それ、優香に言っとくね」

「やめてください。でもお前だっていつも馬鹿って言ってんじゃんか」

「それはそれ。これはこれ」

「どういう屁理屈だ！」

扉の前に立つと、扉の前に火・風・雷・水・光のそれぞれの刻印が

浮かべあがった。風が水の刻印に触れると青い光が数秒輝き、重い音を立てて扉が開いた。

一面青が広がっている。その中を大きさも形も色も違う魚や同じ種類の魚が群れをつくり泳いでいる。

「この光景を見られない優香がちょっと可哀想かも」

それほど綺麗な光景なのだ。竜也も頷いて

「ここならずと厭きないかも」

二人はしばらく神秘的な世界に見とれていた。

所変わって優香が寝てる部屋。

「うゝ早くこの船から降りたい。気持ち悪い」

「優香ちゃん。酔い止めのお茶だよゝこれでちよつとはマシになるはず」

「ありがとう。美麗ちゃん」

美麗からお茶を受け取り一気に飲みほす。少し苦いが、そこから売られているのよりは遥かにマシだ。ほっと一息ついていると優也が遠慮がちに入ってきた。

「えっと……失礼します。優香、大丈夫？」

「大丈夫だよ。美麗ちゃんの薬のおかげだね」

「よかった」

楽しく談笑していると、突然ドアが蹴破られ

「優香ゝ魅希と一緒に散歩しよゝ」

「却下！」

即答するがまったく聞いておらず、抱きついてきた。

「うわっ。気持ち悪いから離れろ」

顔をしかめつつ魅希を押しやると、魅希が潤んだ瞳で

「魅希の事……嫌い？」

とか言ってきたので迷わず

「あえて言っなら苦手かな」

「優香の意地悪」

「なんでそうなる」

なんとか魅希を引き剥がし服の埃を払っていると、連夜が顔を寄せてきた。

「一緒に甲板に出ない？ 魅希がうるさいし逃げるのにちょうどいいじゃん」

「賛成」

こうと決めたら行動は速い。なおもしつこく追ってくる魅希を振り切り甲板へと走る優香と連夜。後ろからのんびりした声で

「あんまり走らないように」 凧さんが怒るよ。この船凧さんのだし「わかってるよ。努力する」

甲板へ出ると心地好い潮風が吹いている。船が揺れると気持ち悪いが、そこまで酷くはない。美麗の特製酔い止め茶のおかげだ。心底から感謝していると、連夜が手を引っ張ってきた。

「優香。ぼけっとしてないで来いよ」

「ちよっ・・・引っ張るなって。おい、人の話を聞け！」

「聞いている聞いている」

「絶対聞いている」

言いながらも足を動かす。手摺につかまり海を見る。青く澄み太陽の光を受けてきらきら輝いている。

「綺麗」

海に来たのは二十回未満だが今日の海はそこで一番鮮明に脳に刻まれた。きつとこんなのにのんびり出来る時間は限られている。

だからこそ、この限られた平和な時間を満喫しに海へ来たのだ。緋寒達には内緒で。風華は知ってるが。

「風が気持ちいいな」 おっ、イルカ発見」

「どこどこ」

子供のようにはしゃぎながら指差す連夜。優香は連夜の指差す方向を見て

「イルカだ！ カワイイ」

身を乗り出してイルカに見入っている優香。連夜は優香が落ちない

ように支えて、ため息をつく。

「後先考えず行動するくせを直せ。お前のお守りをする俺の身にもなっくれ」

文句を言うが、まったく聞いてない。イルカに夢中だ。一発殴ってやりたくなつたが、深呼吸をして抑える。堪える。こんなの日常茶飯事じゃないか。我慢するんだ。俺。

必死に自分に言い聞かせている連夜など気にも留めず、イルカに手を振っている。

まあ、こんなのにのんびり出来んのは今だけだろうし許してやる「優香」魅希と一緒に遊ぼう」

最後の言葉を言い終わる前に優香の手を掴み、問答無用で引きずっていく魅希。優香は振り払おうとしながら

「離しやがれ！お前なんかと遊ぶぐらいなら海に落ちたほうがマシだ！！」

「まあ」優香つたら「恥ずかしがつちゃっ」「誰が恥ずかしがつてると言つた！この馬鹿」

「え」魅希に決まってるじゃん。優香って馬鹿なの？」

「お前はっ」

怒りのあまり瞳が真紅に変わっている優香はガミガミ魅希を怒鳴りつけている。だが魅希が聞く訳もなく、会話がまったくかみ合っていない。第三者からの視点から言わせてもらつと、見世物以外の何物でもない。

競り上がってくる笑いの渦を押さえ込むのに、全神経を使った気がする連夜。今笑つたら確実にとばっちりを食う。それだけは避けなければっ。

話し声がだんだん遠ざかっていく。その声も聞こえなくなり、連夜はようやく思う存分笑うことが出来たのであった。めでたしめでたし。

さて、こちらではまだ凧と竜也が水中を眺めています。そこへ

「なんか外が騒がしくない？」

凧が顔を顰める。竜也が耳を澄ますと確かに騒がしい。しかもその騒がしい何かがこちらに近づいてきている。

「確かに騒がしいな。ちよつと見てこようか？」

「いいよ。どうせ魅希と優香あたりが騒いでるんだろうし。ほつきなよ」

冷たく言い放ち、再び視線を戻す凧。竜也は扉を一瞥して視線を戻す。

ほつとけば聞こえなくなると思っていた騒がしい何かは、確実にこっちに向かってきている。そして

「ほゝら。ここの景色超綺麗だから」。魅希には負けるけど」

「お前はその自称発言いい加減やめたら？軽く殺意が湧くんすけど」
(この声は)

二人の脳裏にいつも騒ぎを連れ歩いている奴等の姿が鮮明に浮かんだ。

「なあ、物凄い嫌な予感がすんだけど……さ。気のせいかな」

「私も物凄い嫌な予感がする。多分気のせいじゃないと思う」

二人は同時に顔を見合わせ、同時に扉に視線を向ける。

ドカッ

扉が真つ二つに割れ、粉々に砕け散った。その扉の残骸を跨いで入ってきたのは二人の予想通りのあの二人。

「魅希と優香」

「何してんだよ」

「凧と竜也！二人してデートかい？」

「騒がしい」

そんなこんなでドタバタな海のたびは終わりを告げた。

番外編 1 (後書き)

バタバタしてすみません。

第二十七話 焼きそば買うのに一苦労？

「焼きそば焼きそばと……人が多くてわかりづらいな」

いつその事ひとまとめに風で吹っ飛ばしてやるのか。それは物凄く名案に思える。だがすぐに首を左右に振り、頭を軽く叩き

「馬鹿なことを考えるな。そんな事をしたら怪我人が続出する」

やはり地道に探すしかないみたいだ。嫌そうに人ごみを見てはあとため息をついていた時

「優君。焼きそば屋は見つかったかい？」

「まったく見つからない。人が多すぎて目当てのものを見つけるのも一苦労なんて……って美麗。歩きながらお茶飲むと転けるよ。足元見えなくて」

優香は声のするほうに視線を向けるが声の主は見つからない。優香の身長は百五十センチ。対して人ごみは百六十後半から百七十前後の男や百六十前半の女が大きな壁となっている。

（絶対大きくなってやる）そう心に誓いつつ美麗と優也を探す優香。人と人の間を流れるような動きですり抜けていくと、人の多さに疲弊しきった美麗と優也の姿を捉えた。

「ようやく見つけた」

「優香ちゃん。連夜君と回ってたんじゃない……」

驚き顔の二人に笑みをみせ「連夜なら風達のとこにいるよ。私は焼きそばを買いに来た」と説明する。

「風達と合流したんだ」

「そうなんだよ。偶然零兄のところで会ってさ。橙架と守弥は？」

「あの二人なら今頃一緒に回ってるんじゃないかな」

美麗がお茶を飲みながらさりとて、優香は

「ふーん。まあ今はそんな事より……」

再び人ごみを嫌そうに見て、動きやすいように浴衣をいじり出す。

「そんな事より？」

「今は焼きそばを買いに行かなきゃ」

「優香ちゃんらしいね」

「美麗ちゃん達のも買ってくるからここで待っててね」

一声言い残し、優香は人波に飲まれていった。

「行っちゃったよ・・・大丈夫かな。去年みたいに焼きそばの原型留めてないのにならないよう願つといたほうがいいかな」

「それがいい」

二人のそんな会話を知らず、優香は紅蓮と紅輝を呼ぶ。去年のよう
うに焼きそばをぐちゃぐちゃにしないようにしないと。連夜になん
て言われるかわかったもんじやない。絶対これ見よがしにため息を
ついて「俺は焼きそばって頼んだつもりなんだけどなあ。はあ俺
が行けばよかったかな。こんなわけわかんない焼きそばもどきを食
うことになるんだたら」とかなんとか言ってくれちゃうんだろ
うな・・・連夜の奴。無意識に拳を握り締めていた。何かを殴り
たい衝動に駆られつつ、駆けてきた紅輝と紅蓮を抱き上げる。紅輝
は素早く優香の肩に乗る。

『祭り楽しんでる？優香』

「もちろん。紅蓮も楽しんでんだろ。誰と回ってるんだ？」

『紅輝と夕軌と朱音、それから・・・』

『全員で回ってるって言えばいいだろう』

『うるさいな。俺は全員の名前あげただけ』

「はい、そこまで。二人にお願いがあるんだけど」

二人は嫌そうに顔を見合わせてため息をつき

『そんなことだろうと思った』

『早く終わらせられるのにしてね』

「大丈夫。すぐに終わるよ。焼きそばを買ってきてくれない？私達
全員分」

『了解』

紅蓮は了承してくれたが、紅輝は返事をせず嫌そうな表情を崩さな
い。

「嫌ならいいよ?」

紅輝の頭を撫でると、紅輝はそっぽ向いて呟く。

『俺は無理だ。この姿じゃ焼きそばを買えてもここまで運べない』

「なんだ。そんな事を気にしてんだ」

内心でほっと安堵のため息をついた。嫌われたのかと思った。

『俺にとつては重大な問題だ』

『じゃあ紅輝が買って俺が運ぶ。それなら問題ないでしょ』

『お前だって全員分運ぶのは無理だろう』

「じゃあこうしよう」

いつまでも続きそうな言い合いに割り込み、紅輝に

「竜の姿に戻れば?そしたら簡単じゃん?」

『そうか。大きさは調節すればいいし、この姿は仮の姿だっけか』

紅輝は目を閉じ、一瞬で竜の姿に変わった。

「頼んだよ」

地を駆ける紅蓮と、空を飛ぶ紅輝を見送る。

「さて、待ってる間なにしようかな」

花火の場所取り。それともこの月に生まれた人の祝いの品の再確認。それか凧と克弥にあげるプレゼントを取ってくるか。

難しい顔をして考え込む。多分花火の場所取りは紅蓮達がやってくれてるはず。去年も一昨年もやってくれたから。祝いの品確認も緋寒がやってるだろう。なら

「プレゼント寮^{うち}から取るか」

だが口に出してから気がついた。自分の格好を見てため息をつく。

「これじゃあ走るのもしんどいな」

実を言うところという動きにくい格好は嫌いなのだ。いつも着ている服も動きやすさを重視した服にしている。端的に言えば、男っぽく露出が少なめの格好のほうが好き。なぜ露出系が嫌いかというと、魅希のそこまでしますかと言いたくなってしまうほどスゴイ格好を間近にみて育ったから。

「仕方ない。魔法使うか」

風を操り寮の自分の部屋に置いたプレゼントを取る。破かないように慎重に。人に当たらないように集中しながらも、出来るだけ速く。

「来た」

手を伸ばすと自分なりに綺麗に包装した赤と青のプレゼントが手に収まった。

「よしつ。うまくいった」

これでプレゼントの心配はない。内心でほっと息をついていると

「買ってきたぞ」

「結構人が並んでたよ」

「ありがとう。二人とも」

焼きそばを受け取りお礼を言つと、どうって事ないとも言つように尻尾を振る。そして紅蓮達は夕軌達の元に戻り、優香は美麗達の元へ。

「優香。遅いね」

凧が何でもないことのように呟く。零は心配そうに表情を曇らせる。

「焼きそば屋混んでるのかな・・・優香、大丈夫かな」

「大丈夫ですよ。零さんはいつも心配すぎ。そのうちはげますよ」さりげなく失礼なことを言う連夜。が、零は気にした風もなく意味もなく左右に視線を走らせている。まるで過保護な父親のようだ。

緋寒より父親っぽい。

そんな事を考えていると、後ろから聞こえる騒音が更に大きくなってきた。それに加え周りの野次馬がいやが二人に「もっとやれ！」とか「やったれ！兄ちゃん」とか物凄くうるさい。まだ二時になったばかりだというのに。この祭りは夜中まで続く。今騒いで後半もつのか心配だ。

優香が買いに行ったのは一時半を過ぎた頃だから、そろそろ戻ってくる。そしたらこのうるさい騒ぎも少しは収まるだろう。

耳を塞ぎ、他人のふりをしている凧はそんな事をぼんやりと考えて

いた。

「うつさいなあ。まだ喧嘩やってるの?」

「優香。遅かったな」

微苦笑を浮かべる連夜。その笑顔を見て女性が何人か倒れていく。もちろんそんな事は慣れているので

「ごめんごめん。思ってたより人が多くて……はい、焼きそば」
「ども……って後ろにいるの美麗と優也?」

「こんちわ」

「お邪魔だったかな……?」

零からラムネをもらい片手を振る美麗と、おどおどしている優也。

連夜は優也の肩を叩き

「邪魔じゃないっての。いい加減おどおどすんのやめい」

「ごっごめんなさい」

「謝んなって」

「連夜、優也君をいじめない。優也君、ラムネいるかい?」

連夜の頭を軽く叩き優也にラムネを差し出す零。優也は何度もお礼を言いながら受け取る。

「さて、皆で食べれる場所あるかな」

凧が左右を見るが、人が多すぎて全然見えない。

「来る途中に座れる所あったよ。ちょうどいた燈架達が場所とつといてくれる」

「それを先に言え」

連夜がバシッと優香の頭を叩いてきた。お返しに腹に一撃決めてから

「言い出すタイミングがつかめなかったんだよ。いちいち叩くな」

「じゃ、そこに行こ」ちよっと待った」

凧が歩きだそうとすると零が待ったをかける。そしていまだに喧嘩している二人を指差し

「この二人も連れてってくれる?」

「もちろん。連れてくよ」

そう言うとき優香は二人の間に歩いていき、二人が突進してきた瞬間

「いい加減にしろ！馬鹿共が！」

二人の腹に拳を叩き込む。野次馬が啞然とする中、前のめりになった二人の首に手刀を叩き込む。そして気を失った二人の襟首を掴み無造作に引きずっていく。長い喧嘩にしては呆気ない幕引きとなった。

「手馴れてるね。こういうことに関しては」

凧の呟きに無言で肯定する野次馬達。連夜は優香が引きずってきた二人の頬を軽く叩き「もしもし生きてるか」と聞いている。その隣で優也が「連夜君。もっと優しく」と注意している。

「さて、全員揃ったことだし行くとしますか」

優香が晴れやかな顔で歩き出した。

「へーそんな事があったんだ。運がなかったんだね、竜也と克弥君は」

同情の笑みを浮かべる燈架。竜也と克弥は美麗に治療を受けている。優香は連夜と楽しそうに話しながら焼きそばをほお張っている。ちなみに先ほどの出来事を燈架に話しているのは優也と凧だ。守弥もぼろぼろの兄を横目で見やりながら話を聞いている。

「まっ、喧嘩してたあの二人が馬鹿だったというだけの話だよ」

凧が酷い締めくくりをする。優也が「その言い方は酷いんじゃない」と言っているがまったく聞く耳を持ってない。

「腹一杯っ」と

優香が空になった容器をゴミ箱に捨てて連夜に寄り掛かる。寄り掛かられた連夜は「食いにくいから退け」と文句を言っているが無視。「ったく」

悪態をつきながらも無理矢理退けようとしなのは、連夜も嫌ではないということだ。小さい頃に学んだ。

「花火上がるの何時だっけか？」

「九時からだよ」

唐突な克弥の質問に凧が即答する。優香が感心したように凧の頭を

ポンポン叩き「すげえじゃん。さすが凧」と言っている。

「気安く触らないでよ」

冷たくそう言い放ち優香の手から逃れる凧。優香は空になった手をぶんぶん振って「冷たいな」と苦笑を浮かべる。

「やだなあ。し・ん・ゆ・うにはこんなに優しいのに」

「区切つて言うな。てか全然優しくないし」

今までの数多の出来事を回想するが、まったく心当たりのない言葉だ。もしかしたら優しくかったこともあった気もしないでもないが・・・・。凧には“冷徹”という言葉が似合っている。

「聞こえてますけど」

じとつと不機嫌そうな声音が耳朶を打つ。しまったとばかりに口を塞ぐが、時すでに遅し。

「口に出して言つてた・・・・?ごめんごめん」

「君の口は縫いつけたほうがいいかもね。なんなら無料でやったげよっか?」

満面の笑みでそんな事を言う凧。正直に言おう。冷徹じゃ甘すぎた。凧への評価の甘さを訂正していると、視界の端で優也が涙目になっているのが見えた。おそらく今の凧の言葉を聞いてびびったのだらう。

第二十八話 寝起きの二人にご注意を

時刻は八時四十五分。花火まで残り十五分を切った。そろそろ緋寒がこの月に生まれた者達を集め始める頃だろう。凧はらしくもなく緊張してらしくせわしなく視線を左右にさ迷わせている。

「緊張すんなって。こんなの毎年あるじゃんか」

腕組して馬鹿にしたように笑う。さっきまでの毒舌はどこへやら。

竜也と美麗と優也が凧の緊張を解そうとしているがまったく効果がない。

「凧。そろそろ出番だ。いい加減腹を括れ」

満潤がそう諭すが、顔色が更に悪くなっただけだった。

「おい。ホントに大丈夫か？」

眠そうに凧の膝の上で丸くなっていた一架にまで心配される始末。

克弥が小声で

「こいつって人前に立つのダメなの？」

「そうなんだよ。親しい人以外とはあんまり……」

同じく小声で返す燈架。守弥は皮肉っぽく

「兄さんには理解できないでしょうね。人の前に立つことを嫌がる人の気持ちなんて」

「ああ、わかんねえよ。あんな奴らジャガイモの袋詰めとか思っときゃいいんだよ」

忌々しそうに吐き捨てる。こいつとは昔っからそりが合わなかった。合わせる気はこれっぽっちもないけど。

そうこうしているうちに緋寒の声で《今から名を呼ばれたものは前に来ること》という放送が入った。耳を澄ませると聞いた事ない名前が呼ばれていく。

《曙 克弥》

「お前って曙っていう苗字だったんだ」

竜也が克弥にそう言う

「そつ。俺は曙 克弥つて言う名前なんだよ」

「そうだったんだ。そういえば私達の苗字知らないよね？私は暁
優香っていうんだ」

時間を確認しながら適当に名乗る優香。連夜は「俺は教えない」と
素っ気無く呟く。

「なんだよ。けち」

子供のように頬を膨らませる克弥。連夜は凧より冷たい声で「けち
で結構。視界から失せろ」

「連夜君こわい」

わざとらしくおどけた声を出す克弥。何故か無性に殴りたくなつて
くるのは私だけだろうか。

優香がイライラしながらそんな事を考えていると、凧達もフルネー
ムを教えていく。

「私は浅緑 美麗つていいます」

「俺は蒼翠 優也です。えつと……よろしく？」

「なに疑問符付けてるの？私は東雲 燈架っていうんだ。今後もよ
ろしく。ほら、竜も自己紹介しな」

「ちつ。蒼天 竜也。仲良くしないでいいから。てか今すぐ俺のフ
ルネーム忘れろ」

舌打ちしながらも嫌々名乗った竜也の肩に寄り掛かり、克弥は実に
気安く「つれないこと言うなよ。仲良くしようぜ、竜ちゃん」

『竜ちゃん！？』

全員腹を抱え笑い転げてる。もちろん本人を除く。竜也は額に青筋
を浮かべつつぞつとするぐらい恐ろしい笑顔を顔面に張り付け、克
弥の肩を叩き

「一回死ね」

言うが否や克弥の頭にかかと落しを華麗に決める竜也。克弥は冗談
でも比喻でもなく地面に埋まった。悲惨だ。さすがに同情を禁じえ
ない状況に思わず両手を合わせる。美麗は流麗な字で和紙に何かを
書いていく。その横では翡翠が墓石のようなものを立てている。

「——美麗。それはちょっとやり過ぎじゃ……」
「出来た」

優也の言葉などまったく聞かず墓石に和紙をかける。内容は「この者は己のネーミングセンスの無さにより、自らの墓穴を掘った。」
「さすが美麗ちゃん。確信をついた一言だね」

優香は克弥の方を見て（ざま〜）と思いながら美麗の頭をポンポン撫でる。連夜もなにも言わないが内心は同じらしく口角が上がっている。

「てめえら……」

地の底から響いてくるような低い声を出しながら克弥が体を起こす。そして怒鳴ろうと口を開くと同時に

《碧空 凧》

びくつと凧の体が震える。竜也が励ますが「聞こえてないっぽいね」「そうみたいだ」

緊張しすぎて周りの言葉が入ってこないようだ。これは重症だ。一同がそう思った特

「緊張してるんだ？」

人の悪い笑みを浮かべながら凧の顔を覗き込む馬鹿一名。
ドスッ

鈍い音が聞こえたかと思うと克弥の体勢が傾いた。凧が克弥の腹を力任せに殴ったのだ。

「……あ、だいぶ緊張解れたかも」

「よかったじゃん。行つてきな」

「うん。ほら、その克弥^{バカ}さつさと行くよ」

「ヘイ」

いつもの覇気はどこへやら。がくりと首を項垂れ蛇行しつつつて行く。竜也はそれを見送りながら顔を顰めている。どことなく不機嫌そうだ。

「どうかしたの？」

気になって訊ねてみると、不機嫌八割突破の声で「べ〜つ〜に〜」

「なんでそんなに不機嫌なんだよ」

連夜が不思議そうに竜也の肩を叩く。竜也はその手を振り払い「気安く触んな」

「なんだと・・・喧嘩売ってんのか。てめえ」

連夜は一気に機嫌が悪くなったみたいだ。あゝあ、誰が止めるんだよ。優香が暢気にそんな事を考えているうちに、竜也が連夜に詰め寄り

「喧嘩売ってきたのはお前だろうが。自覚しろ」

「んだと」

ぎゃあぎゃあ言い合いを始めた二人を眺めて「気が済んだら追いついてきてね」

まったく説得する気の欠片もない美麗がお茶を飲みつつそう言う。優也があわあわしながら「美麗・・・止めようよ。ふっ二人ともやめ『うつせ』ぞ！優也。黙ってる」「ごっごごごごめんなさいっつ」二人同時に怒鳴られ優也はもうすでに泣きそうだ。気の毒に。優香は頭を掻きつつ心の中で優也に手を合わせる。

「優香ちゃん。止めてきてよ。うるさくてかなわない」

「燈架がそう言うなら」

渋々二人の喧嘩を止めるため袖を捲く。そして二人の間に立ち「いい加減やめんか！」一喝し、拳骨を頭に落とす。

『痛ってー！』

「当然の報いだ」

冷たく言い放ち、蹲っている二人の首の後ろを掴み引きずってく。

「痛えよ。離せ！」「暴力魔人」後ろから暴言が飛ぶたび殴って黙らせる。

「ほら、二人とも前見なよ」

痛む頭を押さえながら前を見ると、凧が困ったように笑いつつこちらを見ている。隣の克弥にいたっては爆笑を通り越して悶絶している。うぜえ。

「あいつ戻ってきたら原型留めなくなるまでぶん殴ってやる」

「賛成。俺も混ぜるよ」

つい先ほどまで喧嘩していたくせに、こういう時だけ何故意気投合するのだろうか。しかも内容は優也が涙目になってしまっただけの残酷な内容。

（この二人は敵に回さないようにしよう）

優香と美麗以外の全員が固く心に誓った。

その後、花火が上がリ祭りは終わった。が

「おいてめえ。ちよつと面貸せや」

「え……俺なんかしたっけ？」

「とばけんなよ。いいからあつちに逝こうか」

「いゝや」

ずるずる連行されていく克弥に手を振って

「さて、帰るか。風はあつちの血祭りでも見てけば？」

「誰が見るか！」

「そういう優香ちゃんが見に行けばいいじゃん」

燈架には珍しい意地の悪い笑みを浮かべつつ優香の背中を押す。優

香は若干以上に引き攣った笑みで「遠慮しますばかまつ」

「まあまあ優香ちゃん。あんな血祭りなんかほつといてお茶でも飲

もうよ。あつちのお茶菓子が無い。買ってこなきゃ」

「私が買ってくるよ。何がいい？」

「えっと。饅頭にかりんとうにみたらし団子に大福に和菓子詰め合

わせセットと……。あとは抹茶パフェかな」

正直に言っていないだろうか。そんなに買うお金はない。もつと言っ

ていいなら抹茶パフェはここらには売ってない。

「……すみません。ちよつと無理です」

泣いて詫びるしかなかった。

「明日には治るでしょ。寝かしといてあげな」

美麗が克弥の傷に包帯を巻きつつめんどくさそうに呟く。優香は笑

いを堪えながら頷く。克弥のやられように笑いのつぼを刺激されたのだ。

「じゃ俺はそろそろ寝る。さっきから欠伸が止まなくて困ってんだ」

「右に同じく」

連夜と竜也がすつきりとした顔で欠伸を連発している。二人も包帯を巻いている。克弥よりは傷は浅いが。

「そうだね。こいつ部屋に運んでやりな。そしたら寝ていいよ」

優香は欠伸を噛み締めながら部屋へ歩き出す。自分で運ぶ気はさらさらないうた。後ろから「お前が運べよ」という声が追いかけてくるが、完全無視を貫く。

「こら。無視るな！優香！」

「うるさいよ。竜君」

怒鳴る竜也にお茶を差し出しながら注意する美麗。連夜は嫌そうにしながら克弥の右足を掴んで引きずってく。ちよつと可哀想だ。竜也はお茶を飲み乾し、克弥の左足を掴み同じく引きずってく。

「こいつの部屋どこだっけ？」

「俺とこだ」

「へーお前ら部屋同じなんだ」

「そりゃ守護者だからな」

「三人じゃ狭くねえか」

「空き部屋の壁ぶち破って俺らの部屋にしたから問題ない」

「そつか……………確かに問題な……………問題大有りだ！！」

思わず頷きそうになったが寸前で間違いに気づき連夜の頭を殴る。思いつきり。結構痛そうた。

「痛くな。なにしゃがんだっ」

噛み付きそうな勢いで竜也に詰め寄る連夜。竜也は腕を組み「それはこっちのセリフだ。何してやがんだ、アホなす」

「誰が……………」

肩を震わせながらギロリと竜也を睨みつける。固く握り締めた拳など今にも殴りかかりそうだ。

「アホなすだと!!!」

「お前の事だよ。お・ま・え」

「二度とその単語吐けねえようにその口、縫ってやろうかッ!!!」
「？」

「やってみやがれ。ア・ホ・な・す」

当初の目的はどこへやら二人は夜中にも関わらず殴り合いの喧嘩が始まりそうだ。いや、始まる。優香と美麗はもう部屋に戻っている。克弥はいまだ目を覚まさない。止める人はいない。

ぎゃあぎゃあ罵り合いながら喧嘩開始。はつきり言って安眠妨害以外の何物でもない。うるさすぎる。おまけに物は飛ぶし廊下は壊れるので修理費が心配になってくる。

それよりも心配なのは、寝起き最悪のアイツが目を覚ますことで・・・。

「誰かなあ・・・魅希の眠りを妨げる奴は」

噂をすればなんとやら。派手なピンクの扉が開き、部屋の主魅希が現れた。物凄く不機嫌そうだ。出来れば関わりたくない。

（ヤバッ）

滝のような冷や汗が二人の背中を伝う。

「ねえ・・・君達かな。魅希の眠りを妨げた騒音の元は」

『違いますッ』

必死の形相で即答する。自分達がやったくせになに言ってるんだか。

「そっかゝじゃあ誰かな？魅希の安眠を邪魔したのは」

「えっと・・・」

「それは」

自分達だとは口が裂けてもいえない。だからと言って何かしら言わないと確実に殺られる。

「どうしたの？黙っちゃって」

不思議なくらい明るい声で問ってくる。それが更に恐怖を煽る。

（逃げよう）

（ここにいたら絶対ヤバイ）

迷い無く背中をみせ逃げ出す。

「ねえ・・・どこ行くのかな」

後ろから地獄の底から響いてくるような声が追ってくる。

『すみませんごめんなさい申し訳ありません』

声を揃えて謝りながら逃げていく二人。魅希を相手にするなんて命が危ない。優香でも返り討ちにあってるのだから、自分達が挑んでもよくて相打ち。悪ければ二人共々返り討ちにあうこと必須だ。

「はあはあ・・・まいた・・・か？」

「とりあえず・・・逃げ切れたみたいだ・・・な」

注意深く周囲を見回しながら安堵のため息をつく。久々の全力疾走に疲弊した二人は、壁に寄り掛かり腰を下ろす。

「こんばんわ、お二人さん。ちょーといいかな？」

恐る恐る振り返ると、そこには滅多にお目にかかれない冷笑を浮かべている風が・・・。

「ぎゃーっ！！！！」

二人の絶叫が寮に響いた。

第二十九話 覚悟

翌日の九時半。

「くう。よく寝た……。あれ？」

伸びをしつつぐると視線を廻らす。紅蓮と紅輝はいる。だが、いつも起こしてくれている連夜がない。

「珍しい……。寝坊でもしたのかな」

昨日の騒ぎをまったく知らない優香は、自分の言葉に納得して着替える。

「さうて。朝食朝食」

軽い足取りで部屋から出る。と

「なっなんじゃこりゃ」

刹那、我が目を疑った。優香の目の前には穴だらけになった廊下と、粉々に砕けて元がなにかわからない物が散乱していた。さらに

「克弥つ。何でこんなところで寝てんのさ」

仰向けに倒れている克弥を小突く。いくら初夏だからといってこんなところで寝てたら風邪を引く。

「わゝ、穴だらけ。修理費が心配になるなあ。あつ、おはよう。優香ちゃん」

「美麗。もう少し緊張感を持とうよ。おはよ、優香」

部屋から出てきたのは美麗と優也の二人だ。優香は満面の笑みを浮かべて

「おはよう。美麗ちゃん。優也」

克弥を引きずり美麗達の元へ穴を避けて走り寄る。

「うゝん？……。ここは……。ってなんじゃこりゃ!!」

「起きるなり騒がしい奴だな」

克弥は目の前の惨状を何度も見回して深呼吸をする。

「そうか。これは夢なんだ。ああ、そうに決まってる」

ぶつぶつ独り言を言いながら頬をつねったり頭を振ったり目を閉じ

たり。

「よし。目を開けよう。そしたら……」

克弥が目を開けた。そこには変わらず変わり果てた廊下が。

「――夢じゃ……ない」

「現実逃避は終わったかな？チャラ男君」

「美麗。ちゃんと名前呼んであげよ」そんな事はどうでもいいから朝食食いに行こう」

脳内の八割以上がすでに朝食で一杯の優香。その言葉を合図に一同は食堂へと歩き出した。

「はよつ。優香、美零、優也………克弥」「その間はなんだっ！三枚におろして食うぞコラ」

「ヒイツ」

「いや。突っ込むところはそこじゃない気が……どうしたの？その怪我」

昨日より竜也の体に巻いてある包帯の箇所が増えている気がする。気のせいかな？

竜也は苦笑を浮かべているだけで答えない。

「朝っぱらからテンション高いね。ふぁゝあ眠」

凧が眠そうに目を擦る。私の勘違いかもしれないが、いささか……

・いや訂正。かなり不機嫌みたいだ。

「寝不足かい？」美麗が紅茶かコーヒーをそれぞれに配りながら問うと、凧が竜也の方を一瞥して

「まあね。どつかの馬鹿共の馬鹿騒ぎのせいだ」

竜也は表情を強張らせて申し訳なさそうに凧を見る。

「そういえば連夜見なかった？部屋にいらなくてさ」

竜也が意味ありげな視線を凧へと流す。凧は竜也の視線に気づき、睨みつける。まるで（余計な事言っただけじゃねえぞ。あゝ？）と脅迫してるみたいだ。おっかね。

「おっはよゝ魅希の克、竜、優、守弥、優香、美零、燈架」

滅茶苦茶騒がしい奴が来た。しかも今日も一段と派手な格好だ。

「おはよう、魅希さん。コーヒーと紅茶どっちにする？」

「今日美麗が当番だっけ？コーヒーでミルクたっぷり」

「妙に機嫌良くない？不気味なんだけど。何かの前兆？」

「その言い方はちよつと酷いかな・・・内容的には同意見だけど」

優香と燈架がヒソヒソ話していると、後ろから優也が遠慮がちに

「二人とも・・・飲み物のおかわりいる？」

「私はいいや」

「私は紅茶をもう一杯お願い出来るかな？」

「わかった」

優也は優香のコップに紅茶を注ぐ。優香はお礼に言いつつ紅茶を口に含む。そこへ

「おはよ、皆」

『失礼ですが、どなたですか？』

一子乱れず問いかける。服装と声から推測するに多分連夜だ。だが、頬が腫れているせいで確信がもてない。それに加え瞳が死んでる。

この世の果てを見ちゃいました、的な？

「てめえら・・・全員目が腐ってんじゃねえのかッ！連夜だ。暁連夜」

瞬く間にいつものように戻った連夜。さっきのは幻だったのだろう。

「ごめんごめん」

全然悪びれず適当に謝る優香。連夜の眉間にしわが寄る。

「悪いと思っただけならちゃんと反省しろ。ったく」

悪態をつきながら席につく。朝食を食べだした連夜に何気なく

「悪いと思っただけから反省しなくていい？」と聞いてみた。実際

反省する気は毛頭ないのだ。

「優香。後で説教一時間ね」

「すみません。反省するから許して下さい」

「よろしい」

黙々とご飯を食べていく連夜。優香はほつと胸を撫で下ろし、紅茶

を一気に飲み干す。そろそろ城に行って仕事をしなくてはいけない。面倒だけど。

「お先に」

食器を片付け食堂を出る。

外に出ると眩しい朝日が瞳に突き刺す。

「おはよう。後継者さん」

「おはよ」

「火の後継者さん。帰りは店に寄ってくださいよ。いい魔剣が手に入ったんですよ」

「売れてなけりやな」

それもそうだ、と隣の店のおっさんが刀売りのおっさんの肩を叩く。思いつきり、力一杯。

「じゃあ帰りな」

やんのかコラ、とか言い合ってる二人に手を振り、城へ向かう。

「仕事か。きつと机に山になってるんだろっな」

『当たり前だろ。仮にも最高指揮官だ』

定位置の肩にいる紅輝が顔をすり寄せてくる。その頭を撫でながら想像すると・・・頭が痛くなってくる。だいたい、なんで私が全部の書類のまとめ役なんだよ！いまだに納得できない。あゝ考えるだけで腹が立つてくる。

「そうだ。なにも真面目にやることないじゃんか。サボろう」

『サボるの？賛成』

『お前ら・・・また緋寒にどやされるぞ・・・って聞いちゃいねえし』

それはとても魅力的な提案に思えた。優香は顔を輝かせて、早速足元にいる紅蓮と計画を立て始めた。

「うゝん。何時がいいかな・・・十一時は早すぎる。三時じゃ遅すぎる。難しいな」

そっこう言ってる間に城に着き、階段を上っていく。その間も計画

を練る頭は休めない。だが、考え事をしていると足元が疎かになる。転けないか心配だ。

六階を過ぎた頃もまだあーでもないこーでもないと言っている。そして最後の一段を踏み外し、後頭部から床に激突。

『アホか、お前は。階段踏み外すとか・・・』

『優香の間抜け』

くるりと華麗に回転し、見事に着地した紅輝と被害を被らないように壁際に逃げた紅蓮。

「うつせよ。痛^いつて。まさか階段から落ちるなんて・・・我ながら無様だ」

痣にならないといいけど。と続けざまに呟く。仕事部屋に着いたら冷やしておこう。パンパンと服の埃を落とし、部屋を目指す。

「やっと着いた。つたく、朝から散々な目にあった」

『優香がアホ（間抜け）だからだよ』

「なんだとっ！言わせておけば」

怒りの焰を瞳に灯しながら二人を睨みつける。睨まれた二人は平然としている。扉を開けつつ話を続ける。

「だいたいなあ・・・」

扉を開けて最初に飛び込んできたのは、今も崩れそうなぐらい高く積み上げられた書類の山。次に視界に入ってきたのは足の踏み場もないほど散らかった本。

「あゝらら。こりや仕事する前に片付けだな」

足元にある本から順に拾い上げていく。それにしても、一応女の身でありながらこの散らかり様はさすがに酷すぎる気が・・・。竜也の爪の垢を煎じて飲んだら少しはマシに・・・ならないか。昔からこんなんだし。

紅輝は遠い目をしながらそんな事を考えているとむにゅ

「？なんか踏んだか？・・・って紅輝！ごめん」

慌てて足を退かすと、背中に足跡をつけられた紅輝は全身の毛を逆

立てて一喝。

『何してくれやがったんだ、この野郎ッ！！！！』

思わず耳を塞いでしゃがみ込んだ優香と伏せの格好をしながら『イライラにはカルシウムがいちば』うっせ

ッ。余計なお世話だ』

「まあまあ。悪かったって。わざとじゃないんだよ」

優香は紅輝の頭を撫でつつ本を本棚へ片付け、ようやく本題の仕事に移る。

「はあくどいつもこいつも全部私に押し付けやがって」

山になっている書類の五分の一は、優香が読んで判を押せば終わるものだった。他は優香の仕事が三分の一、残りすべて魅希と凧と克弥担当の書類だった。

怒りをため息に変え、黙々と判を押していく。今のところ読む気はこれっぽっちもない。こんなの読んでいたら日が暮れて朝になっちゃう。

『俺ら暇だから書類読んでいいか？』

「いいぞ」後で教えてくれ」

『ラジャー』

それにしても、判を押すだけなんて単調すぎて厭きるな。音楽でも聴きながらやるか。緋寒に見つかんないように工夫しないと。

優香の気持ちは少し弾んだ。

予感があった。

少しずつ、その瞬間が近づいているのを私達は感じていた。だが、代々の当主達が恐れてきた瞬間が自分の代に訪れたことも心のどこかでやはり、と納得している自分がいた。

とはいえよもや自分の代で、と思っていた。覚悟は、出来ていた。・

・・・はずだった。

「なぜこの時代なのだ。何故優香なのだ」

何度目かわからない言葉を呟く。言ってもせん無いことだとわかつ

ているが。

「成人になるまでに……」

九月末の雨の日。

「やつと暴れられんのか。血が騒ぐぜ」

ニヤツと冷酷な笑みを浮かべ、肩を揺する風牙。氷は黙ったままなにも言わず、雷音は

「ようやくこの時が来て、この雷音いたく感激しております」

春花は戸惑いながら小さな声で「がっ頑張ります」とだけ呟く。彩夜は今までにないくらい冷たい笑みを浮かべた。その笑顔を見た四人は背筋を氷塊で撫でられたような感覚に陥った。こんなに冷たく笑う彩夜は初めてみた。

その笑みを顔面に張り付けたまま彩夜は高らかに宣言する。

「光の時代はもうすぐ終わる。闇の時代の幕開けも近い。まずは、優香のあの力を奪う」

「御意」

雷音が膝を折り礼をとる。春花も雷音に習って慌てて膝をおり「ぎゅ・じゃなかった……御意？」

「戦争の始まりだ」

この宣言により、最後の戦いの火蓋が切って落とされた。

同時刻。最高指揮官室に守護者と後継者が集められた。

「おそらく、彩夜は戦争を仕掛けてくる」

「そろそろ来る頃だとは思っていたが……案外早かったな」
凧はきつく目を閉じる。また人死にを見ることになるのか。だが、次の優香の台詞を聞いた瞬間、そんな考えが吹っ飛んだ。

「この戦争、一般人を巻き込まないために私達だけでやるよ」

「はあ!？」

「どういう……」

優香は窓の外を見る。外は昼にも関わらず暗くなっていた。

「理由は今から話す。私の事も含めて」

「おい！それは……」 「緋寒から止められてるだろうが！忘れたのか？」

「私、隠し事とか好きじゃないんだよね。それにここにいる皆は私が一番信頼している人達だから知って欲しい。これを知った皆が私をどう思おうが……」 覚悟は出来てる」

迷いなく言い切る。優香はこうなったら絶対退かないことをわかってきっている二人は、ため息をつき

「ちっ、勝手にしろ」

「優香がそう決めたなら俺はなんにも言わない」

竜也はソファーに深く腰掛け不機嫌そうに美麗から茶菓子を盗り、天罰が下った。まあ反対しないって事は私の気持ちをくんでくれたのだろう。連夜は優香の頭を撫で、小声で「頑張れ」と呟く。

無意識に呼吸が荒くなる。もしこれを知った皆が離れていたら自分は耐えられるだろうか。いや、耐えるしかない。覚悟したじゃないか。このことを知ったときから。

ごくりと唾を飲み込む。らしくもなく緊張しているみたいだ。

「じゃ、話すよ」

第三十話 明かされた真実

——まだ世界が統一されていた頃、双子の子供が生まれた。その双子は大きくなるにつれ兄は光、弟は闇に染まっていたらしい。理由？知るか。続きを話すぞ。

双子の父親は世界を二つに分け、片方を兄が治める光国。もう片方を弟が治める闇国とした。

だが、時が経つにつれ弟の闇国は廃れていった。反対に兄の光国は豊かになり栄えていった。

人は豊かで栄えてる方。つまり光国へと移っていった。

当然弟はこれを快く思わず、兄の暗殺を決行した。暗殺は成功し、兄は死んだ。

そして世界は闇に支配されていった。

数十世紀が過ぎた頃、兄の光の思想を受け継いだ元光の国民達が大反乱を起こした。

そして戦い続けること数十年。ようやく主権を取り戻した光は弟を追放した。

そして今に至る。

「大雑把に言うところな感じかな。もちろん質問は受け付けないから」

連夜と竜也以外の全員は絶句してる。無理もない。いきなりこんな昔話をおっぱじめられて驚かないものはいないだろう。

「それで・・・それが優香の事とどう関係が？」

「本題はここからだ」

連夜は優香の隣に立つ。何をするでも、何かを言うのでもなく。ただ傍に立つだけ。それが何よりも心強い。

（ありがとう、連夜）

「私の力は・・・闇の力だ」

驚愕に目を見開くもの。手で口を覆い黙り込むもの。目を伏せ静か

に目を閉じるもの。反応はそれぞれだ。

「連夜と竜也は知ってたの？」

いち早く冷静に戻った凧が二人に問いかける。二人は黙って頷く。

「なんで黙ってた！！！」

声を荒げて二人に詰め寄る凧。二人は黙り込んでいる。重い沈黙が一同を包んだ。

「優香が言わないでほしい、って言ったからだ」

全員の視線が優香に流れる。優香は小さな声で「皆に余計な心配をかけないように二人には黙ってと頼んだ」

「なんで優香だけが闇の力を持つてるの？」

「違う。克弥を除いた俺ら全員が生まれたとき闇が宿ったんだ」

優香ではなく連夜が即答した。

「——ッ！」

『……私達も闇の力を継いでるの！？』

「そうだ」

「じゃあなんで私達には封印がないの？」

「優香が……なって……んだ」

「え？」

小さすぎてよく聞き取れない。

「優香が俺らの闇の入れ物になってくれたんだ」

「どういう……」

「つまり、俺ら全員の闇が優香の中に入ってるってことだ」

簡単に話すと

まず、後継者・守護者の印を持つものが生まれる。その全員が闇を持って生まれたので、闇に飲まれてしまう前に炎の後継者・優香に全ての闇が入れられた。

何故優香なのかというと、優香の力は後継者・守護者全員の中でずば抜けて強かったのと炎は浄化を伴う。これなら闇を押さえつけられる可能性が一番高い、と緋寒が判断した。というわけだ。

「浄化なら水だって」

凧が竜也に詰め寄る。竜也は低い声で

「言っただろ。俺らの誰も優香ほど力が強くなかったんだ」

「お前の中に入ったままだったら確実に死んでたぞ」

連夜も冷たく付け足す。その声音には向け所のない怒りが含まれていたのだが、優香以外気づいていないようだ。凧は連夜の胸倉を掴み、怒鳴る。

「仲間を犠牲にして生き延びるぐらいだったら死んだほうがマシだ！！」

「俺だってそうだよ！」

凧の手を強引に振りほどきながら怒鳴り返す。瞳が薄い紅に染まっている。感情が高まっているせいだろう。若干息も荒い。

「凧、連夜だって怒りを抑えてるんだ。落ち着け」

竜也が凧をソファ―に座らせる。そして、その耳元で「これを聞かされたときあいつ緋寒に殴りかかっていったよ。しかも神をも恐れない罵詈雑言を浴びせまくってたよ。あの時の連夜ほど怖かったものはないね」ブルツと身震いをしてみせる。まあ本心から言ってるんだけど。

凧は意外そうな目つきで連夜を見る。感情的になるタイプではないと思っただけだ……。

「とにかく、結論を言つと彩夜の狙いは私だ。正確に言つと私の中にある闇だね」

「でもなんで？闇が欲しいなら優香ちゃんと戦ったときに奪えばよかったじゃん」

燈架がもつともな事を言う。優香は「それだよそれ。そこが引つかかるんだよね」と一人でブツブツ言ってる。ついにおかしくなったか。

「機を待っているんだろう」

克弥が口を突っ込む。言っちゃ悪いが存在自体を忘れかけて「聞こ

えてるぞ」

じとつと睨まれる。慌てて目をそらす優香。克弥は額に青筋を浮かべながら話を続ける。

「優香の闇を取り出すには火・風・水・雷の後継者が揃ってないといけない。だからあの時は退いたんだ。あとは年齢の問題かな」

「年齢・・・それだ！」

「どれだよ」

「私の力と私の中の闇の力が完全に融合する日が十六歳になったときなんだよ」

連夜と竜也を含めた全員が目を見開く。二人もこれは知らなかったらしい。

「でも彩夜はこの事実を知らない。だからこの戦いで私達が勝てば全てが終わる」

「なんで断言できんのさ・・・」

凧がため息をつく。優香は自信満々の笑顔で「大丈夫大丈夫。私、無敵だから」

ちなみに、今の台詞にまったく根拠はない。なのに自信満々で言い切る優香が凄い。

最高指揮官室から解散した後の工作員部隊隊長室。

「戦争か・・・この中の誰かが死ぬのかな」

凧は悲しそうな笑みを浮かべる。目の前で仲間が傷つくなんて・・・見たくない。

「・・・戦争はそういうもんだ。この中の誰が死んでもおかしくない」

竜也は低い言葉で呟く。無差別に人を殺し、物を壊し、ついには自分すら壊してしまう。それが戦争だ。

「優香はどうやってこの戦争を終わらせる気だろう」

「さあな。あいつの考えは読めないからな。そんなのはどうでもいいんだ・・・俺、戦争前にお前に言つときたいことがあるんだ」

ごくりとつばを飲み込む。凧は不思議そうにこっちを見てる。緊張する。だが、今しかチャンスはないんだ。十年間ずっと隠してきたこの気持ちを……言っただ。

「俺……お前の事が……好きだ」

「優香……お前、彩夜と相打ちになるつもりだろ」

「連夜はいつもいつも鋭いね。でも、それしか道はないんだ。この因縁を断ち切るためには、誰かが犠牲にならないといけないんだよ」
「だからっってお前が死ぬことないだろう」

優香に詰め寄る連夜。優香は視線を下に向け、自分の左肩を触る。

「私、小さいときなんて呼ばれてたか知ってる？」

突然話が変わったので連夜は眉をひそめる。いきなり何の話だ？ 優香は下を見たまま続ける。

「忌み子って呼ばれてたんだ」

「忌み子？ なんでお前が……」

「小さかった私の体には収まりきらないほどの闇を飼っていたからね。力を制御できずに感情の揺れに反応して人を傷つけてしまってたからだよ」

初めて聞く話だ。優香にそんな過去があったとは。今とは正反対だ。
「そんなときだよ、彩夜や美麗ちゃんや竜也、優也、燈架に会ったのは。あいつらがいなくなったら今の私はいない。もちろん、連夜も凧も魅希も克弥も守弥もね」

優香は顔を上げる。優香は儚く消えてしまいそうな淡い笑みを浮かべていた。連夜は目を見開く。優香がこんな風に笑った顔など今まで見たことがない。

「だからあいつらを護るためだったらこんな命、くれてやるよ。私は皆が幸せならそれでいいんだ」

きっぱりと言い切る。連夜は声を出そうと口を開くが、肝心の言葉が思いつかず口をパクパクさせるだけ……

「皆には言わないように。言ったら絶対怒られるからね。特に凧は」

「・・・あぁ」

そういうだけで精一杯だった。優香はとうの昔から覚悟を決めてたのだ。いまさら俺が何か言ったとしても無駄だろう。

「俺も、お前に言いたいことがある。黙って聞け」

「なにさ、止めても無駄だよ」

「いや・・・止めはしない。だが、何も死ぬことはない」

こんな時のために緋寒からくすねといたものがある。世界に三つしかないという貴重な封印珠^{ふういんしゅ}。一つが“空の珠”、二つ目が“海の珠”、三つ目が“地の珠”。三つ合わせないと封印の力は発揮できないが、“空の珠”は天の全てを操れる珠。“海の珠”は海の全てを操れる珠。“地の珠”は地の全てを操れる珠。

「うわぁ、綺麗な珠。この珠は今の空と同じ雨が降ってる。面白い」

「お前と彩夜の闇をここに封じ込めば終わりだ」

「なぐるへそ。頭いいね」

「てなわけで、お前これ持つてろ」

「了解。戦争終結後、これに封印してバンバイザイだ」

「これなら誰も死なずに済む」

優香は小さく頷き、外を見る。この因縁に終止符を打ったら、彩夜と再び笑い合えるだろうか。唇を引き結ぶ。そんなわかんないことを思っただけでも仕方がない。

「どうして・・・どうしてこうなる。私はっ・・・あいつと戦いたくないのにッ」

悲鳴のような声が漏れた。連夜にしか言えない本音だ。自らの体を抱き、震えを押さえながら心の中にわだかまっていた物を吐き出す。「私は皆が幸せならそれでよかった。彩夜が笑ってくれてたら良かったんだ！なのに・・・なんでこんな事になる！私は彩夜と戦いたくない。誰とも戦いたくない！」

本当に私は生まれてきてよかったのかな」

連夜は静かに歩み寄り、優香を抱きしめる。優香ははっと息を呑み固まる。

「他の誰がなんと言おうと、お前は生まれてきてよかったんだ。少なくとも、俺は優香に人生を変えてもらった。優香に会って、俺は護りたいって思いを知ることが出来た。それは優香が生まれてこなければ変わらなかったし、知ること出来なかった。俺はあのままのたれ死んでいた」

連夜は口元に綺麗な笑みを浮かべ、続ける。

「生まれてきてくれて・・・俺に手を差し伸べてくれてありがとう」
優香の瞳から大粒の涙が溢れた。今まで生まれてきてくれてありがとうなんて言われたこともなかった。その言葉が凍り付いていた心を優しく溶かしていく。今なら自分の気持ちに正直に向き合える。

「俺、お前のことが好きだ。初めて会ったときからずっと・・・」

第三十一話 決着

初めて会ったとき、天使かと思った。

そこだけ日が差していて、腰まである黒髪がキラキラ輝いていた。笑うと陽だまりのように温かくて、ずっと一人でいた俺の心を解していった。

心臓が勝手に暴れだして、うるさかったのを今でも憶えている。

少女に聞こえてやしないかビクビクしてたっけ？

そのときの想いは今も変わらないまま・・・

優香はなにを言われたかわからないといった顔をして突っ立っている。ちよつと面白い。優香がこんな顔を見ると笑わない自信はない。口元を押さえ、俯く。相手には恥ずかしがっているように見えるだろう。多分。本当は口元に浮かんだ笑みを見られたくないからで・・・。こつそり視線を上げると、優香はまだポケーツとしている。まさに真つ白という名の彫像と化している。いきなりだったかな。

困ったように頭をポリポリ掻いていると、優香が物凄い速さで襟首を掴んできた。あまりのスピードに避けられなかった。

「・・・で・・・」

「はっ？」

「なんで先に言うのさ！私が言おうと思ってたのに！！空気読め空気」

「お前にだけは言われたくない」

連夜が冷静に切り返す。襟首を掴まれていて大変苦しいのだが、言ったとしても聞かないだろう。余計絞められるだけだ。

「私だつてずっと前から連夜の事好きだったのに！告白ぐらいさせて！馬鹿連」

「・・・悪「その間はなんだ！」ベシッ

「痛ッ何しやがる」

「当然の報いだ」

そう言うと、桜は視線を下に落とす。か細い声で

「今は答えられない。この戦いにけりがついたら、ちゃんと答える」

「ああ、待ってる」

二人は微笑み合い、この先に待ち受ける最後の戦いを想う。

せめて双方に死者が出なければいいが……。

そして、その日はやって来た。

「ホントにここでいいの？ 優香」

「うん。ここで私と彩夜は初めて出会った。戦うとしたらこれ以上の場所はないよ」

風質問に寂しそうに答える優香。優香と彩夜の間になにかあったか知らないが、相当仲がよかったんだろう。そんな二人が戦わないといけないなんて……世間は無情すぎる。

「来た」

克弥が前方を見据えて言う。視線を向けると、確かに闇の方々がいる。初めて見る顔もあるが、新しい仲間だろうか？ どっちにしても全力で潰す。

優香はぎゅっと三つの珠を握り締める。これに私と彩夜の闇を封じれば、全てが終わる。彩夜に私の闇を取られたら、この世は終わる。迷うな。躊躇うな。躊躇するな。目をツ……そらすな。

私が迷えば、大切な仲間を護れない。

躊躇えば容易く潰け込まれる。

躊躇すれば全員の心に迷いが生まれる。

目をそらせば、仲間が傷つく。

「やるんだっ。そうしなければ……いけないから」

苦汁に満ちた顔で血を吐くように呟く。やるしかないんだ。そう自分で……決めたのだから。

「行くぞ」

感情をかき消した声で先陣をきる。

「ひゅー。強い奴、俺と殺し合おう（あそぼう）ぜ」

風牙が目を血に飢えた狼のようにぎらぎらさせながら突進してくる。その前に克弥と優也と守弥が立ち塞がり

「俺が相手してやるよ。優也、守弥、下がってろ」

「うん・・・気をつけて」

「わかりました。援護はお任せを」

次いで氷が風のように優香の前に滑り込んできた。氷が魔剣を抜き、優香の脇腹目掛けて横殴りの斬撃を叩き込む。

キーン バチバチバチ

盛大な火花が散り、氷の無表情な顔に微かな苛立ちが宿る。その視線の先には氷の魔剣を止めた竜也と、呪文を詠唱している連夜がいる。

「優香に手は出させないよ」

「邪魔な奴らだ」

冷酷な声と共にめまぐるしく体勢を入れ替えて斬り合う。青黒い魔剣と紺色の魔剣が幾筋もの軌跡を作り、相手の急所を狙う。

「紅蓮地獄」

「詠唱破棄かよ」

優香は慌てて横に飛ぶ。先ほどまで優香がいた場所に狼の顔をした煉獄の炎が通過していく。危なかった。

「光よ」

膨大な光が周囲を染め上げる。近くにいた渚と美麗と優香と春花はあまりの眩しさに目を瞑る。すると耳元に魅希の声で

「ここは私と凧と燈架でやる。優香は彩夜を」

「わかった」

優香は真っ直ぐ走る。眼前には彩夜が黒い笑みを浮かべて待ち構えている。優香は魔剣を抜く。

最後だッ！

「光を潰す」

「お前を止めるッ」

力強く言いきり、桜色の魔剣を振り下ろす。彩夜の漆黒の魔剣がそれを迎え撃つ。二つの魔剣が激しくスパークし、やかましい音が響く。

双方は体が交差すると同時に半身を捻って背後の敵に魔剣を叩き付ける。それぞれの魔剣が一瞬の遅滞もなく急所を襲う。

桜は腕、彩夜は肩から血が飛ぶ。浅く斬ったのだ。

彩夜は身を屈め、優香の足元を払う。優香は上に飛び、それを避ける。そして落下のスピードと風の魔法を利用して彩夜の頭上から魔剣を振り下ろす。

まともに受けていたら体が真っ二つになっていたであろう斬撃を、彩夜は見事に防いで見せた。ボコツと彩夜の立っている地面が陥没する。

「重っ」

彩夜が小さく声を漏らす。優香は地面に着地すると同時に彩夜の顔面に蹴りを入れる。彩夜はこれを仰け反ってかわし、そのままとんぼ返りを二、三回する。

彩夜が前に目を戻すと、死角からびゅんと風を切る音がした。反射的軸足を引き、身を反らす。ほんの数ミリ先を桜色の魔剣が掠めていき、髪が数本舞う。そして同じ返す剣で双方相手に斬りかかった。刹那の間に数合も斬り結び、鏢迫り合う。彩夜は楽しそうに笑い、優香は辛そうに顔を歪ませていた。

「なに、その顔。まさかまだ私を斬りたくないとか思ってる訳？成長しないね。甘過ぎだよ」

「・・・・・・」

優香は答えず、間合いを開ける。彩夜は馬鹿にしたような目付きで優香を見る。油断なく構えながら、ポツケに手を突っ込み何かを取り出す。黒い珠のようなものだ。

「それは・・・？」

「これは人の闇を映すもの。そしてその闇を無理矢理大きくし、人を操る。例えば・・・」

黒い珠を風に向ける。優香は彩夜の意図を察し、叫ぶ。

「逃げる!!」

「遅いッ」

彩夜は黒い珠越しに風を見て、ニヤツとほくそ笑む。風は優香の声に反応して驚き顔でこちらを見ている。

くそッ

彩夜に斬りかかる。だが、間に合うか……。彩夜は黒い珠に何かを囁きかけている。おそらく呪文マジックの類だろう。

術が完成したのか、黒い珠が風めがけて飛んでいく。優香は必死に風に手を伸ばすが、届かない。

その時、風の前に誰かが立ち塞がる。優香は大きく目を見開き、叫ぶ。

「——ッ連夜あつ!!!」

黒い珠は連夜の体内なかに入り、見えなくなる。優香は怒りで真紅に染まった瞳で彩夜に斬りかかる。彩夜は華麗にその剣撃を避ける。そして口元に黒い笑みを刻み

「そんなに怒っちゃって。どうしたの? 大事な人を護れない自分に嫌気がさした?」

「黙れッ」

感情のまま魔法を発動させ、数多の炎が彩夜の体に殺到する。彩夜は手を前に出し、短く

「結」

彩夜の前に結界が現れ、炎を無力化する。

「それは・・・煙幕代わりだ」

彩夜の背後から魔剣を振り上げる。彩夜はそれを受け、怒りと自分に対する憤りに染まった優香の瞳を見て嬉しそうに笑う。

「そうだよ。優香のそういう顔が見たかったんだよ」

視界の隅で連夜が倒れているのが見える。その光景と、昔の光景が重なる。

優香の動きが一瞬鈍る。剣先が、揺れる。

「隙だらけ」

「しまっ」

斜め下から振り上げられた魔剣が視界一杯に映る。優香は本能に従い、身を後ろに投げる。

直撃は避けられた。

ポタッポタッ

優香の額から血が溢れ、頬を伝って地面に落ちていく。まるで泣いているようだ。彩夜はちつと舌打ちをし、魔剣を弄ぶ。

「外したか」「当たってるし」

優香は額の血を拭う。無駄だとはわかっているが。額の傷は浅くても派手に血が出るのだ。

連夜の方に視線を向けると、凧が倒れている。優香は自分の目を疑った。何で凧が倒れてんだ？連夜は・・・

「よそ見しない」

彩夜の魔剣を紙一重で避け、身を沈めて彩夜の腹に蹴りを放つ。もろに食らい、吹っ飛ばされた彩夜は、地面に魔剣を突き刺し、追撃してきた優香の腹にお返し蹴りをお見舞いする。

今度は優香が吹っ飛ぶ番だ。優香は何とか体勢を立て直し、構える。

「上だよ」

「！」

声がするのとほぼ同時に魔剣を持ち上げる。歯を食い縛って衝撃に耐える。優香の立っていた地面がボコツと音を立てて陥没する。

「やるね」

無言で構え直す。

ひゅん

後ろから音が聞こえた。避ける暇などなかった。

ドスツという鈍い音と共に、優香の胸から紅い魔剣が飛び出した。

真紅の双眸が凍りついた。僅かに開いた唇から吐息と鮮血が零れ落ちる。

「・・・・・・・・あつ・・・・・・・・!!」

衝撃が一番強かった。

苦痛が襲ってきたのは、そのあとだ。

呼吸が出来なくなり、胸部を灼熱が駆け巡っている気がする。優香の膝は力なく碎けた。

優香の手は最後まで刀を離さなかった。見上げたものだ。

「優香――！」

誰かの悲鳴が遠くから聞こえる。呼吸と共に鮮血の霧が散る。優香は喘鳴を繰り返しながら瞼を上げる。

霞がかった視界の中で、目尻に涙を溜めている風が目の前に跪膝について懸命に唇を動かしている。必死に何かを言っているようだが、どこか遠くから聞こえてくるようで上手く聞き取れない。

「な……ぎ……」

大丈夫だから、そんな泣きそうな顔すんな。お前は冷静沈着で何事にも動じず、黒い笑みを浮かべてる方が百万倍似合ってたんだから。喉にせりあがってきた血を吐き出す。色を失った唇から血が滴る。胸に刺さったままの魔剣を無造作に引き抜く。手を見てみると、鮮血で真っ赤に染まっていた。

「優……香」

大好きな声が鼓膜に触れる。徐々に狭まっていく視界を無理に大きく開き、声の主を探す。いた。

少し離れた場所にいる。顔をくしゃくしゃにして、声にならない声で、泣いている。

――連夜。そんな顔、すんなよ。お前のせいじゃない。わかってるから。

声に出せないのがもどかしい。届かないのが口惜しい。

「あとは闇の力をもらうだけ」

彩夜がゆっくり歩み寄ってくる。優香は魔剣を強く握り、美麗に掠れた声で

「右手と刀、布か何かできつく巻いて。何があっても落とさないよ

うに」

「・・・わかった」

何かを言いたそうな顔をしつつ、きつく巻いていく。凧はその前に立ち、一連の行為が見えないようにする。

「もらっよ！その力」

彩夜が走り出す。優香は傷口に手を当て、真紅に染まった瞳を開く。ガリ

バチバチバチ

彩夜の魔剣を弾き返す。彩夜は驚愕に目を見開く。あの傷で何故動ける。

「致命傷からそれたか」

そうだとしても、動ける傷ではない。それに出血量も半端じゃないはず。傷口に目をやると

「出血が・・・治まってる・・・」

更によく見ると、火傷を負ったような傷口になっている。まさか・

「自分で傷口を焼いたのか」

「さ・・・ね」

肩で息をしながら攻撃中心の剣技で攻める。思いも寄らない優香の反撃に、彩夜の防御が崩れる。

優香は刀を地面に刺し、ポッケに突っ込んでおいた三珠を取り出し、彩夜の胸に押し付ける。そしてぐっと目を閉じ、短く

「封ッ」

死にかけとは思えないほど鋭い声で命ずる。優香の脳裏を駆け巡っていく記憶がある。

『私に兄弟っていないの？』

彩夜と仲良くなってから幾度となく疑問に思っていた事だ。彩夜とは妙に息が合うし、なんとなく初めて合った気がしない。だから、緋寒に聞いてみたのだ。自分に血を分けた兄弟はいないのかと。

緋寒は驚いたように目を瞬かせ、優しい笑みを浮かべ膝を突く。

『いるよ。名前は暁　優莉。お前の双子の妹だ』

『暁　優莉・・・？』

三つの珠が輝き、彩夜と優香の体から闇を吸い取っていく。優香の傷口が再び開き、優香は刀を支えに体勢を無理に保つ。美麗と連夜は慌てて優香に駆け寄る。それ以外の者はゆっくり離れていく。そうじゃないと自分まで吸い込まれてしまいそうだ。

しばらくすると光はおさまり、彩夜は大地に座り込む。

「一つだけ聞いていい？」

「どうぞ」

「母は？」

「————　暁　優恵」

彩夜の瞳が大きく揺れる。ということは優香は私の・・・。

「終わったな」

この瞬間、長い因縁は表面上だけ終わった。しかし、闇は誰の心にも必ずある。

闇と光の戦いが無くなる事などないだろう。

「後悔、してんのか」

自分の今までしてきたことに。

微かな囁り泣きを聞き、目は空に向けたまま問うと、彩夜は頷き

「してる」

「そっか。ならさ、これから後悔しないように生きなよ。まっ後悔しない生き方なんかないだろうけどさ。せめて自分が正しいって思える道を生きようよ。自分の人生なんだし」

これにて一件落着。　　と思った矢先に、三珠から淡い光が溢れる。優香はどこか悟ったような顔をして、動かない。

淡い光は優香と彩夜を飲み込んでいく。それだけではおさまらず、優香の近くにいた美麗と連夜をも飲み込んでいく。

燈架は優香に向かって手を伸ばす。燈架の横を黒い影が横切って淡

い光に飛び込む。燈架の手が届く前に優香達の姿は掻き消えた。

「え・・・」

燈架は目を見開いた。消えた？何で？上下左右どこを見てもいない。守弥、竜也、優也と風が散らばって探し出す。だが、影も形もない。「いたいどこに・・・」

第三十二 終わりと始まり

「封ッ」

そう叫んだとき、私は確かに声を聞いた。

『代償はお前の記憶だ。それでもいいんだな』

底から響いてくるようなその声は、どこかで聞いたことがあるような声だった気がする。私は即答した。

「いい」

気がついたときには、周囲が真っ暗闇になっている変な所に立っていた。絶対現実世界じゃないし。

『よかるう。これより“空の珠”はお前に仕える。他の二つの玉は、それぞれの主を選ぶだろう』

「その選ばれた二人も記憶がなくなるのか!？」

声を荒げて詰め寄る。珠を使ったのは自分なんだ。選ばれた二人が記憶を取られるなんて理不尽すぎる。

『いいや。記憶がなくなるのはお前だけだ』

ほつと安堵のため息をつき、首にかけといたネックレスを取り出す。この戦いの前に親友全員と写真を撮った。その写真を切り取り、口ケットに入れておいたのだ。

『未契約のものが我を使うと記憶がなくなる。お前にとって一番大切な記憶をな。そこらへんは覚悟しとけ』

「記憶つて・・・自分の事も忘れんの？」

『いいや。友の事だけ忘れる』

「何でそんな限定的なんだよ」

優香は微笑を浮かべつつ問う。友達の事だけ忘れるとかきついんですけど。記憶に空白が出来んじゃないん。

『はあく。いいか。三つのたまにはそれぞれ代償がある。記憶、感情そして体力。ここまではわかるな』

わざとらしいため息と共に呆れた声で説明してくれる。姿が見えな

いのが残念だ。見えてたら顔が原形留めなくなるまで殴ってやるのに。

心底から残念がっている優香を尻目に、説明は続く。

『そしてその中でも特に大切なものをもらうんだ。お前の場合は友と過ごした記憶って訳。わかったか』

「だいたいは。・・・記憶って一生戻らないのか？」

優香は少し寂しそうに笑う。ずっとあいつ等の事友とわからないまま生涯を終えるのはちよつと嫌だな。

『戻る時もあるし戻らない時もある』

「曖昧だな」

それでも戻る可能性があるのは嬉しかった。ちよつと迷ってから言ってみた。

「あいつ等の名前だけ・・・記憶の隅に残しといちゃくれないかい？」

『・・・まあいいだろう。特別だぞ』

「さっすが。話がわかるね」

わざと軽い口調で言ってみる。うん。我ながら完璧だ。優香は目を閉じる。今までの友との記憶が走馬灯のように流れて、消えていく。頬に温かいものが伝う。柄にもなく泣いているようだ。

『お前を元の世界に帰そう』

ゆっくり目を開け、空に手を伸ばす。その手の隙間を記憶が進んでいく。

「さよなら」

『ああ。言い忘れていたが。どこに落ちるかわかんないからそこらへん要注意な』

「先に言っとけよ！！」

あゝらら。せつかくいい終り方だったのに・・・台無しだね。優香は自分のエコーした声に見送られながら消えていった。

——もう一つだけ、お願いしていいか？

なんだ。

私の記憶が消えた経緯をあいつ等に教えて欲しい。あいつ等の事、私の記憶から消えちゃうからさ。酷い事とか、言うかもしれないから。フオローして欲しい。頼む。

わかった

「報告は他にないか？」

「はっ、もう一つだけ。火の後継者様、水の後継者様、雷の後継者様、連夜様、そして克弥様と闇の彩夜がいぜん行方不明です」

「そうか。下がっていいぞ」

緋寒の声と共に兵が去っていく。ここは最高指揮官室。部屋主はいない。

「まだ見つからないんですか？」

竜也は風を抱きしめつつ訊ねる。緋寒が黙したまま何も言わない。竜也は重いため息をつく。あの戦いの日に珠に吸い込まれて以来、目撃情報はおろか行方すら掴めないまま。四力国と闇が協力して捜索しているが、それは希望を打ち砕くだけだった。

「ここまで情報がないと探しようがな」

聖藍も苦渋の表情だ。こんなことは今までなかったので皆どうすればいいのかわからないのだ。緋寒が自分のわかる限りの事を説明する。

「三つの珠のどれかを未契約のものが使うと、“空の珠”を使ったものは記憶を、“海の珠”を使ったものは感情を、“地の珠”を使ったものは力を代償として差し出さなければならない。そして珠の中でそのやり取りをやる」

ということは、優香は三つの珠のどれかを使い、珠の中に吸収されたってことか？いまいち現実味に欠けるけど、まあ納得する他ないみたい。

「記憶って何もかもを忘れるって事？」

燈架が恐る恐る訊ねる。緋寒は難しそうに眉根を寄せ

「それはなんとも言えん。なんせ今まで未契約で使った例がないからな。わからないんだ」

優也が遠慮がちに手をあげて

「え」と。珠に吸収された人はいつ現世に戻ってくるんですか？」

「もつともな疑問だな」

緋寒がうんうんと頷き、横に目配せをする。すると風華が立ち上がり、古いぼろぼろの焼け焦げた跡のある本を優也に放る。優也はその本を両手でお手玉しながらなんとか掴む。ほっとため息をつき、本をまじまじと見つめる。近くで見るとより一層年季の入った本だ。表紙は三つの珠が三角形になっているのかな？これが一体なんだというのだろうか。

「あの・・・」

優也が困ったような首を傾げる。これをどうしたらいいのだろう。

緋寒が「まあとにかく開けてみる」と言ったので、ページを捲る。

風達も集まっっていく。

ページを捲ると、1三珠、2“空の珠”、3“・・・の珠”、4“地・

・・・”という目次があった。もう一ページ捲ると三珠についての説

明が書かれている。

「これって・・・」

珠についての説明書か。所々破れたり擦れたりしていて大変読みにくい。

「“空の珠”のどこ見せる」

竜也が身を乗り出し、優也に指示する。優也は慌ててページを捲っていく。

「これだ。さっきのより更にぼろぼろだ。焼け焦げてるし、敗れるし所々途切れてる。これじゃ知りたいとこ知れるか心配だな。いつの時代の本なんだろう。ここまでぼろぼろになるなんて」

「そんな事はいいからさっさと読めるとこ読んで！」

「すみませんっ」

風に怒鳴られ、ヒイイと悲鳴を上げながら必死に読んでいく。

「えっと・・・契約に至るまで、かな？」

“空の珠”は時にあらゆる天候を・・・り、時にあらゆるも・・・かす脅威と・・・珠で・・・この珠を従えるには、契約をしなくてはならない。契約・至るに・血の証・・・さなければ・・・い。

・証を示さなければならぬ・・・この“空の・・・”を持つに相応しいか・・・るため。・・・しくない者は・・・ここは読めないな」
「いいから次を」

守弥に急かされ、優也は読めそうなところを探す。生憎この続きは破られていてない。隣のページを見ると

「未契約者が珠を使・・・場・・・？」

「そこだ！読んで」

燈架が興奮を隠し切れない声で言う。優也は文章に目を走らせる。

「未契約者・・・珠”使った・・・珠に吞まれ、珠の中で契約を執・・・契約を・・・行うにあた・・・未契・・・は代償・・・出さな・・・なら・・・“空の珠”・・・合は、記憶、“海の・・・”の場合は・・・情、“・・・珠”の・・・、力。

その中でも、“・・・珠”は未・・・にとって大切な・・・記・・・を、“海の珠”は未契約者にとって大事な感情を、“地の珠”は未契約者に・・・一番必要な・・・を差し出すことになる、だって。いつここに帰ってくるか書いてないね」

「役に立たない本だな」

舌打ちして竜也は床を殴りつける。風は暗い顔で部屋の隅に座り込む。ちやっと怖い。燈架は今にも「役立たず」と言わんばかりの顔で本を睨みつける。守弥はどうしたものかと考え込む。優也は他にも何か書いてないか必死に読み進めているが、その後はほとんど読めないか破れているかだった。

「あ・・・・・・っ・・・」

優也は食い入るようにその文章を見つめる。そこだけ破れてはいなかった。擦れて読みにくい字はたくさんあるが。これは・・・もしかして。

「皆、これ違うかな？」

「読んでみて」

まったく期待してない声で促す竜也。凧は物凄い勢いで走り寄ってくる。

「読むね。最後に、未契約者が珠を使って珠の中で契約を終え、現世に出てくる際に時間に歪みが出る。その歪みは一年～三年にかけて生んじ、未契約者が一年から三年のいつに戻ってくるかは誰にも予測できない。って」

「一年から三年」

「今日は丁度一年・・・」

この場にいる全員の脳裏に同じ考えが宿った。すぐに行動に移す。

「今すぐ光と闇の全土を探せ！それからあの森の向こうっ、禁断の森の向こうにある国々にも応援要請をかける。今すぐだ！！」

第三十二 終わりと始まり（後書き）

次回から新章が始まります。
お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9942s/>

闇と光

2011年11月16日03時24分発行